

靈界物語 第七四卷 天祥地瑞 丑の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十四卷』天聲社

1983(昭和58)年05月28日 七版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 渺茫千里 へうぼうせんり

第一章 科戸の風 しなど かぜ（一八六九）

第二章 野路の草枕 のぢ くさまくら（一八七〇）

第三章 篠の笹原しの ささはら (一八七一)

第四章 朝露の光あさつゆ かげ (一八七二)

第五章 言靈神橋ことたまみはし (一八七三)

第六章 眞鶴山靈まなづるさんれい (一八七四)

第七章 相聞の闇さうもん やみ (一八七五)

第八章 黒雲晴明こくうんせいめい (一八七六)

第九章 眞鶴鳴動まなづるめいどう (一八七七)

第二篇 眞鶴新國まなづるしんこく

第一〇章 心の手綱こころ たづな (一八七八)

第十一章 萬代の誓よろづよ ちかひ (一八七九)

第十二章 森の遠望もり ゑんぼう (一八八〇)

第十三章 水上の月すみじやう つき (一八八一)

第一四章 真心まごころの曇くもらひ〔一八八二〕

第一五章 晴天せいてんちようてう澄潮〔一八八三〕

第一六章 眞言まことの力ちから〔一〕〔一八八四〕

第一七章 眞言まことの力ちから〔二〕〔一八八五〕

第一八章 玉野たまのの森もり〔一八八六〕

第一九章 玉野たまのの神丘みをか〔一八八七〕

第二〇章 松下しょうかの述懐じゆつくわい〔一八八八〕

第三篇 玉藻たまもれいざん靈山

第二一章 玉野たまのすがには清庭〔一八八九〕

第二二章 天地てんちは曇くもる〔一八九〇〕

第二三章 意想いさうの外ほか〔一八九一〕

第二四章 誠まことの化身けしん〔一八九二〕

| | | |
|-----|------------------------------|--------|
| 第二章 | 感歎幽明 <small>かんだんいうめい</small> | 〔一八九三〕 |
| 第三章 | 總神登丘 <small>そうしんときう</small> | 〔一八九四〕 |

序文 じよぶん

本卷は紫微天界に於ける國土生み神生みの神業の一端を略述せしものにして、主として太元顯津男の神の活動を説きたり。抑々紫微天界は、幾億萬年の後、修理固成の大經綸によりて、現在の地球と化したれば、紫微天界は無論天體中に於ける、豐葦原の瑞穂の國なる事を知るべきなり。五圈層の天界また億兆無數の大宇宙を形成して、永遠無窮に神人を守り、活動を續け居るなり。國土生み神生みの神業に關し、數多の神々の神名による活動の情態及び言靈の無限の稜威をも明示しあれば、心をひそめて玩味すべきなり。

本書に載するところは、顯津男の神の國土生み神生みせむと、紫微天界中の未だ地稚き眞鶴山の修理固成より、玉野森の清丘に渡られ、主の大神に神勅を請ひ給ふ迄の經緯を示したり。

又天界に於ける言葉は、總てアオウエイの五大父音をもつて通ずると雖も、現代人は七十五聲の言靈を悉く使用せざれば、神代語は解し難きを以て、止むを得

ず茲に三十一文字の敷島の歌を應用して神意を發表したれば、讀者は其意を諒せらるべし。

昭和八年十月三十一日 舊九月十三日

於水明閣 口述者識

總說

本來神皇國日本は、大宇宙の中心に永遠無窮の神護を以て、天津神祖の神の生み成し給ひし聖域なれば、皇御國と稱し奉り、萬世一系に之を統御し給ふ主權者を、スメラミコトと申し奉るも、その言靈の神徳に依りて、成り出で給ひし神國なればなり。大虚空中にスの水火のすみきり澄みきらひつつ鳴り鳴りて鳴り止まざるスの生言靈は、神を生み宇宙を生み大地を生み、永遠無窮に涉りて終にスの神國我葦原の瑞穂の國なる中津國を生り出で給ひ、大宇宙の主宰として日の本の

國を生子給ひ、天照皇大神の生り出で給ひて、天上の主宰と任せ給ひ、御皇孫永久に平らけく安らけく知召す本つ神國にして、現人神に在す萬世一系の天皇鎮まりませる日の本は言ふも更なり、全地の上に皇大神の洪徳を發揮し給ひ、神人安住の聖域と爲し給ひしぞ畏けれ。

言靈學上より見る日の本の日は、則ちにしての本の國なり。故に日の本は日の本なるの意義を知る可し。

瑞月は茲に『靈界物語』の續卷天祥地瑞の著述に際し、聊か言靈學の大意を略解し、天地諸神の活動の意義と我神國日本の一大使命と、皇室の天神より出で尊嚴無比なる理由を説明し奉らむと欲し、重ねて『靈界物語』の續卷を著す事とはなりける。

言靈學の見地よりすれば、七十五聲音の活動各異なりて、聲なるあり音なるあり、半聲半音なるあり、今爰に聲音の區別を明かにせむとす。

アオウエイは天に位して父聲なり。此の五大父聲は大宇宙に鳴り鳴りて鳴り止まず、宇宙萬有の活動力を不斷に與へ給ひつつあり。吾人の耳には餘りの大聲に

して入り難しと雖も、
言靈學に通じたる聖者の耳には能く聞き得るものなり。
則ち、

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ワ | ヤ | マ | ハ | ナ | ア |
| オ | ヨ | モ | ホ | ノ | オ |
| ウ | ユ | ム | フ | ヌ | ウ |
| エ | エ | メ | ヘ | ネ | エ |
| ヰ | イ | ミ | ヒ | ニ | イ |

は純然たる聲にして、

| | |
|---|---|
| タ | カ |
| ト | コ |
| ツ | ク |
| テ | ケ |
| チ | キ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ラ | パ | ダ | ガ |
| ロ | ポ | ド | ゴ |
| ル | プ | ズ | グ |
| レ | ペ | デ | ゲ |
| リ | ピ | チ | ギ |

は音^{おん}なり。而^{しか}して、

| | | |
|---|---|---|
| バ | ザ | サ |
| ボ | ゾ | ソ |
| ブ | ズ | ス |
| ベ | ゼ | セ |
| ビ | ジ | シ |

は半^{はん}聲^{せい}半^{はん}音^{おん}なり。又^{また}アカサタナハマヤワの九^く行^{ぎやう}四^し十^{じふ}五^ご音^{おん}は正^{せい}清^{せい}音^{おん}にして、ラロルレリは濁^{だく}音^{おん}なり。ガゴグゲギ、ザゾズゼジ、ダドヅデチ、バボブベビは重^{ぢゆう}音^{おん}にして、言^{こと}靈^{たま}の重^{かさ}なれるを言^いふ。チチの父^{ちち}を重^{かさ}ぬればチチ（祖^そ父^ふ）となり、八^は八^はの母^{はは}

を重ぬればババ（祖母）となるが如し。パポプペピは撥音なり。

大宇宙の根元を爲すスの言靈を略解すれば、

又は外部を統べて北に活用き北東に活用きて有の極となり、聲の精と現じ東北に活用きて無所不爲也。東に活用きて八咫に伸び極まり、天球中の一切を寫眞に寫す如く現じ、更に滞り無く、結の座を占むる也。次に東南に活用きて數の限りを住み切り、南東に活用きて八極を統べて居り、南に活用きて正中心に集り、南西に活用きて眞中眞心を現じ、西南に活用きて本末を一徹に貫き西に活用きて自由自在也。而して大宇宙の至大天球の内外を涵し保ちて極乎たり。次に西北に活用きては無所不在也。次に北西に活用きて玄々の府となり、有にして空也。而して劫大約を統べ至大天球中の一切を寫して安々の色ありて統べ居るなり。又靈魂球を涵し、涵しの司と現じ、上りては大玉となり、出入の息限り無く澄みきり、呼吸と共に現れ結の柱となり、以て大宇宙に満ち足らひ常住不斷なり。故に宇宙の一切は、スの言靈によりて其太元を生み出されたるものと知る可きなり。

次にウ聲の言靈に就て略解しておくべし。

ウ聲は北に活用きて離れ背き、北東に活用きて更け行く。次に東北に活用きて持ち含み、東に活用きて現在世界の結柱となり、東南に活用きて純美麗み嬉み、南東に活用きて産み産み魂機張り、南に活用きて結び合ひ、南西に活用きて固有の眞と成り眞實金剛現れ味の元素となり、西南に活用きて待ち合ひ氤氳として行く氣發機となり、内部に所を得又中心に鎮まり、父母一に備はる中柱となり、又は鋭敏鳴出で三世を了達し、臼を造りてを容れ鎮り、氏の元祖となり出づる也。

次にア聲の言靈を略解すれば、

ア聲は北に活用きて隠れ入るの義を現し、夜となり、北東に活用きて悉皆歸元り、東北に活用きて陽熱備はり、東に活用きて光線の力を顯し、眼に留まり、東南に活用きて圓象入眼也、南東に活用きて晝となり、大物主となり、世の中心となり、南に活用きて顯出づる言靈となり、南西に活用きて御中主となり、地球となり、西南に活用きて大本初頭と現じ、西に活用きて全體成就現在なり、西北の活用きは一切無なり、北西に活用きて一切含藏なり。其外總じて顯の形にして近く見る言靈なり、大母公にして大仁慈となり、名の魂となり、の本質にして心の塊な

り。其方面を見、低く居る時あり、又幽の形にして遠く達する言靈なりと知るべきなり。

次に才聲の言靈活用を略解すれば、

才聲は北に活用きて受け納め、北東に活用きて漸々來りて凝り、又引く力となり、東北に活用きて蒼天の色と現じ神權強く、東に活用きて大氣凝りて形を顯し、形の素となり、東南に活用きて外面を守り及ぼし、南東に活用きて大氣となり、大成し壓力を現じ、南に活用きて興し助くる言靈となり、南西に活用きて大宇宙及び大地を包み、西南に活用きて起り立ち登り、西に活用きて大氣一如の心となり、親子一如となりて廣く尊し。西北には活用無きなり、北西に活用きて眞愛引力言靈となり、總じて極乎たる眞空即ち現見の蒼天を現じ億兆の分子を保ち、又分子の始末を知悉し、親の位に在りて大に足り大に餘る力を生じ、先天の氣となり、心の關門となり、出入自由にして拒み鳴り、二數而水素力となる言靈なり。

次に工聲の言靈を略解すれば、

北に活用きて外面を開き、北東に活用きて外に顯れ調ひ餘る力なり、東北に活用

きて投げ打ち、東に活用きて自在に使役爲力と現ず、把手又は柄なども此の活用なり。東南に活用きて焼點となり燈となり、南に活用きて内に集る力となり、南西に活用きて世に立ち居り、指し令得る力となり、西南に活用せず、西に活用きて中心を採り束ね、幽を顯に寫し示し、西北に活用きて説き分けの言靈と現じ、北西に活用きて解け、成り、消ゆる、言靈なり。總じて工の言靈は眞の固有にして本末を糺し、引付ける力を現じ、世を容れ居り、明に得る也、又繪也、教令也、指令也、顯照也、與る也、教導の意義なりと知る可し。

次にイの言靈を略解すれば、

北に活用きて始而無爲の義なり。北東に活用きて反射力となり、東北に活用無し。東に活用きて既に極まり、東南に活用きて吹き行く熱となり、南東に活用きて止りとなり、五つ揃ひとなり、南に活用きて成就の言靈となり、南西に活用きて強く足り餘り、西南に活用きて吹き來る熱となり、西に活用きて強く思ひ合ふ力となり、西北に活用きて小天球の證となり、北西に活用きて破れ動く力を現ずる也。總じて大金剛力にして基となり臺となり、強く張り籠り天の内面を司り、勢ひに

添そひ付つき、同おなじく平びやう等どうに動うごく言こと靈たま也なりと知しる可べし。

天てん祥しゃう地ち瑞ずい第だい一いつ卷わん、第だい二に卷わんの天てん神しん等たちの以い上じやう六ろく聲せい音おんの言こと靈たまに、大だい宇いう宙ちゆう及および萬ばん有いう一いつ切さいを産うみ出いで給たまひしその元げん理り真しん相さうを表あらはさむとして、七しち十じふ五ご聲せい音おんの言こと靈たまの中なかにても最もも基き礎そとなるス聲ごゑを始はじめ、アオウエイ五ご大だい父ふ聲せい音おんの活はたら用きを示しめし、この物もの語がたりの大たい要えうを知しらしめむとするなり。

昭和八年十月十九日 舊九月一日

於天恩郷千歳庵 口述者識

第一篇 渺茫千里

第一章 科戸の風（一八六九）

天晴れ天晴れア聲の言靈鳴り鳴りて、八百萬の神生りまし、中に勝れて嚴高き、
嚴の御靈天之道立の神、瑞の御靈太元顯津男の神の二柱、西と東の大宮に、主の
大神の神言もて、各も各もに神業をもち分け仕へ給ひける。天之道立の神は嚴の
御靈にましませば、至嚴至直、寸毫も道の爲には假借し給はず、百神を率ゐ給ひ
て、神々の心ををさむる嚴の御教天の御柱を見立て給ひ、紫微の大宮を初めとし、
神々敬しみ歸順ひて、天津神國の礎、萬世不易となりけり。
次に太元顯津男の神は瑞の御靈に在しませば、至仁至愛の御心もて、普く神々
を守りつつ、神の依さしの大神業、國土造り國魂神を生ますべく、遠き近きの隔
てなく、紫微天界のあらむ限りを馳け巡り、八十比女神等の御樋代に御魂を満た

し水火凝らし、貴の御子をば生まむとて清き赤き正しき心の駒早み、彷徨ひ給ふぞ畏けれ。

太元顯津男の神は、高地秀の峰、榮城山、高照山の聖場に仕へ給ひ、つぎつぎに御子を生まむと日向川を漸く渡り、東雲國の眞秀良場、玉泉郷に進ませ給ひ、茲に神業を終へ給ひ、又もや大原野を駒に鞭うち進ませ給へば、行く手に横はる横河の難所も漸く打ち越えて、近見男の神、圓屋比古の神々等に御尾前を守らせつつ、漂渺萬里の大野原、西南さして立ち出で給ひ、三笠山の麓に廣く宮柱太しく立たし、高天原に千木高知りて鎮まりいます現世比女の神に、「ウ」と「ア」の水火を合せまし、玉手の姫を生み給ひ、再び國土生み神生まむと、百神等を從へ、西南さして進み給ふ。

顯津男の神の率ゐます近見男の神、圓屋比古の神、其他九柱の御供の神の御名は多々久美の神、國中比古の神、宇禮志穗の神、美波志比古の神、産玉の神、魂機張の神、結比合の神、美味素の神、眞言嚴の神と申す。顯津男の神は十あまり一柱の神等と共に、國土造りせむと立ち出で給ひ、漸く夕近くなりければ、原野

の眞中まなかに駒こまを止とどめ、後あとふりかへり遙はるかの空そらなる三笠山みかさやまの方かたを打うち仰あふぎまして、御歌みうた
うたひ給たまふ。

顯津男あきつをの神かみ 天あまの原はらふりさけ見みれば立たつ雲くもの

脚あしのせはしさ我われ遠とほく來きぬ

現世うつしよの比女神ひめがみの心こころを思おもひやり

遙はるかに我われは涙なみだしにけり

男神をがみ我われ涙なみだ見みせじとふり切きりて

立たち出いでし時ときの心こころ苦くるしさ

道みち遠とほく我われは離さかりて居ゐながらも

雲くもの往ゆき來きに比女ひめの俣しのばゆ

忍しのばれぬ事ことを忍しのびて別わかれたる

今けふ日の旅路たびぢの何なにか淋さびしも

わが目路めぢにさやるものなき廣野原ひろのはらに

たそがれむとす蟲の音淋しく

わが駒も疲れにけりな今宵ここに

露の宿りをなさばやと思ふ

高光る天津日光もかくろひて

今日は月さへ見えぬ淋しさ

國土造り御子生まむ業の苦しさを

我はいつまで繰り返すらむ

近見男の神は、御歌うたひ給ふ。

黄昏の幕は下りたりいざさらば

草のまくらに息やすませよ

駿馬の脚もなづみて見えにけり

駒やすませて岐美寝ねませよ

茅草をいやさや敷きて夜の野に

やすませたまふと思へば尊き

雲ひくう大野の末にたれこめて

たそがれ迫る淋しき野邊なり

蟲の音に夕近みて自ら

旅の疲れを覚えけるかな

國土生みの御供に仕へまつりつつ

草葉の露に宿を借るなり

月もなく星光もなき天の下に

淋しく結ばむ一夜の夢を

久方の御空の曇りは現世比女の

神の心よ吾も淋しき

圓屋比古の神は、御歌うたひ給ふ。

澄みきらふ紫微天界の今日の空は

現世比女の神の心か

大空をふりさけ眺め思ふかな

現世比女の清きところを

三笠山尾上にわき立つ白雲は

わが行く野邊を包むなるらむ

久方の空のくもりは現世比女の

なやめる息か北より湧きたつ

草枕旅のなやみを悟りけり

大野のはてに吾たそがれて

行きもならず退きもあへぬ夕暮の

野邊に淋しく蟲啼き渡る

多々々久美の神は、御歌うたひ給ふ。

☐ 大空おほそらを包つつめる雲くもや多た々た久く美みの

神かみははらはむ生いく言こと靈たまに

黒雲くろくもは如何いかに御空みそらを包つつむとも

吹ふき拂はらひませ科戸邊しなどべの神かみ

科戸邊しなどべの神かみの伊吹いぶきに天地あめつちを

塞ふさぐ雲霧くもぎりあとなく晴はれむ

吾われは今いま瑞みづの御靈みたまに從したがひて

雲くも拂はらはむと現あらはれにけり

雲くもよ散ちれ霞かすみよ靄もやよ消きえ失うせよ

わが多た々た久く美みの言こと靈たまの息いきに

ハホフヘヒバボブベビパポプペピ

風かぜよふけふけ科戸しなどの風かぜよ。

天津御空の雲霧を

遠く遙けく散らせかし

荒野に巣くふ曲神も

伊吹拂ひて瑞御靈

出でます道を清めませ

吾は多々久美の神

主の大神の神言もて

荒ぶる神に交こりつ

近見男の神に廻りあひ

瑞の御靈の神業を

たすけまつると勇み立ち

茲にはるばる來りけり

ハホフヘヒ

バボブベビ

パポプペピ

生言靈いくことたまに雲くもも散れち

四方よもの曲津まがつも

散れ散れ失せよ

吾われは神かみなり神かみの御子みこ

生言靈いくことたまに生なり出いでし

總すべての物ものは言靈ことたまの

眞言まことにさやらむ手段てだてなし

ああかむながらかむながら惟神々々

神かみの言葉ことばをのりまつる

斯かく聲音朗せいおんほからかに歌うたひ給たまへば、今いま迄まで満天まんてんを包つつみたる叢雲むらくもは、次第しだい々々しだいに薄うすらぎ行ゆきて、満天まんてんの星光輝ほしかげかがやき初そめ、清涼せいりやうの氣草野きくさのを吹ふき、風芳かぜかんばしく香かをり初そめたるぞ畏かしこけれ。

(昭和八・一〇・二〇 舊九・二 於水明閣 加藤明子謹録)

第二章 野路の草枕(一八七〇)

廣袤千里の原野を覆ひたる夕空の叢雲を、生言靈に吹き拂ひ、
天地を清めたる
多々久美の神の功績を深く感じ給ひて、御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神 ☽ 天晴れ天晴れ多々久美の神の言靈に

天地をこめし雲は散らへり

言靈の御水火に生れしもの皆は

また言靈に消え失するかも

わが行手深く包みし醜雲の

晴れて清しき夕の廣野よ

ひさかた
久方の天津御空の星かげは

こがねしろがね
黄金白銀とかがよひにけり

たたくみ
多々久美の神の功績なかりせば

しなど
科戸の風は吹かざるべきを

とも
わが供に仕へて公はいやさきに

いさを
貴の功を立て給ひける

みかさやま
三笠山頂上つつみし白雲も

いま
今はあとなく晴れ渡るらむ

ゆふつき
夕月の影やうやくに現れて

くさば
草葉の露は照り初めにけり

つきい
月出でて草葉にすだく蟲の音も

すが
いよよ清しくなりにけらしな

あまつひ
天津日はかくろひ給へども月讀の

かみ
神の光に草枕やすし

草枕旅を重ねて大野原

闇と雲とに包まれしはや

久方の空に輝く月かげを

見ればわが靈冴え渡り行く

現世の比女神も今日の月讀を

仰ぎつ吾を偲びますらむ

多々久美の神は、御歌詠ませ給ふ。

はづかしも瑞の御靈の稱言

聞けば嬉しも今宵の胸は

御尾前に仕へ奉りて言靈の

力をはじめて試みしはや

岐美が行く道に雲霧あらせじと

吾^{われ}御^み尾^を前^{さき}に仕^{つか}へ奉^{まつ}りぬ
惟^{かむ}神^{ながら}の生^うみてし天^{てん}界^{かい}にも
雲^{くも}のさやるは怪^{あや}しきろかも
□

顯^{あきつ}津^つ男^をの神^{かみ}、再^{ふた}び御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

□
愛^{あい}善^{ぜん}の道^{みち}をはづして戀^{こひ}となりし

わが胸^{むね}の火^ひゆくもらひにけむ

比^ひ女^め神^がを戀^こふる心^{こころ}の胸^{むね}の火^ひは

雲^{くも}霧^{きり}となりて空^{そら}にあふれしか

現^{うつ}世^{しよ}比^ひ女^め神^がの思^{おも}ひは天^{あめ}を焼^やき

わが靈^{たま}線^{しん}は地^{つち}を覆^{おほ}へり

執^し着^{ぶち}の心^{こころ}ゆ出し黒^{くろ}雲^{くも}の

群^{むら}立^たちにつつ行^{ゆく}手^てなやますも

今日よりは心の駿馬綱締めて

安らに平らに神業仕へむ

天界といへども未だ生み終へぬ

國土は怪しの雲霧立つも

科戸邊の神の伊吹に四方の國

包める雲霧拂ふたふとさ

近見男の神は歌ひ給ふ。

瑞御靈出でます神業の大野原を

包みし雲は晴れ渡りけり

晴れ渡る御空の奥にかがやける

月の面のにこやかなるも

瑞御靈月讀の神を力にて

國土生みの御供仕へ奉らな

見渡せば大野が原に湯氣立ちて

未だ地稚く一樹だにもなし

見の限り草ばうばうの荒野原

分け行く道のはるけくもあるか

主の神の神靈に生れし國土なれば

安く進まむ醜の荒野も

多々久美の神の添ひますこの旅路

雲立ち騒ぐも何おそるべき

多々久美の神の功は風の神

科戸邊比古を生ましめにけり

國土造る道ははるけし吾は今

荒野の夕蟲の音聞くなり

駿馬の足は急げど大野原

果はてしなければ夕ゆふさりにけり

夕ゆふされば蟲むしの音ね清すがしきこの野の邊べに

鏡かがみの月つきは満みち照てらひたり

仰あふぎ見みる御空みそら雲くもなく星ほしの海うみ

浪なみも静しづかに月舟つきふねの行ゆく

月舟つきふねの御空みそら流ながるさま見みつつ

移うつり行ゆく世よを偲しのばれにける」

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

思おもひきや萬里とほの荒野あらのに瑞御靈みづみたまと

月つきに照てらされ蟲むしを聞きくとは

瑞御靈みづみたま行手ゆくてはろけし圓屋まるや比古ひこ

吾われは氣け永ながく仕つかへ奉まつらな

ひさかた
久方の天津高宮伏し拜み

はる
遙けく宣らむ善言美詞を

みやびことあしたゆふへ
善言美詞朝夕を宣りつれど

ときじくも
非時曇るわが魂あやしも

ここに
茲に國中比古の神は御歌詠み給ふ。

かぎ
限りなき廣げき紫微の天界に

くにたまがみ
國魂神を生ます畏さ

うつくは
美しき紫微天界の國中に

くろくも
さやる黒雲わが憎らしも

かみがみ
神々の心の曇り固まりて

い
水火濁りつつ雲となりつる

あさゆふ
朝夕に嚴の言靈宣り上げて

世よの黒雲くろくもを拂はらひ清きよめむ

山やま青あをく水みづ又また清きよき天界てんかいの

中なかに生うまれしわが幸思さちおもへり

言靈ことたまの水い火きを清きよめて主すの神かみの

依よさしの神業みわざ朝夕あさゆふ守まもらむ

御供おんともに仕つかへ奉まつりてこの宵よひを

わが言靈ことたまはひらき初そめたり

主すの神かみの天津あまつま眞言まことの言靈ことたまに

この天地あめつちは彌いや榮さかえまさむ

清きよき赤あかき正ただしき眞言まことの言靈ことたまは

荒あらぶる神かみも和やはぎ伏ふすなり

瑞御靈神みづみたまかみの御供みともに仕つかへつつ

今け日ふ言靈ことたまの功いさををさとりぬ

多た々たく久美くみの神かみの功いさをは言靈ことたまの

清きよき明あかるき水い火きの力ちからよら

宇う禮れ志し穗ほの神かみは歌うたひ給たまふ。

草くさ枕まくら旅たびのなやみの空そら晴はれし

このたそがれを宇う禮れ志し穗ほの神かみ

天あめ地つちに喜よろこび満みつる國くに原はらと

思おもへば吾われは宇う禮れ志し穗ほの神かみ

主スの神かみの神みこと言ことかしこみ瑞みづ御み靈たま

神かみに仕つかへて宇う禮れ志し穗ほの神かみ

宇う禮れ志し穗ほの神かみの喜よろこび花はなとなり

又また月つきとなり四よ方もにかをらむ

行ゆき暮くれて闇やみに包つつまれ淋さびしかる

夕ゆふへを出いでし月つきは宇う禮れ志し穗ほ

御子みこ生うませ喜よろこび勇いさみ宇う禮れ志し穂ほの

いとまもあらに立たち出いで給たまひぬ

幾とほどほしく千里あら荒野のを渡わたり瑞御靈みづみたまの

岐美きみと居ゐるかも月つきの夕ゆふへをら

國中くになか比古ひこの神かみは再ふたび歌うたひ給たまふ。

天あ晴はれ天あ晴はれ天あ津あまつ日は照てる月つきは満みつ

野のに花はな匂にほひ蟲むしの音ね冴さえたる

久方ひさかたの天津神あまつみくに國くに中なかに

吾われは樂たのしも神業みわざに仕つかへて

瑞御靈みづみたま神かみの神言みことの功績いさをしに

この曠原ひろはらや神國みくに樹たつらむ

國土くに造つくり國魂くにたま神かみを生うまさむと

勤いそしみ給たまふ功いさ畏かしこし

美うつくしき天あめと地つちとの國くに中に

比ひ古こ比ひ女め二にしん神しんは御み子こをう生ませり

永とこ久しへの神みくに國くにの種たねと瑞みづ御み靈たま

生うませる御み子こに國くには拓ひらけむ

瑞みづ御み靈たま神かみの御み稜いづ威づぞ高たか照てるの

尾をのへ上は遙はけし月つき讀よみのかげは

瑞みづ御み魂たま朝あさな夕ゆふなをさすらひて

八や十そ比ひ女め神がみになみだな涙なそそがす

尊たふとさをおも思おもへば朝あした夕ゆふ暮くれの

わが魂たましひは曇くもらひにつつ

月つき讀よみの神かみのかがやく夕ゆふの野のに

駒こま諸もろ共ともに安やす寢いするかも

神かみ々がみはいねましにけむ草くさの根ねに

𪛗いびきの浪なみの打寄うちよせにつつ
𪛗

斯かく各おのも各おのも述懐じゆつくわいを歌うたひ給たまひて、一いち夜やを明あかし、天あま津つ日ひの豊とよ榮さか昇かのほりし頃ころ、近ち見か男みの神かみ先頭せんとうに、瑞みづの御靈みたまの神柱みはしらは、駒こまに鞭むちうち、際限さいげんもなき草莽くさぼう々ぼうの野のを、御歌みうたをうたひながら進すすませ給たまふぞ畏かしこけれ。

（昭和八・一〇・二〇 舊九・二 於水明閣 森良仁謹録）

第三章 篠しのの笹原ささはら（一八七一）

國くに中なか比古ひこの神かみは一行いっかうの先頭せんとうに立たち、道みちの案内あないをなさばやと、馬ば上じやうより聲こゑも清すがしく御歌みうたうたひつつ進すすみ給たまふ。

𪛗 紫微しびてん天界てんがいの國中くになかに

もも 百の神等ましましてど
こと 殊に目出度き瑞御靈
す べてのもの種となり
やまか 山川草木の果迄も
いのち 生命の水をあたへつつ
みくに 神國を開き神を生み
うづ 貴の神業依さしまし
はて 果しも知らぬ國原を
とほ 遠き近きのへだてなく
うづ 貴の言靈生り出でて
まこと 眞言の道に生かせつつ
すす 進ませ給ふぞ畏けれ
われ 吾は國中比古の神
けふ 今日の御供に仕へつつ

道の隈手も白雲の

あなたの遠き大空を

目あてに進む野路の旅

ああ惟神々々

生言靈の幸ひて

主の大神の御依さしの

神業もれなく落もなく

うま怜に委曲に永久に

仕はせ給へ吾は今

遠の大野に霞みたる

眞鶴山を目ざしつ

草野を分けて進むなり

天津御空に照り渡る

日は明らけく天つとふ

月つきは清すがしく眞ま晝ひる間まを

眞ま白しろに冴さえて守まもりまし

科し戸なの風かぜはほどほどに

我われ等ら一いつ行かうの神かみ々がみの

面おもてをなでて香かをるなり

百も草もぐさ千ち草ぐさ生おひ茂しげる

中なかより見みゆる紅くれなゐの

花はなの姿すがたのやさしさは

常とこよ世よの春はるを歌うたふなり

蟲むしの聲こゑ々々冴さえにつつ

わが行ゆく旅たびの草くさ枕まくら

げにも樂たのしき次しだい第だいなり

ああ惟かむ神な々ながら々かむ

恩み頼たまぞたふとけれ。

見みの限かぎり遠とほき大野おほのの果はてにして

ぼんやり霞かすむは眞鶴山まなづるやまかも

眞鶴まなづるの山やまに百神ももがみつと集つどひますと

吾われは聞きき居をり御供みともに仕つかへむ

いざさらば駒こまに鞭むちうち脚あし早はやめ

夕暮ゆふぐれまでに吾われ着つかむかな

瑞御靈みづみたまよ吾われは一足ひとあし御先おんさきに

眞鶴山まなづるやまをさして進すすまな

顯津男あきつをの神かみはこれに答こたえて、御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 國中くになか比古神ひこかみの神言みことの言擧ことあげを

うべなひ我われは公きみを立たたさむ

眞鶴まなづるの山やまははろけし駒こまに鞭むち

うちて急がせ夕告ぐる迄に

國中比古の神「いざさらば瑞の御靈よ百神よ

吾は進まむ眞鶴の山に

百神よ瑞の御靈を守りつつ

安く來まसान眞鶴の山に

と歌ひのこし、一鞭あてて藁地に草野を駆け出し給ふ。その勇ましき後姿を見やり乍ら、近見男の神は歌ひ給ふ。

「勇ましも國中比古の神言に

吾嬉みて言の葉も出でず

先頭に立ちて進みし國中比古

神かみは早はやくも見みえずなりける

駿馬はやこまの脚あし早はやみかも御姿みすがたは

もえ立たつ霧きりの中なかにかくれつ

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

今日けふも亦また暮くれむとするか道遠みちとほみ

眞鶴まなづるの山やまの影かげほのかなり

今宵こよいまた又野邊のべにいぬると定めさだめつつ

静しづかに行ゆかむ篠しのの笹原ささはらを

今いままでは芒すすきの野邊のべを渡わたり來きて

また迎むかへるかも篠しのの笹原ささはら

さらさらと篠しのの笹原ささはら風かぜ立たちて

ものさわがしも心こころおちゐらず

曲神まががみのひそむがに思おもふ笹原ささはらに

心こころしませよ百ももの神等かみたち

天津あまつ日は雲くもにかくれて科戸邊しなどべの

風かぜは俄にはかに吹ふきすさびつつ

多々たたく久美くみの神かみよ言こと靈たま宣のり上あげて

野邊のべのあらしをやすませ給たまへ
㊦

多々たたく久美くみの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 科戸しなどひ比古こし科戸しなどの比女ひめにもの白まをす

岐美きみの出いでまし静しづまりてゐよ

國土くに造つくり御子みこ生うまさまむと出いで立たたす

瑞みづの御靈みたまのみゆきなるぞや

吾われこそは多々たたく久美くみの神かみ科戸邊しなどべの

風司かぜつかさどる御魂みたまなりける〚

と歌うたひ給たまへば、忽然こつぜんとして荒野あらのを吹ふきすさびし風かぜは鳴なりを鎮しづめ、御空みそらの雲くもは四方よも
に散ちりて、天津日あまつひの光かがくわうくわう煌くわう々と輝かがやき給たまひぬ。
宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 荒野あらの吹ふく風かぜのすさびも止とどまりぬ

多々たたく久美くみの神かみの言靈ことたまの水い火きに

瑞御靈みづみたまみゆきの道みちにさやりたる

風静かぜしづまりぬ篠しのの笹原ささはら

雨雲あまくもの行ゆき交かふ影かげも消きえうせて

空そらは青海あをみの原はらとなりぬる

青海原あをみはら渡わたらふ月つきの御光みひかりは

地つちの底そこまで輝かがやくがに思おもふ〚

斯く歌ひつつ笹原を分けて進み給へば、濁流滔々と漲れる【かなり】に廣き河
東西に流れ、一行の行手を横ぎりゐたり。
近見男の神は濁流の河邊に立ちて、馬上より歌ひ給ふ。

八千尋の水底までも濁りたる

この泥河よいかに渡らむ

國中比古の神はこれの泥河を

駒に鞭うち渡らしませるか

神の守る紫微天界にかくのごと

濁流あるとは思はざりしよ

言靈の水火を清めてこの河を

澄まし渡らむか惟神吾は

黄昏に早や近づきて濁流を

前にひかふる旅のさびしも

顯津男の神は儼然として御歌詠ませ給ふ。

主の神の依さしのままに國土造る

瑞の御靈よとく澄みきらへ

我は今瑞の御靈と現れて

國土造るなり濁りよ去れかし

濁るべきもの一つなき天界を

流るる水のあやしまれける

サソスセシ水澄みきらひわが渡る

河を清めよ河守の神

斯く歌ひ給へば、さしもの濁流も次第々々にうすらぎつつ漸く澄みきりて、底の砂利の數さへ見ゆる迄に至れり。圓屋比古の神は、この神徳に驚き給ひて御歌うたひ給ふ。

さすがにも瑞の御靈よ泥河は

生言靈に清まりにけり

神々の心にごりてこの河の

水はかくまで穢れたらむ

國中比古神の神言もこの流れ

澄ませて渡り給ひたりけむ

いざさらば向つ岸邊にうち渡り

また一夜さの草枕せむ

茲に圓屋比古の神を先頭に、十一柱の神は駒の轡を竝べて、にごり河の水瀬を
やすやす向ふ岸に着き、各々馬に水飼ひ、草を喰せ終り、各も各もサソスセシの
言靈の水火を呼吸し、腹をふくらせ寢に就き給ひぬ。

(昭和八・一〇・二〇 舊九・二 於水明閣 谷前清子謹録)

第四章 朝露の光（一八七二）

抑々紫微の天界は、太陽の光強く明るきこと、現代我が地球の七倍にして、月の光又之に準ずると雖も、妖邪の氣鬱積して、未だ全く神徳に潤はざる遼遠の國土は、矢張り我が地球の如く晝夜の區別生じ、夜は暗く、僅に月星の薄雲を透して地上を照すのみなりしなり。故に顯津男の神、紫微天界を隈もなく明し清め、國土造り神生みせむと、百の艱みを忍びつつ四方を廻り給ふぞ畏けれ。茲に濁河の汚れも「サソスセシ」の言靈の水火によりて清まりたれば、清美河と言ふ名を與へ給ひつつ、河岸の草の生に十一柱の神は夜を明し給ひぬ。夜はほのぼのと明け放れ、どんよりと重き御空の奥より、大太陽は茫然として鈍き光を投げつつ昇らせ給ひぬ。顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。

罪穢ここに集り濁河

生言靈に清まりしはや

今日けふよりは清美きよみの河かはと名なを稱たへ

命水いきみづ四方よもにひたさしめむかな

ほのぼのと東ひむがしの空そらを昇のぼります

天津日光あまつひかげに四邊あたりあかるき

輝かがやける紫微しびてんかい天界てんがいも果はての國くには

言靈ことたまの水い火きの助たすけ少すくなき

一夜ひとよを草くさの褥しとねに腕枕うでまくら

寢いぬれば露つゆに身みはひたされぬ

眞鶴まなづるの山やまの雲霧くもきり吹ふき拂はらひ

聖所すがどとなして國くに土ひら拓ひろかばや

草枕旅くさまくらたびのなやみの夜よを重かさね

清美きよみの河かはをややに渡わたりぬ

近見男ちかみをとこの神かみは歌うたひ給たまふ。

☐ 瑞御靈の神の功に奴羽玉の

夜は明け放れ朝日昇れり

朝津日の光も一しほ明けく

かがやき給ひぬ露の草生に

濁らへる河水とみに澄みきりて

岐美の功をてらしぬるかも

草の葉におく露の玉悉く

瑞の御靈と朝を輝く

打ち仰ぐ遙の空に雲たつは

眞鶴山か慕はしと思ふ

駿馬は朝を勇みて嘶きつ

露の玉てる草食みて居り

遠近の荒れたる國土を拓きまし

神を生ませる神業畏し

曇くもりなき神かみの御國みくにもともすれば

汚けがれ重かさなり曲まが神かみ出いづるも

千ちよろづ萬づの艱なやみにあひて四よ方も八や方もの

曲まがを拂はらはす瑞みづ御み靈たまはや

月つきも日ひも御空みそらに照てれどこの國くに土には

醜しこがみ神かみの水い火きにくもらへりけり

雲くも霧きりを伊い吹ぶき拂はらひて主すの神かみの

依よさしの美うましき國くに土ひら拓ひらきませ

圓まる屋や比ひ古この神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

𠄎
駒こま竝なめて千里とほの荒野あらのを渡わたりつつ

岐き美みにいそひて樂たのしき旅たびなり

横よこがは河はの早瀬はやせを渡わたり濁河にごりがは

澄すまして越こえし今日けふのすがしさ

見みの限かぎり千草ちくさ八千草やくちくさ醜草しこくさの

蔓はびこる野路のぢを拓ひらきゆくかも

草くさの根ねにひそみて鳴なける蟲むしの音ねも

今け朝さは一ひとしほ清すがしく思おもほゆ

草枕くさまくら旅たびのつかれも駿馬はやこまの

嘶いなき聞きけば安やすまりにけり

駒こま竝なめて又またも荒野あらのをいさぎよく

いざや進すすまむ眞鶴まなづるの山やまへ〆

宇禮うれ志穂しほの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ 奴ぬ羽玉ばたまの夜よは明あけはなれ草くさも木きも

わが魂たましひ線よみがへも甦よみがへりつつ

久方ひさかたの御空みそらつつしみ醜雲しこぐもも

いや次々つぎつぎに薄うすらぎゆくも

月つきも日ひも御空みそらに光てれど醜雲しこぐもの

さやりに光かけの鈍にぶくもある哉かな

醜雲しこぐもは月日つきひのかげを塞ふさぎつつ

大野おほのヶ原がはらをとどこめて居をり

醜雲しこぐもは如何いかに天地あめつちを閉とづるとも

月日つきひの光かけはほの明あかるかり

月讀つきよみの神靈みたま宿やどらす瑞御靈みづみたま

いませば旅たびのやすかりにけり

多々たたく久美くみの神かみよ科戸しなとの風かぜよびて

御空みそらの雲くもを吹ふき拂はらひませよ〇

多々たたく久美くみの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ〇

科戸邊しなとべの風かぜよ吹ふけ吹ふけ岐美きみがゆく

今日けふの御空みそらの雲くもを晴はらして

八はホフへヒ生言靈いくことたまの力ちからにて

重かさなる雲くもも隈くまなく散ちらむ

バボブベビ生言靈いくことたまを宣のり上あぐる

暇いとまもあらに雲切くもきれにけり

パポプペピ言靈ことたま宣のりし間まもあらず

青雲あをくもの肌現はだあらはれにけり

瑞御靈みづみたま進すすます路みちに雨降あめふるな

雲くもも起おこるな荒風あらかぜ立たつな

萬代よろづよの末すゑのすゑまで瑞御靈みづみたま

旅たびするよき日ひは御空みそら晴はらせよ

多々たたく久美くみの神かみは天地あめつちに誓ちかひつつ

幾千代いくちよまでも岐美きみを守まもらむ

國土を生み神生み給ふ瑞御靈
旅に立たせるよき日を晴らさむ』

茲に多々久美の神は、生言靈によりて御空の雲霧を晴らし、雨を止め給へば、
百神等は其神徳に驚き、言靈の水火の尊き事を悟り給ひ、感歎の餘り御歌詠ませ
給ふ。

顯津男の神の御歌。

わがいゆく道の隈手も恙なく

雲を晴らしし言靈尊し

幾萬劫の末の代までもわが旅を

守ると宣りし神ぞ畏き

若返り若返りつつ末つ世までも

我いそしまむ神代の爲めに』

近見男の神は御歌詠ませ給ふ。

神生みの神業仕ふる瑞御靈

守らす多々久美の神の功よ

今までは荒ぶる神と思ひつつ

見あやまりしか多々久美の神を

多々久美の神は之に答へて、

多々久美の吾は御供に仕へむと

たたくみ居たるよ近見男の神

深くはかり遠くたたくむ神業を

汝近見男は悟らざりしよ

近くのみ見やぶる神にましませば

近見男ちかみを神かみと名なをたまひけむ

近見男ちかみをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

恥はづかしも遠とほくを知らぬ近見男ちかみをの

浅あさく近ちかきを見て居ゐたりける

今いまよりは遠見男とほみをの神かみと吾われなりて

御前みまへに謹つつしみ仕つかへまつらむ

いざさらば真鶴山まなづるやまに御供みともせむ

瑞みづの御靈みたまや早はや出いでまさね

茲ここに顯津男あきつをの神かみはひらりと駒こまに跨またがり、
遠とほく西南せいなんの天てんを仰あふぎ見みつ、

目路遠めぢとほく真鶴山まなづるやまはかすみたり

萬里行く駒に鞭うち進まむ』

と生言靈の御歌と共に、一鞭あてて驀地に西南の空をめざして進ませ給ふぞ勇ましき。茲に近見男の神は、御前に仕へまつりつつ聲も朗かに歌ひ給ふ。

□ 荒野を包みし闇の幕

神の伊吹に晴れ渡り

夜はほのぼのと明けにける

天津月日は大空に

輝きませど中空に

さやれる雲の深くして

わがゆく路はほの暗く

なやめる折しも多々久美の

生言靈に雲は散り

御空は全く晴れにけり
草葉の露もあちこちに
五色に光れる大野原
蟲の鳴く音に送られて
眞鶴山の聖場に
向つて進む勇ましさ
近見男の神今日よりは
遠見男神と改めて
瑞の御靈の御前に
仕へまつらむ惟神
生言靈の幸ひに
わが神業を完全に
遂げさせ給へと願ぎまつる
天津日は照る月は冴ゆ

おほのがはら
大野ヶ原におだやかに
ふき来る風も芳ばしく
實に天國の祥徴を
今日のあたり見る心地
心も勇み駒勇み
萬里の荒野を驅けてゆく
今日の旅こそ楽しけれ

ちかみを
近見男の神は自ら遠見男の神と名乗り、先頭に立ちて御歌詠ませつつ進ませ給
へば、百神等も次々に行進歌をうたひうたひ、其日の黄昏る頃、漸く眞鶴山の
麓まで進ませ給ひける。

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 加藤明子謹録)

第五章 言靈神橋（一八七三）

眞鶴山は未だ地稚く柔かく、恰も搗きたての餅の如く湯氣濛々と立昇り、山の姿さへ未だ固まらず、茫然として夢幻の如き丘陵なりける。而して眞鶴山の周圍には底深き沼廣々と廻り、湯氣立昇り居る。

顯津男の神一行は、この山に近づくに従ひ、次第々に地は下り地柔かくして馬の脛を没し、終には腹までも浸す艱ましさに、馬上より生言靈を宣り給ふ。

カコクケキこの葭原は未だ稚し

水の氣引けよ地固まれよ

カコクケキガゴゲギわが伊行く道を

造り固めよ言靈の水火に

沼の彼方山の麓に神々は

我迎へつつ佇み居ますも

葭葦よしあしの生おひ茂しげりたる沼ぬまの洲すを

伊い行き艱なやみつ言ことたま靈の宣のるもも

斯かく歌うたひ給たまふや、さしもの泥ぬかるみ濘みも次第しだい々しだい々しだいに固かたまりて、葭よしと葦あしとは片かた靡なびき、沼ぬま
の表おもてに湧わき立たつ伊い吹ぶきの狭さ霧ぎりは、次しだい第い々しだい々しだいに薄うすらぎて、眞ま鶴なづる山やまの雄ゆう姿しは天あま津つ日ひの光ひかり
を浴あびつづつ、鮮あざやかに目めに入いり初そめにける。遠とほ見み男をの神かみはこの言ことたま靈の奇き瑞ずゐに感かんじ給たま
ひて、御みうた歌た詠よませ給たまふ。

□ あな尊たふと瑞みづの御み靈たまの言こと靈たまに

葭葦よしあし原はらは固かたまりにけり

駒こまの脚あし地ち上やうに立たてどこの沼ぬまは

濁にごらひ深ふかし如い何かに渡わたらな

百もも神がみは向むかつ汀みぎはに竝ならび立たち

吾われ迎むかへますを渡わたらふ術すべなき

カコクケキ生言靈も吾にして

如何で功の現るべきやは

瑞御靈再び言靈宣りまして

この沼の水乾かせ給へ

黄昏の空近みつつわが駒は

脚疲れたり如何に渡らむ

言靈の功に國土を拓きます

神にありせば沼を乾させよ

ふ。
顯津男の神は、遠見男の神の言靈神歌を諾ひながら、
馬上より聲朗かに歌ひ給

踏みなづみし葭葦原は固まりぬ

沼水乾せやカコクケキの靈

カコクケキタトツテチチと言靈をことたま

わが宣のる言葉ことばに沼ぬまよ乾かわけよ

言靈ことたまの稜威いづの力ちからに沼ぬまの面もは

水みづあせにつつ狭霧さぎり晴はるもも

遠見とほみ男をの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

見みる見みるに狭霧さぎりは晴はれて沼ぬまの面もは

水みづ量かさ低ひくみぬ天あ晴はれ言靈ことたまに

向むかつ邊べに立たたせ給たまへる駒こまの上への

國くに中なか比かひ古こよ岐き美みを迎むかへませ

主スの神かみの神國みくにを造つくり萬有ものみなを

生うませる神業みわざの言靈ことたま嚴いしも

天界てんかいは生言靈いくことたまの國土くになれば

吾もア聲ごゑに生あれ出いでにける

九柱御供このはしつみともの神かみはウうの聲ごゑの

生言靈いくことたまに生あれし神かみはも

圓屋比古まるやひこア聲ごゑの水い火きよ百神ももがみは

ウ聲ごゑの水い火きに生あれませる神かみ

嚴御靈いづみたまウ聲ごゑに活はたらき瑞御靈みづみたま

ア聲ごゑに結むすびて國土くに固かためばや

茲ここにウ聲ごゑの言靈ことたまに生なり出いで給たまひし、
多々た々た久美くみの神かみは馬ば上じやうより歌うたひ給たまふ。

黄昏たそがれの幕まくは追々おひおひ深ふかくとも

吾われは明あかさむウ聲ごゑの水い火きに

アオウエイ生言靈いくことたまに横よこたはる

沼ぬまよ退しりぞけ岐美きみのみゆきぞ

國土造り御子を生ますと瑞御靈

此處に立たすを沼神知らずや

斯く多々久美の神は生言靈を宣り給ふにぞ、廣々と横はりたる曇濁の沼水は、
見る見る煙となりて高く昇り、一滴の濕りさへ無きまで乾きたるぞ不思議なる。
多々久美の神の生言靈によりて、さしにも廣き深き沼水は乾し上りたれども、泥
深く柔かくして駒の蹄を入れるよしなければ、顯津男の神の一行も渡り艱みいま
しけるが、美波志比古の神は沼の底を固めむとして、御歌詠ませ給ふ。

天晴れ天晴れアとウの嚴の言靈に

沼は煙となりて乾きぬ

沼水は乾きたれども泥深し

吾は神橋をかけて仕へむ

タトツテチタタの言靈幸ひて

岐美行く道を固め給はれ

タトツテチダドツデチチとチチの言靈に

地の神橋よ今かかれかし

次々に岐美行く道の沼底は

白く乾きて固まりにける

美波志比古の神の生言靈に、限も知らぬ沼底は地の白くなるまで乾きたれば、
顯津男の神は甚く喜ばせ給ひて、御歌詠み給ふ。

天晴れ天晴れ美波志の神の功績に

わが行く神橋は架けられにけり

この橋を渡れば近し眞鶴の

山の聖所に進み通はむ

黄昏の幕を開きて月讀は

眞蒼まさをの空そらに輝かがやき給たまふ
□

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

□ 久方ひさかたの御空みそらを照てらす月讀つきよみの

光ひかりを力ちからに安やすく渡わたらむ

今更いまさらに生言靈いくことたまの功績いさをしを

悟さとりけるかな圓屋まるや比古ひこ吾われは
□

宇禮うれ志穂しほの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

□ 岐美きみが行ゆく道明みちあきらけくなりにけり

吾われは宇禮うれ志穂しほウ聲こゑに生なる神かみ

ウ聲こゑア聲こゑ生言靈いくことたまの幸さいはひて

沼ぬまに神橋みはしはかかりけらしな
小夜さよ更ふけて沼ぬまの底そこなる神橋みはし行ゆく

駒こまの足あし竝なみゆたかなりける

黄昏たそがれの空そらとし思おもへど岐美きみが行ゆく

道みちは明あかるし沼ぬまの底そこまで

岐美きみ行ゆかば生言靈いくことたまの幸さいわいひて

眞鶴山まなづるやまはよみがへるべし

産玉うぶだまの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

☞ 國中くになか比古神ひこかみを迎むかへて吾われは今いま

瑞みづの御靈みたまを謹つつしみ迎むかふる

主スの神かみのウ聲こゑに生なりし産玉うぶだまの

神かみの導みちびき安やすくまします

わが生うみし眞まなづる鶴山やまのかくの如ごと

地つち稚わかければ固かためなしませ

瑞みづみたま御たま靈き來きまさむよき日ひを待まち侘わびて

吾われ幾いく年とせを經へたりけらしな

産うぶ玉だまのウの言こと靈たまに生うれたる

眞まなづる鶴山やまはわが生いのち命ちかも

眞まなづる鶴やまの山やまの御み魂たまと永とこ久しへに

吾われは鎮しづまり國くに土つ造つくらばや

幾いく年とせを艱なやみ苦くるしみ生なり出いでし

眞まなづる鶴山やまは未いまだ稚わかしも

瑞みづみたま御たま靈かみ神かみの功いさをに眞まなづる鶴やまの

山やまかたまりて世よを照てらすらむ

いざさらば眞まなづる鶴山やまの頂いた上だきに

登のぼらせ給たまへ瑞みづの御み靈たまよ
『

斯く歌ひて産玉の神は先頭に立ち、眞鶴山の頂上に登り給ふ。顯津男の神以下
十柱の神々は、國中比古の神の案内に連れて、駒に跨りながら未だ地の固まらぬ
山坂を、蹄の跡を地に刻みながら、漸くにして丘の上に登りつき給ひ、濛々と立
昇る狭霧を打見やりつつ御歌うたひ給ふ。

四方の野は狭霧こめつつ目路せまし

吾この山に國土造りせむ

國稚き眞鶴山に吾立ちて

四方の雲霧吹き拂はなむ

八ホフヘヒ生言靈の幸ゆ

見渡す限り霧晴れよかし

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 森良仁謹録)

第六章 眞鶴山靈（一八七四）

主の神の生言靈に紫微の宮 領有ぎ給ふ天界は

うまに委曲にひらけつれど 廣大無邊の神の國

そのはしばしに至りては 浮脂の如漂ひつ

地稚くしてたわたわに 瑞の御靈とあれませる

國土の形を爲さざれば ア聲の水より生れまして

太元顯津男の神は 國土を固め神を生み

紫微天界をひらきつつ 夜を日についで出で給ふ

うまに委曲にひらくべく 四方の神等言向けて

道の隈手にさやりたる 葎と葦との茂りたる

山河渡り野路を越え 眞鶴山の方面を

西南方の稚き國土

さして出で立ち給ひしが 百神等の計らひに
今日は漸く眞鶴の 山の尾上に着き給ふ
生言靈を宣りませば 四方を包みし狭霧の幕も
もえたつ湯氣も次ぎ次ぎに 薄らぎにつつ久方の
天津月日は明けく 澄みきり給ひて葦原を
照らさせ給ふ世となりぬ 太元顯津男の神は
眞鶴山の頂上に 百神等を率ゐまし
巖の言靈宣り給ふ。

その御歌にいふ。

久方の紫微天界も國土稚く
浮脂の如漂へるかも
漂へる國土をひらきて神を生み

主スの大神おほかみの神旨みむねに叶かなはむ

見渡みわたせば目路めぢの限かぎりは霧きりたちぬ

神々かみがみ生いかさむ術すべもなき國くに土に

言靈ことたまの御稜威みいづによりて我われは今いま

稚わかき國原くにばら固かためむとぞおもふ

マモムメミ生言靈いくことたまの活用はたらきに

この國原くにばらは生うまれむとする

いや廣ひろき國土くにはあれども國土くに稚わかく

漂ただよひ形かたちまだ定さだまらず

眞鶴まなづるの山やまは地上ちじやうに聳そびゆれど

ぬかるみの如ごとやはらかなるも。

いろはにほへどちりぬるを

わがよたれぞつねならむ

うるのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせす

一二三四五六七八九十

百千萬の生言靈の神光に

御空は晴れよあらがねの

地は乾けよ固まれよ

百の草木もすくすくと

生ひたち茂り花ひらき

貴のつばら實なりなりて

神々等の玉の緒の

生命の糧となれよかし

紫微天界の南の

果に來りて我は今

國土生み神生み惟神

生言靈の神光を

天地四方に照らさむと

ももの悩みを忍びつつ

夜を日についで漸くに

眞鶴山の稚國土に

百神率ゐ勇ましく

來りけるかも今日の日は

天の世ひらけし始めより

ためしもあらぬ目出度き日

御空の月は冴えにつつ

星は眞砂の數の如

輝き給ひて花と咲き

實とあらはれて天界の

榮さかえを祝いはふ如ごとくなり

ああ惟かむながら神かむながら々々

生いくこと言たま靈の御み水い火きこそ

神みくに國をつくを造つくり神かみを生うむ

神かみの御み稜いづ威づの神みわざ業なる

神かみの御み稜いづ威づの神みわざ業なる

斯かく歌うたひ給たまひ「ウーアーオー」と生いくこと言たま靈を宣のり上あげ給たまへば、眞まなづる鶴やま山の稚わか國かぐ土には、

次しだい第しだい々い々いに盛もれ上あがり、ふくれ上あがり、固かたまりにつつ、眞ま先つさきに生おひ出いでたるは、

常とき磐は樹ぎの稚わか松まつ、白しら梅うめの莖くき、筍たかんのとう等なりき。

圓まる屋や比ひ古この神かみはこの瑞ずい祥しやうをみて感か歎たんおくあたはず、御み歌うたうたひ給たまふ。

☐ 天あ晴はれ天あ晴はれ瑞みづ御み靈たまの言こと靈たまに

この天あめ地つちは晴はれ晴はれ渡わたりける

常磐樹とぎはぎの松まつと白梅しらつゆ筍かんのこは

眞鶴まなづる山やまを包つつみて生はえけり

眞鶴まなづるの山やまにし立たてば見みの限かぎり

雲霧くもぎりはれて輝かがやき初そめたり

天渡あまわたる月つきの惠めぐみの露つゆ浴あみて

これの國原くにばら百樹ももき榮さかえむ

眞鶴まなづるの山やまをめぐりし廣沼ひろぬまも

乾かわきて底そこまで眞白ましろくなりぬ

沼ぬまのあとしだいは次第しだい々々しだいにふくれあがり

百ももの草木くさきは生おひ出いでにつつ

わが立たてる眞鶴まなづる山やまは次々つぎつぎに

ふくれふくれたかれて高たかくなりぬる

次々つぎつぎにふくれ擴ひろがり眞鶴まなづるの

山やまは間まもなく國土くにとなるらむ

産玉うぶだまの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

わが生うみし眞鶴山まなづるやまも瑞御靈みづみたま

生いく言靈ことたまに固かたまりしはや

固かたまりし眞鶴山まなづるやまはマモムメミ

水い火きの凝こりつつふくれあがりぬ

瑞御靈みづみたま宣のらせ給たまひしまモムメミの

言靈ことたま著しるく國土くに固かたまれり

マモムメミ瑞みづの言靈ことたまに生代比女いくよひめ

神かみの神言みことの姿すがたほの見みゆ

生代比女いくよひめの神かみよ出いでませ眞鶴まなづるの

神山みやまに瑞みづの御靈みたまたたせる

眞鶴まなづるの山やまは御水み火いに固かたまれど

守まもらす女神めがみ無なきぞ淋さびしき

斯く歌ひ給ふ聲の下より、大地をわけて、次第々に現れ給ふ比女神あり、容
色端麗にして玉の如し。

顯津男の神はこの態を見て、喜びに堪へず御歌うたひ給ふ。

真鶴の山の御魂と生れましし

生代の比女の姿愛しも

言靈の水火に生れます生代比女

この國原を永久に守らへ

生代比女の神は覺束なき言靈にて御歌うたひ給ふ。

真鶴の山かき分けて吾は今

岐美の光にあひにけらしな

言靈の水火に生れし吾なれば

永久とほに神山みやまを守りまつらむ
』

顯津男あきつをの神かみは歌うたひ給たまふ。

健氣けなげなる生代いくよの比女ひめの言靈ことたまや

我われたしたしに諾うべなひまつらむ
』

生代いくよ比女ひめの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

ありがたし瑞みづの御靈みたまの神宣みことのり

萬代よろづよまでも忘わすれざらまし

産玉うぶだまの神かみの神言みことの御水み火いより

呼よびさまされし生代いくよ比女ひめが神かみよ
』

圓屋比古の神は歌ひ給ふ。

言靈の奇しき御稜威になり出でし

汝生代比女神はうるはし

美しく優しく雄々しく生まれませる

生代の比女は女の鏡かも

瑞御靈と産玉神のいさをしに

生れます比女神容姿麗し

いや廣き紫微天界にかくの如

清しき女神おはさじと思ふ

眞鶴の山は次第に擴ごりて

國土の柱となるぞ目出度き

國中比古の神は御歌うたひ給ふ。

☐ いや先に吾は來りて瑞御靈

迎へまつると言靈宣り待ちぬ

有難し瑞の御靈の出でましに

この國原は固まりにけり

この上は國中比古と仕へつつ

これの聖所を永久に守らむ

主の神のウ聲になりし吾なれば

永久に固めむ貴の國原

多々久美の神は御歌うたひ給ふ。

☐ 雲霧は瑞の御靈の言靈に

晴れ渡りたり天晴れ天晴れ

天晴れ天晴れ國土晴れ狭霧晴れにけり

今日けふよりはれて永久とほに守まもらなら」

美波志比古みはしひこの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

主スの神かみのウ聲こゑになりし美波志比古みはしひこ

今日けふより守まもらむ天あめの浮橋うきはし

この國くに土にはまだ稚わかければ瑞御靈みづみたま

浮橋うきはしかけて渡わたしまつらむ

ワヲウエいくことたま生言靈なまごたまに地固つちかため

百ももの草木くさきの生おひたち守まもらむ

葭よしと葦あし茂しげれる國くに土にを拓ひらきつつ

吾われは美波志みはしと神かみに仕つかへむら」

魂機張たまきはるの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

☐ 諸々の生命保たせ魂機張の

神は仕へむ世のことごとに

たまきはる生命の糧をもらもるに

くまり與へて神國をひらかむ

神々の生命を守りもるもの

水火を助けて神代に仕へむ

顯津男の神の御供に仕へつつ

今日眞鶴の山に登りぬ

たまきはる生命を永久に守りつつ

岐美の神業を吾は守らむ

天地の百神等が玉の緒の

生命を守る神とならばや

主の神のウ聲の言靈幸ひて

吾は生れにし生命の神なり

産玉うぶたまの神かみにいそひて神生かみうみの
神業みわざ仕へむ世よのことごとをを』

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 林彌生謹録)

第七章 相聞さうもんの闇やみ（一八七五）

顯津男あきつをの神かみ竝ならびに百神等ももがみたちは、眞鶴山まなづるやまの頂いただきに立たち生言靈いくことたまをうち揃そろへ、東北東とうほくとうの空そら
に向むかひまし、七十五聲しちじふごせいの言靈ことたまを聲こゑも清すがしく宣のり給たまへば、眞鶴山まなづるやまは次第しだい々々しだいに眞北まきた
の方ほうに伸のび廣ひろごりぬ。それより百神等ももがみたちは、北ほく 北東ほくとう 東北とうほく 東とうの方かた、東南とうなん 南東なんとう
南なんの方かた、南西なんせい 西南せいなん 西せいの方かた、西北せいほく 北西ほくせいと、生言靈いくことたまを七日七夜ななかななよの間あひだ、倦うまず
怠おこたらず力ちから限り宣のりあげ給たまへば、眞鶴山まなづるやまは四方八方しほうはつぱうに伸のび廣ひろごり、膨ふくれ上あがりて目路めぢ
もとどかぬ許ばかりとなりぬ。眞鶴山まなづるやまの膨張ばうちやうによりて、東西南北とうざいなんほく萬里ばんりの原野げんやは次第しだい々々しだい

に水氣去りて地固まりぬれば、茲に目出度く眞鶴國はうま怜に委曲に生り出でにける。

この荒原につづきたる 山を包みし廣沼は

西南方の一處に いより集ひて水深く

沼廣らかに澄めりけり 沼の廻りに常磐樹の

松は俄に伸び立ちて 時じく匂ふ白梅の

汀みぎはをかざりつつ 光を放つ兄の花の

目出度き姿は清沼の 水底までもうつろひて

鏡の如くなりけり。

顯津男の神このさまを見そなはして、御歌詠ませ給ふ。

主の神のたまひし七十五聲の

生言靈いくことたまに國土くにひるごりぬ

彌先いやさきに眞北まきたの空そらに打ち向うひ

宣のる言靈ことたまに國土くに生れけり

次つぎ次つぎに百神もみがみたち等と水火いきあは合せ

宣のる言靈ことたまに地ちは廣ひろごりぬ

わが目路めぢのとどかぬ限りかぎ濕り地しめつちは

土固つちかたまりてよき國土くにとなりぬ

今更いまさらに生言靈いくことたまの功績いさをしを

悟さとれば尊たふとし水火いき生いきにける

水火いき生いきて生いきの限かぎりは主スの神かみの

神業みわざに仕つかへむ百神もみがみと共にとも

天界てんがいはうましき國土くによ美うらしの

神かみの御國みくによこころ清すがしき

見渡みわたせば原野はらのの限かぎり紫むらさきの

花は匂へり風は薫れり

科戸邊の風ほどほどに吹き出で

梅の香は四方を包めり

七十餘五つの聲の言靈に

紫微天界は開け行くかも

遠見男の神は御歌うたひ給ふ。

瑞御靈神の御供に仕へ來て

今日の目出度き幸に逢ふかな

言靈は水火の生命の基かも

天地百の身魂を生ませば

稚かりしこの國原も言靈の

水火幸ひて固まりにけり

美^{うつく}し^く國^{くに}よにぎはしき國^{くに}貴^{うづ}の國^{くに}

瑞^{みづ}の御^み靈^{たま}の守^{まも}らす國^{くに}土^には

たまちはふ神^{かみ}の御^み水^い火^きに生^なり出^いでし

眞^{まなづる}鶴^{つる}の國^{くに}は美^{うつく}しきかも

朝^{あさ}日^ひ子の光^{ひかり}も清^{きよ}く月^{つき}讀^{よみ}の

光^{かけ}もさやけき美^{うつく}しの國^{くに}

水^{みづ}清^{きよ}く風^{かぜ}又^{また}清^{すが}しき眞^{まなづる}鶴^{つる}の

國^{くに}に生^あれます生^い代^{くよ}比^ひ女^めの神^{かみ}よ

生^い代^{くよ}比^ひ女^め神^{かみ}は眞^{まなづる}鶴^{つる}山^{やま}の水^い火^き

幸^{さいわ}ひまして生^あれましにけむ

美^{うつく}しき紫^し微^び天^{てん}界^{かい}の美^{うま}し國^{くに}

眞^{まなづる}鶴^{つる}山^{やま}は生^い代^{くよ}の比^ひ女^め神^{かみ}

生^い代^{くよ}比^ひ女^め國^{くに}中^{なか}比^ひ古^こともろとも

守^{まも}りますらむ眞^{まなづる}鶴^{つる}の國^{くに}を

國中比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 顯津男の神の力に固まりし

眞鶴山の姿氣高き

眞鶴の山はつぎつぎ廣がりて

國の柱と高く立たすも

この山は國の御柱世の要

四方の神々集ひ來ませよ

生代比女の神は御歌うたひ給ふ。

☐ いく年か地にひそみて吾待ちし

眞鶴山は世に出でにけり

主の神の神言畏み氣永くも

岐美の出でまし待ちゐたりける
神國の貴の神業に仕へむと
待つ甲斐ありて岐美は來ませる
』

顯津男の神は歌ひ給ふ。

㌸
汝こそはうづの細女賢女よ

さはあれ八十比女神におはさず

八十比女に見合ひて我は神生みの

神業に仕ふる司なるぞや

主の神の御許しのなき生代比女に

見合はむすべも我なかりけり

神生みの業を許させ給ふべし

主の大神の依さしならねば

徒いたづらに細くはしめ女になりとて見み合あふべき
我われには八や十そ比ひ女が神みの待まてれば
』

生いくよ代ひ比め女の神かみは歌うたひ給たまふ。

情なさけなや瑞みづの御み靈たまの御おん言ことば葉

聞きけば悲かなしも死しなまく思おもふ

瑞みづ御み靈たま生いく言こと靈たまをよるこびて

吾われは地くにより現あらはれしはや

眞まなづる鶴の山やまの尾を上のへに現あらはれて

かかるとなげきは思おもはざりしよ

歎なげけども千ち引びきの岩いはの瑞みづ御み靈たま

わが言こと靈たまに動うごき給たまはず
』

斯く歌ひ給ひて生代比女の神は、雲を霞と御姿をかくし給ひし間もあらず、黒煙濛々として山麓より立ちのぼるすさまじさ。忽ちにして頂上は咫尺も辨ぜぬ黒雲に包まれにける。ここに多々久美の神は濃雲を拂はむとして、御歌詠ませ給ふ。

多々久美の神の言靈聞し召せ

科戸比古神科戸比女神

タータータータの力にこの山の

雲をはらせよ科戸邊の神

生代比女恨みの水火の固まりて

黒雲となり山を包めるか

恐しきものは戀かも心かも

生代の比女は鬼となりしか

言靈をいや高らかに宣りつれど

なほ黒雲の湧くぞうれたき

多々久美の神の生言靈も何の効なく、科戸の風さへ吹き来らず、百神等は山上に佇立して、各も各も天津祝詞を奏上し、天地開明を待たせ給ふ。ここに顯津男の神は、儼然として御歌詠ませ給ふ。

生代比女神のやさしき心根を

くみ取り得ざる我にはあらず

さり乍ら主の大神の御依さしに

あらねば如何にせむすべもなき

村肝の心やはらげ黒雲を

はらさせ給へ神のまにまに

我も亦木石ならぬ身にしあれば

汝細女をいかで厭はむ

愛らしく雄々しく懐かしく思へども

せむ術もなき我をあはれみ給へ

汝なれが姿見すがたみつつ吾胸わがむねもえぬれど

瑞みづの御靈みたまにけしてしのびつ
』

斯かく歌うたひ給たまふや、黒雲くろくもの中なかより生代比女いくよひめの神かみの聲こゑありて、

恨うらめしの岐美きみの言靈ことたまよ吾われは今いま

沼ぬまの主あるじとなりてしのばむ

國くに土造につくり御子みこ生うみ給たまふ神業かむわざを

吾われは恨うらみて永久とこほにさやらむ

八や十そ比女ひめ神かみ玉野たまの比女ひめ神かみ玉野湖たまのうみの

森もりにしのびてみゆき待またせり

玉野比女たまのひめの吾われは御姿みすがたやぶりつつ

岐美きみが心こゝろをいたためむと思おもふ

眞鶴山まなづるやまつつ包つつめる雲くもはわが戀こひの

燃ゆる思ひぞ永久に晴れまじ

岐美戀ふるわが眞心を退けて

玉野の比女に見合す岐美かも

どこ迄も岐美戀ほしければ吾は今

玉野の比女に恨み返さな

玉野比女玉の顔忽ちに

醜女となりてなげかせ給はむ

と歌ひ終り給ふや、忽ち悪龍となりて黒雲の幕を破り、ピカリピカリと光を投げ
つつ、玉野湖水をさして矢の如く駆け出で給ふぞうたてけれ。圓屋比古の神はこ
の態を見て怒らせ給ひ、

生代比女神は曲神にうつられて

瑞の御靈にさやらむとすも

圓屋比古神の生命のある限り

言靈征矢もてきたためてやみむ

明らけき眞鶴山を曇らせて

湖にひそみし醜神あはれ

國中比古の神は歌ひ給ふ。

眞鶴山神のかためし國中に

曲神すさぶとは思はざりしよ

いざさらば生言靈の御光に

射干玉の闇はらし照らさむ

道ならぬ道をたどると生代比女の

神の心をあはれと思ふ

美波志比古の神は御歌うたひ給ふ。

あはれなる生代比女神の戀衣

破れつくらふ術もなきかな

瑞御靈比女の心を和むべく

生言靈を宣らせ給へよ

よしあしの茂れるこれの國原は

未だよしあしの固まらぬ神代

よしあしのけぢめも暫し忘れまし

生代の比女と見合ひませ

生代比女怒りを和むる神柱は

岐美をしおきて他にあらじな

ここに顯津男の神は、生代比女の神の情にほだされて、張りつめし心もやはら

ぎ、御歌うたひ給ふ。

『よしあしはよしやともあれ斯くもあれ

生代の比女の神に合はなむ

生代比女神よ鎮まりましまして

心をはらせ雲を晴らさね

御依さしに我はそむくと思へども

公が情を捨つるすべなし』

斯く歌ひ給へば、今迄四邊を包みたる烏羽玉の黒き叢雲は、拭ふが如く晴れ渡り、青雲の空忽ち現れ、白梅の芳香四邊に香り、忽ち天國の状態となりしこそ不思議なれ。

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 谷前清子謹録)

第八章 黒雲晴明（一八七六）

ここに眞鶴山を深く包みし生代比女の神の、恨みの炎は黒煙となりて、一行の
神々を悩めたりしが、瑞の御靈の厚き情の言葉に、稍心安んじたるか、さしもに
深き黒雲は、拭ふが如く晴れ渡り、梅ヶ香四方に薫じ、紫微天界の眞相を表はし
ければ、遠見男の神も喜びの餘り、御歌うたひ給ふ。

□ いたましき生代の比女神の心かな

燃ゆる胸の火黒雲となりしか

恐しきものは戀かも言葉かも

闇は忽ち晴れ渡りける

天の世に戀の黒雲ふさぐとは

われは夢にも思はざりしよ

愛善の天界なれば戀ふるてふ

心こころのおこるも是非ぜひなかるべし

愛あいされて愛あいし返かへすは天界てんかいの

道みちに叶かなへるものとし思おもふ

瑞御靈神みづみたまかみのやさしき言靈ことたまに

晴はれ渡わたりける戀こひの黒雲くろくも

愛あいすてふ心こころはめぐしわれもまた

愛あいし愛あいされ住すままく思おもふ

美波志比古みはしひこの神かみはうたひ給たまふ。

二柱神ふたはしらかみの心こころをみたすべく

われ言靈ことたまの神橋みはしかけばや

はしかけのわれ神かみとなりこの戀こひを

うま怜らに委曲つばらに遂とげさせ度たきもの

さりながら主の大神の御依さしに
そむかせまつるは心苦しも
ことわりにあはねど戀は戀として

聞くべき心の理ぞある

理の外を流るる戀雲は

神の力も及ばざりけり

ウの聲の生言靈に生れたる

われには戀のかげだにもなし

ただ戀ふるわれの心は瑞御靈

神業の光のみなりにける』

國中比古の神は御歌うたひ給ふ。

玉の湖の汀の森にとこしへに

います比女神の心いぢらし

玉野比女神もこの事聞かすならば

またもや炎をもやし給はむ

神の代にかかる例はあらせじと

萬代のためわれは祈るも

祈りても何の甲斐なき戀衣

破らむ術のなきぞ悲しき

榮えゆく豊葦原の國中に

戀なかりせば神代は榮えじ

よき事に曲事いつき曲事に

よき事いつく神代なるかも

鬼となり魔神となりて胸の火は

眞鶴山を雲に包みし

恐しくまた優しきは戀すてふ

心の炎の燃ゆるなりけり
『

産玉の神は御歌うたひ給ふ。

☐ 瑞御靈神の心の苦しさを

思へばわれは悲しかりけり

玉野比女生代比女神の中にたち

心なやます岐美ぞ思ばゆ

ままならば岐美の悩みを救はむと

思へど及ばじ醜面われは
『

圓屋比古の神は再び御歌詠ませ給ふ。

☐ 國土造り神を生まさむ神業の

難かたきをつくづく今日けふ悟さとりけり

顯あきつ津男をの悲かなしき心こころ今いまぞ知しる

國くにの柱はしらと立たたすが故ゆゑに

凡ただが神みの身みにしおはさば大おほらかに

戀こひを樂たのしみ給たまはむものを

主スの神かみの言ことば葉はは重おもし生いくよ代ひ比め女

神かみの心こころは炎ほのほとわき立たつ

燃もゆる火ひの中なかに立たたせおもせる思おもひして

なやみ給たまへる瑞みづみ御たま靈あはれ

眞まなづる鶴の國くに津つは柱しらと立たち給たまひ

間まもなく雲くもに包つつまれ給たまひぬ

村むらき肝もの心こころをつつむ戀こひ雲ぐもを

生いくよ代の比ひ女めは晴はらしまささずや

如い何かにしてこの難なん關くわんを瑞みづみ御たま靈あ

のがれ給ふと煩ふわれは
生代比女燃ゆる胸の火消す術も
なかりけらしな瑞御靈神も

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

如何にして戀の纏毛とかばやと

思ふも瑞の御靈の御爲め

生代比女神に叶へば玉野比女の

神の心をなやまし給はむ

上下のへだてを知らぬ戀なれば

心のつよき靈止の勝つらし

眞鶴山黒雲ただに晴れぬれど

まだ晴れやらぬ岐美の心よ

われは今瑞の御靈の御胸を

思ひて涙止めあへずも

戀すてふ道は神代を限りとし

末の世までも残さじと祈る

祈るとも戀は詮術なかるらむ

心の絲の纏れし女神に

魂機張の神は歌ひ給ふ。

たまきはる生命をかけし戀衣

破らむ術もあらじと思ふ

たまきはる生命惜しまぬ比女神の

戀の炎は鬼となりしか

戀ゆゑに生命捨てむと思ふこそ

心のいろのまことなるらし

瑞御靈雄々しき優しきものごしに

比女神の心いつきたりけむ

理の道をなみしてひた進む

戀の闇には木戸なかりけり

ともかくも百神たちよ眞鶴の

山の聖所に神言宣らばや

この御歌に百神等は、心を清め身を淨め、恭しく神言を、天津高宮の方に向つて奏上し、七十五聲の言靈を、繰り返し繰り返し、祈り給ふぞ久しけれ。

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 白石恵子謹録)

第九章 眞鶴鳴動(一八七七)

天と地との世の中に
生言靈の御稜威より
尊きものはほかに無し
天の神國も主の國も
生言靈のいさをしに
山河生れ草木萌え
百の神々生れ出でぬ
そもそも紫微の天界は
愛と善との國土なり
愛と善とは主の神の
誠のみたまみすがたよ
愛は天界のはじめより
神の心を生かすべく
生れ出でたる御賜

さはあれ愛は重なりて

遂にはあやしき戀となり

胸の炎に天を焼き

地を焦して諸々の

禍おこす恐しさ

眞鶴山のみたまとし

あらはれ出でし生代比女

神の神言の瑞御靈

太元顯津男の神の

雄々しき御姿見るよりも

戀の炎は燃え盛り

面ほてりつつ玉の緒の

命をかけて戀ひ給へば

主の大神の御旨に

そむかむ事をおそれまし

言葉たくみに理を

宣らせ給ふを比女神は

忽ち失望落膽の

淵に沈ませ給ひつつ

胸の炎は燃えさかり

天地を包む黒雲と

忽ち變じ恐しき

大蛇の姿と現れて

玉野の比女に仇せむと

言あげ給ふ恐しさ

顯津男の神はじめとし

百神等は惱みまし

比女の心を和めむと

よきほどほどに瑞御靈みづみたま
其の場を逃れ給ひしがそのばのがたま
胸の炎はをさまらずむねほのほ
全身熱して燃え盛りぜんしんねつもさか
強き悩みに堪へかねてつよなや
湖水に飛び込みなやましさこすゐとこ
消し止めむとなし給ふけとどたま
比女の心ぞいぢらしきひめこころ
嗚呼惟神々々あかむながらかむながら
神は愛なり仁なりかみあいめぐみ
愛と情の終極はあいなみけしつぎやく
とくにとかれぬ戀の絲こひいと
もつれ亂るぞ是非なけれ。みだぜひ

結比合の神は御歌うたひ給ふ。

☐ 天界の總てのものを結び合はす

誠の力は戀なりにけり

結び合ひ睦び合ひつつ水火合せ

命を生まむ神業かしこき

比古神は比女神を戀ひ比女神は

比古神戀ふる天界の道

喜びもまた悲しみも楽しみも

騒ぎも戀よりわき出づるなり

如何にせむ止むるよしもなきものは

戀てふ駒のあがきなりけり

ウの聲の水火に生れし結び合せの

神なるわれはかなしと思へり

玉野比女生代の比女の眞心を
なだむる由も吾なかりける

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

美味國彌榮の國玉の國に

ときじくひらく戀の花かも

愛の果て善の極みは戀となり

誠となりてあらはるるなり

天界に戀てふもののなかりせば

さびしかるらむこれの國原

やがて今再び荒び給ふらむ

生代の比女は湖水を割りて

この時ゆ天地一度に搖ぎ出し

風吹き荒び雨地に溢れむ

言靈に生み出で給ひし美味素の

國も再び泥濘となるらむ

久方の御空をはじめ地の上の

總てを焼かむ戀の炎は

戀心天と地とにふさがりて

神の心を闇に包まむ

恐しきものは戀なり樂しきも

戀路にかをる花なりにけり

斯く歌はせ給ふ折しも、再び山麓より猛火燃え上り、顯津男の神の身邊近く迫り來ければ、瑞の御靈は止むを得ず、百神等を率ゐまして、

☐ サースーサーシー

ザーゾーゾーゼージー
さがれさがれ炎よ煙よ
瑞の御靈は炎を消さむ。

眞鶴の山は尊き神の山

曲津の神の威猛るべきやは

生代比女神はひたすらわれ戀ひつ

炎となりしかあさましとおもふ

國土を生み御子を生まさむ道の邊に

さまたげするな戀の比女神

我は今戀心なしさはあれど

しばしを汝の犠牲とならむ

國魂の神を生み得ば我はただ

離りて進まむ苦しき身なるよ
生代比女我を戀ふるも如何にせむ
ただ一度の手枕なりせば

斯く歌ひ給ふや、足下まで燃え上りし火焰は忽ち跡なく消えて、
じ、迦陵頻伽の啼く音さへ清しく聞え來たるぞ不思議なれ。
芳香四邊に薰

(昭和八・一〇・二一 舊九・三 於水明閣 内崎照代謹録)

第二篇 眞鶴新國

第一〇章 心の手綱 (一八七八)

大虚空の中心に、一點の、忽然として現れ、は次第に圓滿の度を加へ、遂に
主の言靈生れ出でぬ。ス聲は次第々々に膨張して、遂に七十五聲の言靈大虚空中
に現れ給ふに至れり。スの言靈はいよいよ大活動力を發揮して、遂に神となり給
ふ。之を天之烽火夫の神又の御名は大國常立の神言と稱し奉る。茲に大神の御稜
威は益々發展し給ひて、大宇宙を生みなし給ひ、其中心たる紫微天界に天津高宮
を築き給ひ、大神永遠に鎮まり給ひて、大宇宙を生み國土を生み神を生み給ひつ
つ、幾億萬劫の末の今日に至る迄、一瞬間と雖も其活動を休み給ひし事なし。
スの言靈にして萬々一、一秒間と雖も其活動を休止し給ふ時は、三千大千世界
たる大宇宙の一切萬有は、忽ち生命を失ひ滅亡するに至るべし。ここに主の神は、
ウの言靈より天之道立の神を生み、又アの言靈より太元顯津男の神を生まれ給ひ
て、まづ紫微天界の修理固成を始め國土生み神生みの神業を依させ給ひしなり。
而して天之道立の神はあらゆる神人を初め、宇宙萬有の精神界を守り給ひ、顯津
男の神は紫微天界に於ける、靈的物質界の生成化育の神業に奉仕し給ふの重大な
る責任を、主の神の神言もて負はせ給ひしぞ畏けれ。此神業は幾億萬々劫の末の

今日に至ると雖も、無限絶對無始無終的に繼續して活躍し給ふなり。

茲に天之道立の神の御神業は暫くおき、太元顯津男の神の御活動情態に就て、大海の一滴に比すべき程の事蹟を述べむとするも、浩瀚にして容易に述べ盡す事能はざるなり。我は唯數千萬分の一に當るべき御活動の情態を開示せむとす。故に讀者は此物語を讀みて、天界活動の全部に非ざるを辨へ知るべし。

主の大神の依さし給ひし國土生み神生みの神業に就ても、八十柱の比女神を先づ賜ひたれども、現界人の如き、性的行動をなし給ふ如き事なく、唯單に水火と水火とを組み合せもやひ合せ、鳴り鳴りて鳴りの果てに神靈の氣感應し給ひて、ここに尊き國魂神を生ませ給ふの神業なり。然しながら宇宙一切の生成化育は、その神の幸魂たる愛の情動より發生するものなれば、愛を離れて絶對的に生産は求むべからず。然るが故に女男二柱の神々見合ひます時は、必ず愛戀の心湧出すべきは自然の道理なり。愛し愛され其結果は、遂に戀となり戀愛となりて、魂のいつきて離れざるものなるが故に、主の神は八十柱の國魂神を生ましめむとして、深き御心の在します儘に、八十柱の比女神を御子生みの御樋代として、顯津男の

神に言依さし給ひたるなり。然るが故に瑞の御靈に在します顯津男の神は、一度見合ひますれば一つの國魂神を生み給ふが故に、一所に留まりて現代人の如く夫婦生活に居らせ給ふ事能はざりしなり。八十柱の神にしても、もし二柱生ませ給ふ事あらむか、必ず其國は遂に權力位置の争ひによりて崩壊すべし。茲に主の神は深謀遠慮の結果、一つの國に一つの國魂神を生ませ給ふべく言依させ給ひしなり。

顯津男の神は、高日の宮に幾年の間を籠り仕へ給ひ、如衣比女の神の艶麗なる容色に戀々として國土生み神生みの神業を後れさせ給ひけるが、其執着心は忽ち鬱結して中津瀧の大蛇と化し、如衣比女の神を遂に蛇腹に葬りけるにぞ、顯津男の神は恐れ畏み、我過れることを悟りて長く住みなれし高日の宮を後に、果しも知らぬ大野原を國土生み御子生まむと出で給ひけるが、茲に未だ國土稚く浮脂の如く漂へる眞鶴の國を造り固め、國魂神を生まむと思ひ給ふ折しも、眞鶴山の山靈より生れ出でませる生代比女の神は、顯津男の神の聖雄的風格に戀々の情止み難く、頻りに心火を燃やしつつ迫り給へども、顯津男の神は如衣比女の神去りに

つき、甚く慎み恐れみ給ひければ、主の神の御樋代ならぬ女神に對して心を動か
し給はざりける。生代比女の神は戀着益々深くして、瑞の御靈は其取捨に困惑し、
朝な夕なに天津神言を奏上し生言靈を宣りあげて、生代比女の神の心を和らげむ
となしたまふぞ畏けれ。嗚呼惟神主の大神の依さしならずば、何事をなすと雖も
一々萬々、成就せざるは今日の世と雖も同一なりと知るべし。
太元顯津男の神を初め十一柱の神々は、清き明き正しき眞の心を籠めて、生代
比女の神の執着心を拂ひ清めむと、言靈の限りをつくし、天津祝詞を奏上し、七
十まり五の言靈を間斷なく宣らせ給ひけれども、生代比女の神が戀着の心は容易
にをさまらず、燃え立つ炎は胸を焼き、遂には黒煙を吐き出で給ひ、次第々々に
擴がりて眞鶴山の國土を包み、咫尺暗愴として日月の光をかくし、暴風臻り豪雨
降り大地忽ち震動して、まだ地稚き眞鶴の國原は目もあてられぬ慘状と化せむと
せしぞ歎けれ。生代比女の神の少しく心和ぎし時は天變地妖をさまり、再び戀着
の猛火燃ゆる時は忽ち天地暗黒と化し、瑞の御靈の神業の妨害となる事甚しかり
ける。

茲こゝに顯あきつ津男をの神かみ初はじめ諸々もろもろの神等かみたちは、各おのも各おのもあらむ限かぎりの力ちからを盡つくして、七日七ななかなな夜のよ間主あひだスの神かみの降臨かうりんを祈願きぐわんし給たまひける。此時このとき宇宙うちうに主スの神かみの御聲みこゑありて御歌詠みうたよま
せ給たまふ。

國く土にを生うみ神かみを生うむなる神業かむわざは

なれに依よさせし道みちをこそゆけ

言こと靈たまの清きよすがしき水い火きをもて

八や十その御樋代みひしろのみに見合みあせ

容貌みめかたち如何いかに美うるはしき神かみなりとも

神業みわざならねば心染こころそむるな

瑞御靈みづみたまはわが御靈代みひしろよ八十やそ比女ひめは

わが御子みこ生うます御樋代みひしろなるよ

御樋代みひしろと我わが定さだめたる比女神ひめがみの

外ほかに見合みあはむ神かみあらしかし

かく歌ひ終り給ふや、四邊をつつみし妖邪の空氣は忽ち晴れ渡り、蒼空一點の雲なきまでに清く明るき國原となりぬ。顯津男の神は主の神の神言を畏み、旦つ妖邪の空氣を跡形もなく清め給ひたる主の大神の神徳を感謝しながら、御歌詠ませ給ふ。

久方の天津宮より降りまし

永久の神教を宣らせたまひぬ

主の神の神旨に背き如何にして

われはまみえむ仇の神に

彌益に心を清め身を清め

眞の道の光てらさむ

あだし神如何程迫り來るとても

御樋代ならぬ神にまみえじ

天地のわるるが如き禍も

われは恐れじ生言靈に

生代比女神の心は愛ぐしけれど

われは見合はむすべなかりける

この國は玉野の比女の在す國

我は見合ひて貴御子生まむ

斯く瑞の御靈は主の神の神言により、如何なる曲神の襲ひ來るとも、寸毫も動
かざる大勇猛心を發揮し給ひて、茲に神魂を練り、いよいよ進んで神生みの神業
に仕へ給ふ御心こそ畏けれ。

（昭和八・一〇・二三 舊九・五 於水明閣 加藤明子謹録）

第一章 萬代の誓（一八七九）

茲こゝに百神等ももがみたちの眞心まごころを籠こめし晝夜ちうやの祈願きぐわんに、主スの大御神おほみかみの感應かんのうありて空中くうちうより嚴おごそかなる御神示ごしんじありければ、顯津男あきつをの神かみは恐れ畏おそかしこみ大勇猛心だいゆうまうしんを發揮はつきし給たまひけるに、四邊しへんを包つつみし生代比女いくよひめの神かみの戀こひの炎ほのほの黒雲くろくもは跡あともなく散ちり行ゆきて、蒼空さうくう一點いつてんの雲くもなく、日月じつげつの光かがふた再び輝かがやきたるにぞ、神々かみがみは主スの神かみの御稜威みいづと、戀こひの執着心しふちやくしんの恐おそろしきを思おもひ慮はかりて、各おのも各おのも御歌みうたうたひ給たまふ。
遠見男とほみをの神かみの御歌みうた。

主スの神かみの御稜威みいづ尊たふとし常闇とこやみの

天地あめつちは忽たちまち晴はれ渡わたりける

主スの神かみの天地あめつちなれば黒雲くろくもも

如何いかで包つつまむこの神國かみにを

主スの神かみの功尊いさをたふとし戀闇こひやみの

思おもひ恐おそろしと今悟いまさとりけり

生代比女神いくよひめの心こころを推おしはかり

ほのほは 炎吐かせし苦しさを思ふ
みづみたまみこころ 瑞御靈御心の内を思ひ慮り
わがなみだいま 吾涙未だ止めあへずも
〚

まるやひこ 圓屋比古の神の御歌。

ひさかた 久方の天地一度に晴れにけり

よも 四方を包みし叢雲散らして

いまさら 今更に主の大神の功績を

ま 目のあたり見つけしにけり

われ 吾は今瑞の御靈に従ひて

てんち 天地の水火の活用を見し

くに 國土を生み神を生ませる神業の

ようい 容易ならぬをつくづく思へり

瑞御靈神の御尾前守りつつ

御子生みの神業を助けむと思ふ

未だ稚き眞鶴山の國原を

生言靈の眞言に固めむ

生代比女神の悲しき心吾知れど

詮術もなし惟神なれば

遠近の國土を拓きて御子生ます

瑞の御靈の活動天晴れ

濛々と湯氣立昇り非時に

天を包める稚き國原よ

國中比古の神の御歌。

月も日も主の大神の言靈に

晴れ渡りたる國原貴し

今日よりは心を清め身を清め

わが言靈も清め澄まさむ

夜晝の差別も知らに宣り上ぐる

わが言靈は功なかりき

曇りたる言靈つとめ宣らむとても

如何で開けむ天地の闇は

戀心ほど恐しきものはなし

生言靈を塞ぎて曇らふ

比女神の戀の心の炎さへ

消さむ術なきわが言靈よ

恥づかしきわが言靈の力かな

戀の炎におさへられつつ

宇禮志穗の神の御歌。

☐
天に坐す日の大御神月の神

わが國土造り守らせ給はれ

瑞御靈神に従ひ眞鶴の

稚き國原固めむと思ふ

渺茫と限りも知らぬ眞鶴の

國土稚くして葭葦の國土

葭葦をきり拓きつつ主の神の

生言靈に國土造りせむ

瑞御靈神の功績今ぞ知る

國魂神を生ます艱みを

愛善のこの國原に御子生ます

瑞の御靈の功績を思ふ

御子生みの神にしあれば吾はただ

大神心に從ふのみなる

凡神の囁き如何に高くとも

わが言靈に鎮めて行かむ

眞鶴の山を廻りし沼さへも

生言靈に乾きはてたり

斯の如功績著き瑞御靈は

百八十國土の主なりけり

百八十の國土廣ければ主の神の

八十の御樋代賜ひたりけり

遙なる彼方の森に玉野比女

岐美の出でまし待たす尊さ

定まりし御樋代神を外にして

見合ひ給はぬ岐美ぞ畏き

御心みこころによし合あはずとも御樋代みひしろの

神かみにしあれば見合みあひ給たまはれ

好このまざる御樋代みひしろさへも忍しのばれて

愛あいを注そそがす岐美きみぞ畏かしこき

八十柱やそはしら御樋代みひしろあれど好このみまさぬ

神かみにも見合みあすを畏かしこしと思おもふ

天津日あまつひは眞鶴山まなづるやまを照てらしつつ

國くに土つ造くる神業わがたす助け給たまへり

天傳あまつとふ月讀つきよみの神かみも曇くもりませり

瑞みづの御靈みたまの心こころのかけか

はるばると御供みともに仕つかへ來きたりけり

岐美きみの神業みわざを補おぎなひまつると

御尾前みをさきに仕つかへまつりし百神ももがみの

赤あかき心こころを照てらさせ給たまへり』

美波志比古の神の御歌。

泥凪ぬかるみの地つちを固かためて神橋みはしかけし

吾われは地固ぢがための神業みわざに仕つかふ

泥凪ぬかるみを干ほし乾かわかして地ちを固かため

五穀たなつものをば植うゑ生おふしみむ

仰あふぎ見みれば西南せいなんの方に青々あをあをと

月日つきひの浮うかぶ玉野湖たまのこすゐ水みづよ

玉野比女たまのひめの神かみの功いさをに玉野湖たまのうみの

水みづはかくまで清きよまりにけむ

眞鶴まなづるの山やまはつぎつぎ高たかまりて

裾野すそのに廣ひろき雲くもの遊あそべる

白雲しらくもの上うへに抜ぬき出でしこの山やまは

國くにの柱はしらに相あ應はきかも

そよそよと風薫るなり玉野湖の

汀の梅の匂送るか

黒雲に包まれ艱みし眞鶴の

山は晴れたり主の言靈に

萬代の末の末まで國津柱

動かざるべし眞鶴の山に

タトツテチ玉野の比女の言靈に

生り出でませし千羽鶴かも

鶴も鷺もこれの神山に集りて

松の梢に千代を歌はむ

産玉の神の御歌。

眞鶴の山は高しも清しもよ

常磐ときはの松まつに鶴つるの巢すぐへば

主スの神かみの夕ゆふの言靈ことたまの御水み火いより

松まつは忽たちまち生おひ立たちにける

生おい立たちし松まつは千歳ちとせの色いろそへて

緑みどりも深ふかくなりまさりつつ

吹ふく風かぜに松まつの梢こずえはうなるなり

ウの言靈ことたまの幸さちひ畏かしこし

アオウエイ生言靈いくことたまは天あまと地つちに

うなり止やまずも貴うづの天界てんかいに

吾われはしもウ聲こゑの言靈ことたま活は用たらきて

生あれ出いでにつつ神業みわざに仕つかふる

瑞御靈みづみたま四方よもを巡めぐらす功績いさをしに

稚わかき國原くにばら固かまり行くも

國土くにを生うみ神生かみうましつつ果はしなき

此この天界てんがいを巡めぐらす岐美きみはも
常磐ときはぎ樹きは所狭ところせきまで生おひ立たちぬ
生言いくことたま靈たまに隙すきもなければ〇

魂機張たまきはるの神かみの御歌みうた。

たたまきはる生命いのち守りて永久とことはに

吾われは仕つかへむ瑞みづの御靈みたまに

瑞御靈みづみたまかみ神かみの生命いのちは彌永いやながに

保たもたせ給たまへ國土くに造つくらす爲ために

玉たまの緒をの生命いのちなくして國土くにを生うみ

神生かみうみの神業かみわざかなふべきやは

主スの神かみのウ聲こゑに生あれし魂機張たまきはる

神かみは生命いのちを守まもる神かみぞや

神々はいふも更なり萬有を

生かすは吾の活動にこそ

玉の緒の生命を永久に守るべく

瑞の御靈に従ひ來りぬ

瑞々しく永久にましませ瑞御靈

世に若返り若返りつつ

幾億萬年を経るとも魂機張の

神は總ての生命を守らむ

若返り若返りつつ果しなき

總ての生命を守る吾なり

常磐樹の松も千歳に榮えかし

眞鶴山も永久に繁れよ

國魂の神を生ますも魂機張

神の神言の加はらぬはなし

無始無終無限絶對に天地の

生命を吾は守りこそすれ

永久に榮へ果なき主の神の

ウ聲に生れし生命の神ぞや

見の限り眞鶴の國土は未だ稚し

吾は生命を與へて生かさむ

末の世に生れ出でなむ人草の

生命守ると誓ひ置くなり

神人はいふも更なり草も木も

獸も魚も蟲も守らむ

眞鶴の國津柱の山に立ちて

萬代までも誓ひ置くなり

結比合の神の御歌。

有ありがた難たふとき尊ことき言たま靈き聞きくものか

生いのち命まも守かみらかみす神かみの誓ちかひを

水い火きと水い火き結むすび合あせて生あれしこの

生いのち命まもを永と久はに守まもらせ給たまへよ

八やそ十は柱しら御み樋ひ代しろの神かみの玉たまの緒をを

結むすび合あせて永と久はに守まもらせ

瑞みづ御み靈たま生うませる御み子こに永と久しの

生いのち命まもと榮さかえを守まもらせ給たまへ

吾われこそは山やまと河かはとを結むすび合あせ

女め男をの神かみ等たちの水い火き結むすぶなり

國くにと國くに神かみと神かみとを結むすび合あせ

紫し微び天てん界かいを永と久はに守まもらむ

神かみと人ひと君きみと臣おみとを睦むつまじく

結むすび合あせむわが言こと靈たまに

美味素の神の御歌。

神々の日々の食物悉く

美味しきくはしき味を與へむ

味なくば百の食物何かあらむ

石の礫と變らざるべき

神の味また人の味食物の

味ひ守るわが神業かも

足引の山野海河種々の

ものら残らず味ひ與へむ

言靈も味なき時は神々の

心荒びて神代は亂れむ

山に野に味ひあれば草も木も

神の御水火に生ひ繁るべし

眞言嚴の神の御歌。

主の神の眞言ゆ出づる言靈は

この天界を造りましけり

主の神のウ聲に吾は生り出でつ

世の言靈を統べ守るべし

言靈に光あらずば如何にして

總てのものをば生り出づべきやは

濁りたる神の言葉は天地を

曇らし濁す偽言葉なり

村肝の心を清め身を清め

神を尊びて眞言出だすも

動きなき眞言の心は天地を

永久に固むる基なりけり

天は割け山河どよむ災も

言靈清くば治まると知れ

神々の日々言靈守りつつ

美し神國と拓き守らむ

言靈の水正しくば山も野も

月日もひとり輝くものなり

主の神の吾はウ聲に生り出でて

世の言靈を永久に守らむ

末の世の人の言葉の活用も

吾ある限り開き守らむ

國中比古神は眞鶴山にまして

この國原を永久に守らむ

瑞御靈國魂神を生み置きて

出でます吉日はや近みけり

茲こゝに百神等ももがみたちは眞鶴山頂まなづるさんじやうに立たたせ給たまひて、各おのも各おのも持もち別わけ給たまひし神業みわざを宣のり明あか、
愈いよいよ々御心みこころを合あはせ力ちからを一いつに固かためて、紫微天界しびてんかいはいふも更さらなり、各層かくそうの諸天界しよてんかいを守まもら
むと言ことあ擧たげ給たまひつつ、國中くになか比古ひこの神かみに眞鶴山まなづるの靈山れいざんを守まもらせて置おきて、玉野湖たまのうみの汀みぎは
に鬱蒼うつさうと繁しげれる清すがしき森蔭もりかげを目當めあてに出いで立たち給たまふこととはなりぬ。

（昭和八・一〇・二三 舊九・五 於水明閣 森良仁謹録）

第一二章 森もりの遠望ゑんぼう（一八八〇）

ス
の言靈ことたまに澄すみきりし 眞鶴山まなづるやまの頂上いただきに

顯津男あきつをの神かみはじめとし 百神等ももがみたちは立たたせつつ

遙はるかに遠とほき西にしの國くに 輝かがやき澄すめる玉野湖たまのうみの

水みづにうつらふ日月じつげつの 光ひかりは鏡かがみの如ごとくなる

其の光景を打ち眺め 美しき國よと宣らしつつ

瑞の御靈を先頭に 白馬に跨がりとうとうと

緩勾配の坂道を 下らせ給ふぞ勇ましき

駒の嘶き蹄の音 轡の響もがちやがちやと

風に頭髮梳り 玉野湖さして進みけり。

顯津男の神は、馬上ゆたかに歌ひ給ふ。

☐ 月日は天に輝きつ

國原隈なく照しまし

吹き來る風もかんばしく

梅の花香のただよひつ

進むも樂しき玉野森

眞鶴山を後にして

神國をひらき神を生み

眞鶴國を生かさむと

百神等に送られて

大野ヶ原を進むなり

葭葦茂るこの國土は

まだ地稚し言靈の

水火を合せてすがすがに

神の神業に仕ふべし。

見渡せば大野の奥に鏡なす

玉野湖水に月日浮べり

こんもりと老樹の森の繁りたる

清庭に行かむ比女神いませば

生代比女心の曇り晴れにけむ

わがゆく道は空晴れにつつ

わが駒の蹄の音も勇ましく

美波志の神の幸に進むも

主の神の依さしの言葉そむかじと

國の八十國廻る旅なり

遠見男の神は御歌うたひ給ふ。

ㄣ
瑞御靈神の御供の清しさよ

玉野の鏡行手に横ふ

月も日も浮びて清き玉野湖は

岐美を待たせる比女神の心か

道遠み駒ははやれどすくすくに

進すすまぬ旅たびをもどかしみ思おもふ

いざさらば駒こまの手綱たづなを引きしめて

一ひと鞭むちあてて驅かけ出ださむかな

瑞御靈みづみたま岐美きみの姿すがたの雄を々をしさは

常磐ときはの松まつのよそほひなるも

眞鶴まなづるの山やまは後うしろにかすみたり

國くに中なか比古かひこの神かみ如何いかますらむ

黒雲くろくもに包つつまれなやみし眞鶴まなづるの

山やまに學まなびし言靈ことたまの幸さちを

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

月つきも日ひも圓屋まるやの比古ひこのまるまると

高たかく照てらせり眞鶴まなづる國原くにばら

進すすみ行ゆく玉野たまのの森もりは遠とほけれど

駒こまの力ちからに安やすくいたらむ

月つきも日ひも波なみ間に浮うかぶ玉野湖たまのうみの

清きよきは岐美きみの姿すがたなるかも

久方ひさかたの月日つきひのかけを浮うかべたる

湖水こすゐは瑞みづの御靈みたまなるらむ

白梅しらうめの薰かをりゆかしき國原くにばらを

駒こまたて竝ならべ進すすむたのしさ

眞鶴まなづるの山やまはつぎつぎ影遠かげとほみ

わが目路めぢさへもとどかずなりぬ

眞鶴山まなづるやまとほ遠とほくかすみ玉野森たまのもり

つぎつぎわが目めにしるくなりぬる

瑞御靈みづみたま進すすます道みちに幸さちあれと

吾われは祈いのりぬ後姿うしろで拜をがみつ

駿馬はやこまの蹄ひづめの音おとも勇いさましく

進すすむ今日けふこそ國くに土に生うみの旅たび

國くに土に生うみの旅たびの門かど出でを天地あめつちは

壽ことほぎ給たまふか澄すみきらひつつ

玉たま野の比ひ女め見み合あひます日ひの近ちかづきて

吾われも勇いさみぬ駒こまも勇いさみぬ

野の邊べを吹ふく風かぜやはらかに瑞みづ御み靈たま

御み髮くしを撫なでて薰かをりゆくかも

葭よしあし葦あしの生おい茂しげるなる國くに原はらを

出いで立たつ今日けふの旅たびはさやけし

さらさらと葉は末すえに渡わたる風かぜの音ねも

岐き美みの旅たび立たち壽ことほぐがに聞きこ

見みの限かぎり墜おり居ゐむ伏かす白しら雲くもの

果はてさへ神かみの言こと靈たま生いくるも

多々久美の神は御歌うたひ給ふ。

㊦ 天地に夕々の言靈組み合ひて

生り出でにけむ玉野の森は

わが駒は勇みに勇みわが魂は

清みに清み心安き今日

瑞御靈旅に立たする今日の日は

天地清しく晴れ渡りぬる

清きあかき正しき神の言靈に

晴れ渡りけむこれの天地は

つぎつぎに國土生み神を生ましつ

荒野を拓かす岐美ぞ畏き

氣永くも岐美を待たせし玉野比女は

今日の生日を壽ぎますらむ

吾われは今いま駿馬はやこまの背せに跨またがりて

葭葦よしあししげ茂おほのる大野おほのを走はしるも

わが駒こまは言靈ことたまの水い火きに生あれし駒こま

永と久はに疲つかれず進すすみ行ゆくなり㊦

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

玉野森たまのもりいやつぎつぎに近ちかまりて

嬉うれしも吾われは心こころ浮うき立たつ

玉野湖たまのうみに清きよく浮うかべる夕月ゆふづきは

わが魂線たましひを洗あらひ清きよむる

日けならべて岐美きみの御供みともに仕つかへつつ

出いでゆく旅たびのたのもしきかも

天地あめつちに如何いかなる曲まがのさやるとも

吾はくやまず宇禮志穗の神

歡びの天津國なり愛善の

紫微天界よ何を歎かむ

わが駒は鬢振ひ勇むなり

嗚呼雄々しかる姿よ嬉しき

歡びの満ちあふれたる天界に

生れし幸を吾は嬉しむ

樂しみと喜びの果てぬ神の國に

吾は勇みて神業に仕へむ

大空は蒼く澄みきり國原は

花匂ひつつ吹く風涼しき

駿馬の脚早けれど出づる汗の

風にはらはれ清しく行くも

こんもりと大野の奥に青みたる

玉野たまのの森もりの眺ながめさやけし
』

美波みは志し比ひ古この神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

浮脂うきあぶらなすただよへる眞鶴まなづるの

山やまを生まうせる御稜みいづかしこ威い畏かしこし

眞鶴まなづるの山やまは離さかりて見みえずなりぬ

道みちの隈くま手ても遠とほく來きにけむ

見みはるかす國くに土ちの大野おほのに鏡かがみなして

光ひかれる水みづは玉野湖たまのうみはも

吾われは今瑞いまみづの御靈みたまに從したがひて

心こころ清すがしく進すすみ行ゆくくなり

大野おほの吹ふく風かぜも穩おだいに薰かをりつつ

今日けふの旅路たびぢは樂たのしかりけり

久方ひさかたの天清あめきよらけく澄すみきらひ

わが行ゆく國くに土には風かぜも清すがしき

叢くさむらに鳴なき立たつ蟲むしの聲こゑ聞きけば

岐美きみの出いで立たち壽ことほぎにつつ

眞鶴まなづるは翼つばさを天あめにうちながら

わが行ゆく頭上づじやうをかけめぐるかも

葭葦よしあしの狭間はざまに白しろき鷺さぎの群むれ

わが駒こまの音ねに驚おどろきて立たつも

竝ならび行ゆく駒こまの脚あし竝ならみ勇いさましき

揃そろひも揃そろふ十一じふいち柱しら神がみよ

國くに土につくり神かみを生うますと出いでませる

今日けふの御供みともは心清こころすがしも

村肝むらきもの心正こころただしく清きよく持もちて

岐美きみに眞言まことを捧ささげ奉まつらむ

大河をいくつ渡らひ荒野越え
今日は清しき森かげを見つ
月も日も星の光も冴えに冴え
澄みに澄みきる眞鶴の國よ

産玉の神は御歌うたひ給ふ。

御子生みの神業助けむ産玉の

神の神言のあらむ限りは
國土を生み御子を生ませる神業を

産玉の神あななひ奉らむ

見渡せば四方の大野は清らけく

美しく廣く限り知られじ

ひろびろと果しも知らぬ稚き國土を

つくらす岐美の功尊しいさをたふと

青雲の壁立つ極み白雲のあをくも かべた きは しらくも

墜居向伏す限りは神國おりゐむかふ かぎ かみくに

天界の國魂神を生み給ふてんかい くにたまがみ う たま

神に従ひわが來つるかもかみ したが き

神業は廣し遙けし天界のかむわざ ひろ はろ てんかい

彌果までも御供仕へむいやはて みともつか

顯津男の神の神姿後よりあきつを かみ みすがたうしろ

拜み奉れば光なりけりをが まつ ひかり

この稚き眞鶴國の花となりわか まなづるくに はな

光となりて出でます岐美はもひかり い

國遠み荒ぶる神のささやきはくにとほ あら かみ

野の末までも響かひにけりの すゑ ひび

瑞御靈貴の言靈宣りましてみづみたまのつことたまの

百ももの醜しこがみ神かみまつろひ給たまへ
吾われも亦また瑞みづの御み霊たまの御み尾をさき前に

仕つかへて瑞みづの言こと霊たま宣のらむか

わが駒こまは鬣たてがは高たかく振ふり亂みだし

これの大おほ野のを勇いさみ行ゆくかも

百もも神がみも勇いさみ給たまひて言こと霊たまの

御み歌うた詠よませる今け日ふぞ目め出で度たき
□

魂たま機きは張るの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。
□

□
たまきはる生命いのち保たもちて今け日ふの日ひの

御み供ともに仕つかふと思おもへば樂たのしみ

永とこ久とはの生いのち命たま保たもちて國くに土を生うみ

神かみ生うみ給たまふ神み業わざ守まもらむ

言靈の水火の命の幸ひて

紫微天界は永久に榮えむ

魂機張神の神言は玉野湖の

神を言向け和さむと思ふ

眞鶴の山の黒雲晴らしつつ

生代の比女は湖水にひそめり

生代比女の潜める湖水も波風ぎて

鏡の如く月日浮べり

常磐樹の空を封じてそそり立つ

玉野の森はいよいよ近し

玉野比女瑞の御靈の出でましを

湖畔に立ちて待たせ給はむ

駒の脚にはかに早くなりけり

神の神業のいそぎけるにや

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

天地の神の御水火の結び合せ

みもとに仕ふる今日ぞ嬉しき

玉野比女の清き御魂とわが岐美の

御靈を結び合せ守らむ

玉野湖の水底深く潛みたる

神を神國にのぼらせ救はむ

一きれの雲片も無き今日の空を

進む大野は風も清しき

勇ましき瑞の御靈の出でましに

わが駿馬も勇み立つなり

わが駒の蹄の音もかつかつと

聖所に進む今日の旅立ち

茅草かやくさの露つゆをあびつつ一夜ひとよさを

いねし思おもへば樂たのしき今日けふなり

夕ゆふされば玉野たまのの森もりに宮柱みやばしら

建たたせる館たちに進すすまむ嬉うれしさ

美味素うましもとの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

黄昏たそがれにはや近ちかづきてわが駒こまは

行手ゆくて急いそぐか勇いさみ出いでけり

玉野湖たまのうみに寫うつれる月日つきひのかけさへも

光ひかりやはらぎ夕ゆふちか近ちかみかも

そよそよと科戸しなとの風かぜはわが面おもを

清すがしく吹ふきて黄昏たそがれむとすも

夕ゆふちか近ちかみ草葉くさばにすだく蟲むしの音ねも

一入高く聞え來にけり
愛善の天津神國に生れあひて
永久に生く身は樂しかりけり
』

眞言嚴の神は馬上より御歌うたひ給ふ。

山鳥の尾のながながと野路越えて

はや黄昏となりにけらしな

目路近く玉野湖横はり

水の面に浮く白鳥の影

白鳥は清しき影をさかしまに

寫して遊ぶ夕暮の湖

空蒼く水また青きこの湖に

染まず浮べる白鳥のかけ

この廣き玉野湖水を渡り給ひて

進み行かむか玉野森まで

黄昏となれども御空の月かげは

彌ますますも輝き給へり

茲に顯津男の神の一行は、長途の旅を續けたる夕、玉野湖畔にやうやく着き、

息を休め、駒を休ませ、彼岸に青き森影を打ち見やり乍ら、清しく佇ませ給ふ。

(昭和八・一〇・二三 舊九・五 於水明閣 内崎照代謹録)

第一三章 水上の月(一八八一)

顯津男の神一行の白馬隊は、漸く黄昏れむとする時、玉野湖畔に着き給へば、御空を渡る満月の光は、緩やかに湖面を照し、縮緬の波穏やかにたゆたふ。

玉野森は廣き湖水の彼方の岸に、月光を浴びて森巖そのものの如く、地上と湖底に描かれて居る。

顯津男の神は湖面向ひ、心靜に御歌詠ませ給ふ。

仰ぎ見る夕の月は玉野湖の

波に浮びて靜なるかも

こんもりと夕の地上に描きたる

玉野の森は清しきろかも

吾は今駒に鞭うち大野原

遠く渡りて今來つるかも

鏡なすこの湖に浮びたる

月の面一入廣かりにけり

そよそよと湖を吹く風もなく

この天地はしづまりて居り

村肝むらきもの心こころ静しづけくなりしづにけり

月つきの浮うかべる湖うみの鏡かがみに

わがかなたが行ゆく玉野たまのの森もりは波なみの彼方かなた

かすみうなぢて湖路はろ遙はるけかりけり

葦よしあし蘆しげの茂あらのらふ荒野わたを渡わたり來きて

今いまひろびろと波なみの月つき見みつ

蟲むしの聲こゑ岸きしのあちこち聞きえつつ

わがたましひ靈線すがの清すがしさを覺おぼゆ

眞まなづる鶴くろくもの黒雲みを見みしわが目めには

一ひとしほ入しづ静しづけく思おもはるかな

暫しばしの間駒まこまを休やすませ水飼みづかひて

彼方かなたの岸きしに乘のりて渡わたらむ

波なみ渡わたる舟ふねさへもなきこの湖うみは

駿馬はやこまの背せこそ力ちからなりけり

ひさかた たかひ みや
久方の高日の宮を出でしより

かかる 静けき湖を見ざりき

ままならばこの湖の眞寸鏡

ス 主の大神の土産となさばや

ひさかた みそら あを うみ あを
久方の御空は蒼し湖青し

つき あめつち すが うか
月天地に清しく浮ぶも

くも あを うみ うみ あを
雲の蒼湖にうつるか湖の青

くも つき かがみ
雲にうつるか月の鏡に

そら あを みづ あを うみ も
空蒼く水また青き湖の面に

う しろとり
浮く白鳥のかげのさやけさ

まん てん ほし うつ かがや
満天の星を寫して輝ける

うみ ちばな にほ こと
湖は千花の匂へるが如し

ほし はな みそこ うか うみ あを
星の花水底に浮び湖の青

てん うか すが よひ
天に浮びて清しき宵なり

見みの限かぎり御空みそらは蒼あをく水みづ青あをく

中なかを流ながるる月舟つきふねのかけ

月見つきみれば心清こころすがしも湖見うみみれば

わが靈線たましひはひろごりにつつ

玉野たまの比女ひめの姿すがたなるかも青あをき湖うみの

面おもてに浮うかぶ満月まんげつの光かげは

わが心湖こころこすゐ水の月つきと輝かがやきつ

玉野たまのの比女ひめの住所すまかて照あてらさむ

麗うつくしも紫微しびてん天界かのたましひか

この湖うみの面もに浮うかぶ月光つきかげは

高照たかてるの山やまの宮居みやゐを立たち出いでて

清すがしき湖うみにいむかひ居ゐるかも

濁にごり河渡がわたりし時ときのわが靈たまも

月照つきてる湖うみの青あをに洗あらへり

天高く湖底深し我は今
神の御稜威を深く悟りぬ
湖の面いや廣々と目路遠み
わが行くおもひ遙けくもあるか

遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。

瑞御靈御供に仕へ清しくも

今宵の月に魂を洗へり

果しなきこの天地を照します

月光今宵は湖に浮べり

白銀の玉と輝く月舟の

これの湖水にかがやき給ふ

月も日も星も浮ぶなるこの湖の

あをく清きは神の心か

如意寶珠玉の月光明らけく

浮べる湖の清くもあるかな

小波も立たぬ夕の湖の月は

玉の宮居を寫してさゆるも

汀邊の千草の蟲も月光の

清きに鳴くか聲冴えにけり

乗りて來し白馬の背に露おきて

玉とかがよふ今宵の月光

仰ぎ見る御空の月も湖の底の

月も太元顯津男の神よ

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

月つき盈みちて今宵こよひのかけは圓屋まるや比古ひこ

神かみの姿すがたは湖うみにうかべる

久方ひさかたの御空みそらうつして玉野湖たまのうみの

底明そこあきらけく澄すみきらふかな

黄昏たそがれの闇やみは迫せまれど天渡あまわたる

月つきに明あかるく透すきとほるなり

青雲あをくもの色いろを寫うつして夕暮ゆふぐれの

月澄つきすみ湖うみのあをみたるかも

ぼんやりと彼方かなたの岸きしに描えがきたる

玉野たまのの森もりは水みづに映はえたり

きらきらと輝かがやく波なみは不知火しらぬびの

海原うなばら照てらす如ごとく見みゆめり

雲くもの上うへ高く聳そびゆる眞鶴まなづるの

山やまほの見みえぬ月つきの光ひかりに

見みの限かぎり雲霧晴くもきりはれて空蒼そらあをみ

星ほしきらめきて清すがしき宵よひなり

國く土に生うみの御み供ともに仕つかへて珍めづしく

冴さえたる月つきを今宵こよひ見るかな

乘のりて來こし駿馬はやこま白しろく月つきに浮うきて

水底みなそこまでも影かげを寫うつせり

たのもしき旅たびなりにけり荒野渡あらのわたり

玉野湖たまのこすゐ水の冴さえたる月つき見みつ

何なんとなくわが魂たましひ線なごの和なごみたり

今宵こよひの月つきの光かけの清すがしさに

主スの神かみの御み水い火きに成なりし國く土にながら

かく麗つゆはしと思おもはざりけり

月つき讀よみは光ひかりの限かぎりを光ひかりつつ

波なみの面おもてに静しづかに浮うけるも

山かげのただ一つなき廣野原に
一つ浮べる月の湖

ともかくも岐美のみあとに従ひて
今宵の内に彼岸に渡らむ

多々久美の神は御歌詠ませ給ふ。

天清く湖また清き中にして

われは楽しく歌詠まむかな
蟲の聲湖畔に冴えて更け渡る

今宵の空の長閑なるかも

大空に輝く月も水底に

寫れる月も瑞の御靈よ

駿馬もこれの景色に見惚れしか

嘶いななく聲こゑは清すがしかりけり

渡わたり行ゆく彼方かなたの岸きしの神かみもり森は

水底みなそこ深ふかくうつるひにけり

吾われは今いまこの水月みなづきを駿馬はやこまの

蹄ひづめに碎くだくと思おもへば惜をしきも

ままならばこの湖みづうみの月光つきかげを

空そらにあづけて渡わたらまほしけれ

月つきの浮うく湖面うなづらを渡わたるこの宵よひは

御空みそらの雲くもの上うへ行ゆく如ごとし

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦ 歡よろこびの天地あめつちに充みつるこの國土くには
紫微天界しびてんかいの眞秀良場まほらばなるも

瑞御靈御供に仕へて天界の

眞秀良場に照る湖の月見つ

眞鶴の稚き國原わかかしく

湖水のみどりに潤ひ榮えむ

久方の天をうつせるこの湖は

天津月日も永久に宿らす

この清き水底に遊ぶ魚鱗は

月を仰ぎて浮び上りつ

天も地もよみがへりたる心地して

湖面に浮ぶ宵月を見つ

夕されど御空の月の底ひまで

輝く湖畔は明るかりけり

とこしへの歡び充つる天界に

生きて歎かふ神は曲なれ

空高く底深みつつこの湖の

面にうかぶ蒼空の色

主の神の言靈清く幸ひて

澄みきりますかこれの湖

澄みきらふ月のしたびに吾立ちて

湖底の月を下に見るかな

瑞御靈出でます道の幸ひを

明して冴ゆる湖上の月光

千萬の悩みにあひて今此處に

清き御空の下に月見る

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

近ければ天の神橋をかけ渡し

この湖を渡らまほしけれ

紫の雲の神橋を渡りゆく

月は御空の寶珠なるかも

久方の御空は蒼く限りなく

果しも知らに湖に寫れる

名にしおふ紫微天界の眞秀良場や

この湖に月宿るなり

いや廣に月の光はひろごりて

湖水のあらむ限りを照せり

そよ風は吹き出でにけり黄金なす

波のおもてに月はさゆれつ

波の間に浮べる月の光清し

湖面を見つつ心躍るも

つぎつぎに科戸の風は強まりぬ

波な間まにに浮うぶか月つきをを碎くだきつ

そよ風かぜにに波紋はもん描えがきて湖うみのの面もは

右みぎと左ひだりにに月つきををひろげつ

百も千も々ぢにに碎くだけて月つきはは波なみのの面もに

世よのの移うつりりゆくさまをを示しめせり
□

産玉うぶたまのの神かみはは御歌みうた詠よませせ給たまふ。

夕風ゆふなぎのの湖うみにに忽たちまちち風かぜ立たちて

あたらあらら月つき光かけ千ち々ぢにに碎くだけつ

湖みづうみのの月つきはは碎くだけて亂みだるるれど

御空みそらのの月つきはは變かはららざざりりける

冴さええ渡わたるる月つき天てん心しんにに輝かがきて

わが立たつつかかげげもも短みじくくななれれり

天心てんしんにいつきて動うごかぬ月光つきかげは

雄々ををしかりけり瑞みづの御靈みたまか

蟲むしの音ねもいよいよ高たかくなりけり

水みの面もにをどる月つきをめづるか

向むかつ岸きしに岐美きみの渡わたらす今宵こよひなり

風かぜもしづまれ波なみもをさまれ

波なみがしら白しろ々じろ光ひかる湖うみの面もに

夕ゆふへを浮うける水鳥みづとり白しろしも

水鳥みづとりの翼つばさかがよふ月光つきかげは

いやすますに冴さえわたりつつ

岐美きみが行ゆく波路なみぢ静しづかに守まもれかし

湖底みそこに潜ひそみて守まもる神々かみがみ

瑞御靈みづみたま御供みともに仕つかへ玉野湖たまのうみ

渡わたらむ今宵こよひは静しづかなれかし

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

たまきはる生命うるほす月讀の

神守りませ水の上の旅を

つぎつぎに風高まりぬ波荒れぬ

月は碎けぬうれたきの夜や

水底に潜むは正しく生代比女の

神の魂とわれ覺ゆなり

ナノ又ネ二この言靈の功績に

今立つ波をなぎふせて見む

ナノ又ネ二この言靈の功績に

曲の荒ぶる術なかるらむ

清き明き心になり出る言靈に

如何でしるしのなかるべきやは

ほのぼのと湖面こめんに狭霧さぎりたちこめて

波なみは漸やうやく凧なぎ渡わたりけり

この清きよきさやけき湖うみに狭霧さぎりたちて

水底みそこの月つきは光かげうすらぎぬ

瑞御靈みづみたま進すすませ給たまふ今宵こよひなり

水底みそこの神かみよ狭霧さぎり晴はらさへ

結比合むすびあはせの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ つぎつぎに狭霧さぎりは立たちてひろびろと

輝かがやく湖うみを稍やや狭せばめたり

水底みなそこの月つきは次第しだいにかくれつつ

御空みそらの海うみのみ月つきの浮うかべる

寫うつるべき月つきは狭霧さぎりに包つつまれて

この湖の面は薄ら暗きも

生代比女恨みの炎かたまりて

またもや狭霧の湧き立つならむか

よしやよし黒雲四方を包むとも

生言靈に吹きはらひ見む

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

主の神の依さしに國土生み神生みの

旅に立たせる岐美と知らずや

湖底の神よ静に聞し召せ

この湖も神のたまもの

國土生みの妨げなさむ神あらば

伊吹き拂はむ言靈の水火に

駒こま竝なめて今いまや渡わたらむ湖みづうみの

面おもを晴はらして風かぜよしづまれ

この風かぜは科戸しなどの神かみの水い火きならず

水底みそこの曲まがの詛のろひの水い火きなる

愛善あいぜんの國くにの眞秀まほ良場らばにあらはれし

これの湖水こすゐに曲まがは無なからむ

曲神まがかみの住處すみかとすべき湖うみならず

早はやく去され去されただに退しりぞけ

言靈ことたまの水い火きも恐おそれぬ神かみなれば

この天地あめつちに住すまはせじと思おもふ

眞言まこといづ嚴かみの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

☐ われこそは眞言まことの嚴いづの神かみなるぞ

湖うみを晴はらして岐美きみを通とほせよ

湖うみの神かみよわが言靈ことたまを聞きかずして

はむかひ來きたるか生命いのち知らずに

千早ちはや振ふる神かみの造つくりし湖みづうみに

穢けがれあらずな瑞御靈神みづみたまがみ ㊦

かく神々かみがみは、各おのも各おのもに御歌みうたうたひて、湖みづうみの神かみをなだめつ諭さとしつ時ときを移うつし給たまへ
ども、生代いくよひ比女ひめの神かみの戀こひの炎ほのほは強つよく猛たけく、神々かみがみの生言靈いくことたまの光ひかりさへ、包つつみかくすぞ
うたてけれ。

(昭和八・一〇・二三 舊九・五 於水明閣 白石惠子謹録)

第一四章 眞心まごころの曇くもらひ(一八八二)

無始無終の宇宙間に於て、最も強く美しきものは愛の發動なり。大虚空中に愛の發動ありて始めてその言靈は生れ、天地の萬神は生る。故に神は愛なり力なりと稱する所以なり。愛あるが故に宇宙は創造され、萬物は發生す。宇宙間一切のものはこの愛に左右され、創造も建設も破壊も滅亡も混亂も生ずるものなり。愛は最も尊むべくかつ恐るべきものとす。愛よりスク、スカ又の言靈は生るるなり、愛の情動にしてその都合よろしければ、生成化育の神業は完成し、愛の情動の都合過ぐれば、遂には一切を破壊するに至る。

而して、愛には善あり、惡あり、大あり、小あり。神の愛は愛善にして、世間一切の愛は愛惡なり。神の愛は大愛にして世間の愛は小愛なり。わが身を愛し、わが家を愛し、わが郷土を愛し、わが國土を愛するは所謂自己愛にして、神の大愛に比して雲泥の相違あり。故に小愛は我情我欲の心を増長せしめ、遂には自己愛のために他人を害し、他家を破り、他郷と争ひ、他の國と戦ひ、遂に彼我共に慘禍の洗禮を受くるに至る。又神の愛は大愛なれば、宇宙一切萬有に普遍して毫も依怙の沙汰なし。世間の愛は他を顧みず、只管にわが身を愛し、わが家を愛し、

わが郷土を愛し、わが國家を愛するが故に、他よりもし不利益を加へらるると見
る時は、忽ち立つて反抗し争闘し、身を破り家を破り國家を破るに至る。恐るべ
きは愛の情動の度合なり。

茲に生代比女の神の个性的愛は積み重なりて戀となり、戀ますます募りて怨恨
となり、胸に瞋恚の炎燃えさかり、其心魂を焼きし炎は濛々として立ち昇り、黒
煙となりて天を包み、尚ほ堪へ切れぬままに靈魂化して大蛇となり、炎熱の苦し
みを防がむとして、遂には玉野湖底にひそみたるこそ、實に恐しき次第なり。總
て戀なるものは自己愛に屬するが故に、他を顧みるの暇なく遂にはわが身を破り、
人を損ひ世界を毒し天下を亂すに至るものなり。故に顯津男の神其他の神の清き
明き正しき御心より迸る生言靈の力をもつてするも、猛烈なこの戀の炎を消しと
むるに由なかりける。然りと雖も大愛の心より出でし明き清き眞の言靈には反抗
する能はず、遂には歸順せざるを得ざるに至るは、嚴として犯すべからざる神の
御稜威なればなり。

茲に生代比女の神は、眞鶴山の聖場に於ける、顯津男の神の情のこもりし生言

靈の御歌によりてしばし心を和め給ひしが、再び戀々の情火燃えさかり、黒雲天に漲りて瑞の御靈の進路を妨げ、遂にはスの神の嚴かなる威力に畏服して眞鶴山を捨て、玉野比女の神の永久に鎮まりたまふ宮居に近き玉野湖水に蛇身となりて湖底深く潛み、瑞の御靈の渡り來ませるを今や遅しと、さしもに廣き湖水の水を、胸の火に沸きかへらせつ、戀の意地を達せむと待ちかまへ居たまひしぞ恐ろしき。空蒼く海又青く、風は白梅の香を送り、浪穩かに満月の光清く浮みて鏡の如く澄み切り、落着きたる夕の湖面は忽ち暴風吹き起り、大雨沛然として臻り、浪逆巻きて容易に越ゆべからざるに至らしめたるぞ是非なけれ。今迄清皎々と輝きたる月は忽ち黒雲にかくれ、四邊をつつみし湯氣煙は、灰白色となりて、神々の一行の邊りをつつみ、如何ともなす由なきに至らしめたるも、猛烈なる戀より燃え出でたる瞋恚の炎の荒びなりける。故に最も親しむべきは神にして、最も恐るべきは戀の情動なりと知るべし。

嗚呼惟神靈幸倍坐世。

顯津男の神は、忽ち湖上の光景一變して、四邊暗黒となり、不快なる空氣の身

邊を包みたれば、生言靈の御稜威によりてこの暗愴たる天地を清めむと、御歌詠
ませ給ふ。

あさましも天地一度にふさぎたる

この黒雲は戀の炎よ

大愛の主の大神の神言もて

國土造る我を艱ますな夢

美しき紫微天界をかくのごと

曇らす戀の曲神怪しも

我こそは國土生み神生みの神業に

仕ふる神ぞ大愛の神

生代比女の心愛しと思へども

神の依さしに反くよしなき

片時もはやく天地を明しませ

わが大愛の心さととりて

久方の月の光は冴ゆれども

この醜雲を射通す術なき

生代比女心平に安らかに

わが大愛の心を悟らせ

思ひきや國魂神を生む度に

醜の曲神にさやらるとは

至善至美果しも知らぬ天界に

狭き心を捨てよ比女神

主の神の愛に魂を光らしつつ

亂れたる思ひをのぞかせ給へ

斯く御歌詠ませ給ふや、闇の中より茫然と夢幻の如く現れたる生代比女の神は、
寧猛なる面を一行の前に現し、恨みの形相凄じく、

恨めしき岐美の心よ言靈よ

吾はなやみて大蛇となりぬる

清かりし乙女の胸をこがしたる

岐美は大蛇を生みましにけり

吾は今かかる姿となり果てて

ますます岐美を恨みこそすれ

水底に常磐堅磐に沈み居て

戀の仇をば報いむと思ふ

女神男神この湖原を渡りなば

吾は大蛇となりて呑むべし

玉野比女に見合す岐美の恨めしさ

力限りになやましまつらむ

生言靈如何に宣らすも戀故に

亂れし吾をまつらふ術なけむ

わが思ひ黒雲となりて天を閉ぢ

大蛇となりて地を亂さむ

戀すてふ心なければかくまでも

岐美を憎しと思はざりけむ

岐美故に吾はなやめり岐美故に

吾は焦れて大蛇となりける

めぐしさの重り合ひて憎しみの

炎燃えつつ大蛇となりける

美しき眞鶴山の守り神も

岐美故大蛇となりしを知らずや

わが思ひ幾億萬劫の末までも

戀の悪魔となりて崇らむ

恐るべきものは戀路と思召せ

岐美がつくりし國土に仇せむを

わが思ひ凝りかたまりて山に海に
河又沼に潛みてなやめむ

顯津男の神は御歌うたひ給ふ。

ねもごろにわが説きさとす言の葉を

公は聞かずや諾ひまさずや

嚴かなる紫微天界に生れ生いで

大蛇となりし公ぞいぢらし

戀すてふ心の誠は諾へど

わが儘ならぬ神生みの旅よ

あだし女に見合ひて永久の罪穢

世に残さむを恐るる我なり

言靈の嚴の光もつつむなる

戀こひの炎ほのほのあつくもあるかな
何事なにごとも湖水こすゐの水みづに流ながしまして

わが言靈ことたまによみがへりませよ

アオウエイあつき心こころの炎ほのほをば

この眞清ましみづ水みづにあらひて生いかせよ

天地あめつちに恐おそるものは吾われなけど

戀こひの炎ほのほに艱なやまされける〆

生代比女いくよひめの神かみは微かすかに歌うたふ。

いとこやの岐美きみをめぐしみ吾われ遂つひに

憎にくみの神かみとなり果はてにける

いとしさの胸むねにあまりて憎にくしみの

深ふかくなりぬる吾われは悲かなしも

恨むべき道なき岐美を恨みまつり

吾は大蛇の靈魂となりぬる

岐美故に吾よみがへり岐美故に

わが魂線の亡ぶと知らずや

わが魂はよし亡ぶともこの思ひ

いや次々に傳へて止まじ

顯津男の神、

主の神の神言に背くと知りながら

いとしの公を助けむと思ふ

如何ならむ罪に沈むも比女神の

誠にむくゆと心定めし

村肝の心やすかれ今よりは

なが眞心を諾ひまつるも』

斯く歌ひ給ふや一天忽ち晴れ渡り、荒れ狂ふ湖原も俄に鏡の如くをさまりて、
満月の光皎々として、さしもに廣き湖面は更なり、目路遠き國原を隈なく照らし
給ひける。

(昭和八・一〇・二四 舊九・六 於水明閣 加藤明子謹録)

第一章 晴天澄潮 (一八八三)

顯津男の神の仁慈の籠れる言靈の御歌に、生代比女の神が戀の恨みも炎も、玉
野湖の水泡と消えて、水面には月の鏡を寫し、雲霧の幕何れにか取り外されて、
大空の蒼にきらめく星影を湖底に描き、天國淨土の光景と回復したるぞ不思議な
る。

給^{たま}ふ。

遠見^{とほみ}男^をの神^{かみ}は、今^{いま}目^ま前^{まへ}展^あ開^たしたる^る天^{てん}地^ちの光^{くわう}景^{けい}を眺^{なが}めて湖^こ面^{めん}に向^{むか}ひ、御^み歌^{うた}詠^よませ

天^あ晴^はれ天^あ晴^はれ瑞^{みづ}の御^み霊^{たま}の言^{こと}霊^{たま}に

天^あ地^{めつち}四^よ方^もの雲^{くも}晴^はれにけり

恐^{おそ}しきものは戀^{こひ}かも思^{おも}ひかも

この天^あ地^{めつち}を闇^{やみ}となしける

天^あ地^{めつち}を深^{ふか}く包^{つつ}みし闇^{やみ}雲^{くも}も

情^{なさけ}の言^{こと}葉^はに晴^はれ渡^{わた}りぬる

瑞^{みづ}御^み霊^{たま}神^{かみ}の苦^{くる}しき御^み心^{こころ}を

悟^{さと}りて吾^{われ}は涙^{なみだ}に暮^くるるも

玉^{たま}野^の湖^{うみ}の鏡^{かがみ}に月^{つき}は冴^さえにつつ

波^{なみ}は静^{しづか}に香^かりこそすれ

八^{やち}千^ひ尋^{ひろ}の底^{そこ}まで澄^すめるこの湖^{うみ}の

深ふかき思おもひを和やはらげし岐き美みよ

目め路ぢ遠とほく彼かなた方たの岸きしにうつろへる

玉たま野の神かみ森もり見みえ初そめにける

一ひと片きれの雲くもさへも無なき大おほ空そらの

心こころにかがよふ神かみの靈たま線しひ

大たい愛あいの神かみの心こころに比くらぶれば

吾われは小ちいさき愛あいに狂くるへるも

今け日ふよりは心こころの手たづ綱なひき締しめて

大たい愛あいの道みち進すすまむと思おもふ

戀こひすてふ心こころは愛めぐし清すがしもよ

天あめと地つちとの中なかに輝かがく

湖うな原ばらをなでて吹ふき來こしそよ風かぜの

わが面おも吹ふきて香かをる宵よひなり

見みの限かぎり月つきの下したびに草くさも木きも

安やすき眠ねむりにつきにけらしな

荒あらかぜ風に揉もまれて汀みぎはの葭よしあし葦あしは

片かたなび靡なびきつつ露つゆに光ひかれる

瑞みづみたまめぐみ御み靈たま惠めぐみの露つゆの露うるほひに

この天あめ地つちは洗あらはれにける

闇やみ深ふかく湖うなばら原あ荒あれしたまゆらを

吾われは艱なやみぬ御みとも供つかに仕つかへて

吹ふきすさび荒あれ狂くるひたる湖うなかせ風かぜも

静しづまりにけり岐き美みの情なさけに

頼たのむべきものは神かみかも恐おそるべき

邪ま曲がは戀こひかもこの天あめ地つちに

かくならば勇いさみて御みとも供つか仕つかへつつ

吾われ渡わたり行ゆかむ神しんめ馬めの守まもりに

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

はろばろと岐美の旅路に仕へ來て

吾は悟りぬ世の狀態を

戀心燃えつ消えつつまた燃えつ

天と地とを恨みにとざせり

とざしたる天地の闇も情ある

生言靈に明け放れたり

大空を隈なく包みし黒雲は

戀の炎と思へば恐し

美しき紫微天界のことごとは

愛より生みしと思へば畏し

愛善と愛惡交々ゆきかひて

紫微天界は固まり行くも

天も地も圓屋の比古の神の稜威に

丸く治めむ神のまにまに

神と神國と國との交らひを

丸く治めむわが誓ひなり

丸々と御空の月は玉野湖の

上と下とにかがよふこの宵

この宵の移り變りのさま見つつ

わが行先の光見つむる

目路遠きこの神國を固めむと

驅け廻ります瑞の御靈はや

多々久美の神は御歌詠ませ給ふ。

わが力及ばざりけり戀雲の

四方をふさぎしその束の間を

國土造る神の御供の畏さを

思へば心ゆるされぬかな

湖荒れて大蛇の出でしたまゆらを

吾は畏み見て居たりける

玉野湖の岸邊に立ちて吾はただ

浪風ぎ渡る時を待ちつつ

不甲斐なき吾と思へど戀雲を

晴らさむ術なく黙し居にけり

瑞御靈艱める態を目前

見つつ術なき吾を悲しむ

言靈に恵の露の輝きて

大蛇の胸は和みたりけむ

恐しく忌はしきものは戀すてふ

心に生まる影なりにけり
縹渺と限りも知らぬ大野原も

月の光に輝きそめたり

久方の天また地を黒雲に

包みし邪曲は戀なりにけり

國土生みの供に仕へて恐しき

戀てふものの影見たりけり

村肝の心静めて黙しつ

眺むる戀の大蛇すさまじ

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

天地によみがへりたる心地して
鏡の湖の月仰ぐかな

天心てんしんに輝かがやく月つきのかけ冴さえて

玉野湖たまのこすゐ水みは澄すみ照てらひけり

移うつり行ゆく世よの状ありさま態まをつくづく

わが目ま前あたり俣しびけらしな

言こと靈たまの嚴いづの力ちからも揉もみ消けして

戀こひの炎ほのほは燃もえ立たちにけり

燃もえ立たちし戀こひの炎ほのほは雲くもとなり

雨あめとなりつつ天地あめつちを包つつめり

瑞御靈みづみたま貴うづの神業かむわざ御子みこ生うみの

艱なやみ思おもへば謹つつしみの湧わく

謹つつしみて國魂くにたま神がみを生うみまする

神かみの神業みわざの難かたきを俣しのぶも

地つち稚わかく漂ただよへる國土くにを固かためずば

紫微しびてん天界んかいは榮さかえざるらむ

愛善あいぜんの神代かみよながらも兔ともすれば

恨うらみ憎にくみて争あらそふが憂うし

葭葦よしあしの生おひ茂しげりたる國原くにばらを

拓ひらかす岐美きみの艱なやみを思おもふ

美波志比古みはしひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

吹ふき荒すさぶ荒野あらのの風かぜも湖風うなかせも

ひたをさまりぬ情なさけの言葉ことばに

神々かみがみはいふも更さらなり天界てんかいの

總すべては情なさけによみがへるなり

天界てんかいに情なさけを知らぬ神かみは無なし

瑞みづの御靈みたまの艱なやみ畏かしこし

天地あめつちを包つつみし雲くもも晴はれ渡わたり

清すがしくなりぬわが魂たま線しひは

廣くわう袤う萬ばん里り稚わかき國くに原はら拓ひらきます

岐き美みの功いさをの畏かしこさ思おもふ

大おほ空ぞらの月つきの御み靈たまと生あれませし

瑞みづの御み靈たまの功いさを光ひかるも

大おほ空ぞらの月つきさへ雲くもに覆おほはるる

世よに言こと靈たまの稜いづ威づを思おもへり

言こと靈たまの御み稜いづ威づに生なりし天てん界かいは

澄すみきらひつつ塵ちりの無なき國くに

罪つみ穢け塵れちりさへも無なき國くに原はらを

曇くもらせ荒すさぶ戀こひの黑くろ雲くも

天てん界かいに戀こひすてふことなかりせば

天あめ地つちを包つつむ雲くもは起おこらじ

愛あい善ぜんの光ひかりの満みつる天てん界かいを

穢けがさじものと言こと靈たま宣のるも

善よし惡あしのゆきかふこれの天てん界かいは

雲くも霧きり立たつも是ぜ非ひなかるらむ

産うぶ玉たまの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

野の路ぢ遠とほく岐き美みをまも守もりて玉たま野の湖うみの

岸きし邊へに見みたり世よの状あり態さまを

永とこ久しへに崇たると宣のりし比ひ女め神がみの

心こころ思おもへば悲かなしかりける

永とこ久しへに恨うらみをのこ残のこす曲まが業わざを

改あらためませよ神かみます國くに土にに

愛いとしさのあまりあまりて比ひ女め神がみの

恨うらみの心こころ燃もえ立たちにけむ

世を恨み神を恨むも戀すてふ

心の絲の纏なりけり

村肝の心の纏解くよしも

なくななく悲しき戀なりにける

神生みの神業に仕ふる岐美なれば

一人愛しく思し給はむを

愛善の天界なれば愛しさの

心は何れの神も持つなり

比女神の深き思ひは湖の

底ひもつひに湧き立ちにけむ

恐しきものは戀かも恨みかも

この神國も破れむとせし

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

たまきはる生命の戀を遂げむとて

艱みの果は大蛇となりぬる

玉の緒の生命惜まず細女の

戀の炎は天をこがせり

瑞御靈情の籠る言靈に

この天地は明け放れたり

深々と夜は更けにけり月影も

西空低ううつろひにけり

大空に傾く月のかけ冴えて

わが駒の影長くなりけり

主の神の神言の儘に國魂神

生まさむ岐美を愛しと思ふ

凡神の身にしおはさば非時に

かかる艱みに逢はせまじものを

凡^{ただが}神^{がみ}の眼^{まなこ}に寫^{うつ}る我^{わが}岐^き美^みの

神^み業^{わざ}は惡^あしと寫^{うつ}りこそすれ

凡^{ただが}神^{がみ}の妬^{ねた}み嫉^{そね}みの恐^{おそろ}しさに

ましてつれなき戀^{こひ}のあだ神^{がみ}

果^{はて}しなき艱^{なや}みを胸^{むね}に包^{つつ}みつ

この湖^{うなばら}原^{はら}を渡^{わた}らす岐^き美^みはも

わが岐^き美^みの心^{こころ}の艱^{なや}み思^{おも}ひつつ

わが目^めの涙^{なみだ}湖^{つみ}と漂^{ただよ}ふ

結^{むす}比^ひ合^あの神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

天^{あめ}と地^{つち}を結^{むす}び合^あせて月^{じつ}日^{げつ}の

影^{かげ}を宿^{やど}せる玉^{たま}野^の湖^{うみ}天^あ晴^はれ

月^{つき}も日^ひも澄^すみきらひたる湖^{うなばら}原^{はら}の

岸邊きしべに立ちたて世よを思おもふかな

蟲むしの音ねもいやさやさやに響ひびきつつ

水面みなもの月つきは強つよく冴さえたり

湖みづうみに浮うかべる月つきの影かげ見みれば

瑞みづの御靈みたまの心こころを思おもふ

天地あめつちを結むすび合あはせの神かみながら

この戀網こひづなを吾われ如何いかにせむ

兔とも角かくも生言靈いくことたまの御光みひかりに

明あかし進すすまむ玉野森たまのもりまで

駿馬はやこまの足搔あがき急せはしく地ちをかきて

吾われを促うながすさまの愛めくしも

湖みづうみに浮うかべる月つきの影かげ見みつつ

駒こまは勇いさむか足搔あがきせはしも

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 月讀は東に天津日は西に

ゆきかひにつつ湖面を照らすも

西空の雲井の幕を押しわけて

東に進ます月讀の神

東雲の空押しわけて天津日は

日毎に西の空に沈むも

右左月日のゆきかひあればこそ

この天界は榮えこそすれ

月と日を天と地とをまつぶさに

結び合せて神代を守らむ

眞言嚴の神は御歌詠ませ給ふ。

此處に來て思はず時を移しけり

愛と戀との艱みの幕に

天高く國原廣し月讀は

惠の露を隈なく配りつ

いざさらば駒を竝べて御供せむ

この湖原はよし深くとも

駿馬の手綱をしかと握りしめ

泳ぎ渡らむ駒もろともに

おほけなくも吾先頭に仕ふべし

續かせ給へ百の神等

斯く謠ひ終へて白馬にヒラリと跨り、一鞭あてて月照る湖面を、龍蛇の躍るが
如く浪を蹴立てて走り行く。顯津男の神を始めとし百神等は、眞言嚴の神の踏切
りし浪の穂を傳ひて、驀地に馬上進ませ給ふ。

（昭和八・一〇・二四 舊九・六 於水明閣 森良仁謹録）

第一六章 眞言の力（一）（一八八四）

玉野湖の水は眞二つに分れて、底より大龍の頭部を擡げ、其頭上に肅然として、
嬋妍窈窕たる女神の姿佇立し、顯津男の神一行の馬前を開きつつ、瞬く内にさし
もに廣き湖面を向つ岸に渡り着きたり。龍頭の上に立たせ給ふ女神は生代比女の
神の御姿なりける。茲に生代比女の神は顯津男の神の厚き心にほだされて、怨恨
の念慮は忽ち感謝となり、歡喜悅樂と化して、以前に勝る容貌美しき女神と更生
し給ひしなり。

茲に顯津男の神は生代比女の神の、雄々しく、優しく、美しき御姿に恍惚とし
て心魂を奪はるるばかり、敬虔の念止み難くおはしけるが、生代比女の神は早く
も其御心を悟りて滿悅の情に堪へかね、忽ち歡喜は凝りて體内に御子宿らせ給ひ

ければ、今迄燃え立ちし炎は雲散霧消し天日晃々と輝きわたり、月は清涼の空気を全身にそそぐ心地して、全く解脱し給ひ、岸にのぼらせ給ふや、龍體は忽ち湖面の水泡と消えて、傾く月は水面に斜の光を投げ、平穩無事の光景は譬ふるに物なきまでとなりぬ。茲に生代比女の神は、御歌詠ませ給ふ。

☐ 天晴れ天晴れ岐美の眞心にほだされて

わが戀雲は消え失せにけり

村肝の心足らひて永久に

岐美の眞言によみがへりぬる

飽くまでも恨みまつると思ひてし

岐美を尊く仰ぎぬるかな

右左水火かはさずも情ある

岐美の心に御子はらみける

岐美思ふ心は凝りて御子となり

わが腹みの中に宿やどらせにけり
今いまよりは玉野たまのこすみ湖水みを乾かわかせて

この稚わか國かぐに土つを造つくり固かためむ

眞まなづる鶴わの稚わかき國くに原はら永とこ久とはに

固かためて御み子こを育そだてむと思おもふ

眞まなづる鶴わの山やまの御み魂たまと現あらはれし

吾われにたまひし貴うづの御み子こはや

この森もりに鎮しづまりいます玉野たまの比ひ女めは

國く土に生うみの神かみ吾われ力ちから添そへむ

今け日ふよりは心こころの駒こまを立たて直なほし

岐き美みと比ひ女めとの神かみ業わざ助たすけむ

神かみ々の生いく言こと靈たまに助たすけられ

吾われは蛇じゃ體たいゆよみがへりける
』

詠よませ給たまふ。
顯津男あきつをの神かみは湖岸こがんに立たちて生代比女いくよひめの神かみの心こころの曇くもり晴はれたるを悦よろこび給たまひて、
御歌みうた

言靈ことたまの御稜威いづかしこ畏まごころし眞心まごころの

光尊ひかりたふとし比女ひめを救すくひぬ

左ひだり右みぎりの我神業われかむわざはなさねども

眞心まごころに御子みこは宿やどりけるかも

この湖うみの清きよきが如ごとく玉野森たまのもりの

榮さかゆる如ごとく御子みこ育そだちませ

眞鶴まなづるの山やまに湧わき立たちし黒雲くろくもも

晴はれ渡わたりたる今宵こよひぞ嬉うれしき

東雲しのめの空そらほのぼのとあかりつつ

心こころの空そらに陽ひは昇のぼりけり

國土くに生うみの神業みわざに仕つかふる玉野比女たまのひめを

かみう 神生みの神と誤り居たりき

いくよひめ 生代比女は眞鶴山より生れし神

おも 思へば神の依さしなりしか

あや 怪しかる心なけれど契らねど

しぐみ 經綸の御子は宿らせたまへり

いま 今となり主の大神の果しなき

しぐみ 經綸の絲を手繰り得たりき

ス 主の神の御ゆるしなくば如何にして

おもひにはらむこと 想像妊娠事のあるべき

おろか 愚しき我なりにけり御子生みの

わざ 業は一つの道と思ひし

けふ 今日よりは玉野の森に暫くを

われしづ 我鎮まりて國土を固めむ

みづつみ 湖を茜に染めて紫の

雲くもわけのぼる朝津日あさつひの神かみよ

生代比女いくよひめ心こころ和なごみて御子みこ孕はらみ

天津日あまつひ豊ゆたかに昇のぼりたまひぬ

我われは今いま國くに土に生うみ神かみ生うみの神業かむわざの

差別けぢめを委曲つばらに悟さとりけらしな

遠見男とほみをの神かみは感歎かんとん措おく能あたはず、御歌詠みうたよませ給たまふ。

駒こまの背せに跨またがり渡わたる玉野湖たまのうみの

面おもてに浮うかぶ天津日あまつひの光かけ

龍神りゅうじんの姿すがた忽たちまち現あらはれて

頭かしらに立たたせし生代比女いくよひめ天晴あはれ

瑞御靈みづみたまあつき心こころに絆ほだされて

生代いくよの比女ひめはよみがへりましぬ

情なさけある生言いくことたま靈たまと眞心まごころに

よみがへりたる比女ひめぞ尊たふとき

八千尋やちひろの深ふかき湖うなも面もをやすやすと

生言いくことたま靈たまに渡わたりけるかも

千重ちへの浪なみ乗のりきる駒こまの脚あし早はやみ

千々ちぢに月影つきかげくだきて渡わたれり

大空おほぞらの月船つきふね西にしに白しろけつつ

東あづまの空そらに日は昇のぼりたり

眞鶴まなづるの山やまを包つつみし常闇とこやみを

晴はらして昇のぼる朝津日あさつひの影かげ

國土くに生うみの御供みともに仕つかへて今日けふはしも

神かみの經綸しぐみの深ふかきを悟さとりぬ

玉野比女たまのひめ出で迎むかへまさぬを怪あやしみし

わが心こころ今いま解とけ初そめにけり

國くに土に生うみと神かみ生うみの差け別ち知しらずして

唯ただひたすらに煩わづらひしはや

ほのぼのと霧きりたちのぼる玉たま野のう湖みの

波なみは静しづかにをさまりにけり

生い代く比よ女ひ恨めの炎ほ燃もえたちて

浪なみ逆さ卷かきし夜よの凄すさじさよ

浪なみ猛たけり風かぜ吹ふき荒すさみし湖う面なも

今け日は静しづけく天あま津つ日ひ浮うべり

濛もう々と霧きりは立たてども天あま津つ日ひの

光かげ遮さらず湖うの面も明あるき

吾われも亦また主スの大神おほの御み心こころを

悟さとりて岐き美みを助たすけまつらむ

生い代く比よ女ひ神かみのめぐしき御み心こころを

退しけし吾われも罪つみなりにけり

眞心の光にさやるものはなし

小さき心にとらはれ難みし

駿馬の背に朝津日は輝きて

湖水の青と色を競へり

白駒も岸邊に見れば青かりき

今日より吾は白馬と名づけむ

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

天變地妖も跡なく消えて天地に

日は輝きぬ月は沈みぬ

瑞御靈月の心も凧ぎにけむ

遠の大野にかくろひにけり

此處に来て神の經綸をさとりにけり

なごむ心こころに御子みこ宿やどりましぬ

こんもりと常磐樹ときはぎしげ繁しげる玉野森たまのもりも

主スの大神おほかみの御姿みすがたなりけり

澄すみきらふ天地あめつちのなかに濃緑こみどりの

色いろ冴さえわたる玉野森たまのもりはも

恐おそしきものは戀こひてふ心こころぞと

吾われははじめて悟さとらひにけり

戀こひすてふ心こころに神かみも生うまるなり

鬼おにも大蛇をろちも生うみ出いだすなり

よしあしのゆきかふ世よなり吾われは今いま

生代いくよの比女ひめに世よのさまを見みし

葎よしも葦あしも稚國原わかくにばらに生おひ立たてる

思おもへば何なんの差別けぢめなきかな

善よしと言いひ惡あしと稱となふも神々かみがみの

心の駒の動きなりける

堅き齒は柔き舌に先だちて

亡ぶるためしある世なりけり

堅き木は風に倒され柔らかき

柳はもとの如く立つかも

玉野湖の汀に生ふる楊柳の

風に靡ける姿やさしも

常磐樹の年ふる松は太くとも

風に倒るる御代なりにけり

そよと吹く風にも靡く楊柳の

いやながながに倒れぬ御代なり

天地の中に生れて心狭き

一すぢの吾を今日みつめけり

多々久美の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 美しき愛の力に照らされて

生代の比女は光らせたまへり

日月の暗を晴らして照れるごと

生代の比女の胸は晴れぬる

瑞御靈神の神言の神業の

世の常ならぬを畏み思ふ

主の神の生ませたまひし玉野森は

いやますますに輝きそめたり

この森に鎮まりいます比女神の

清き心は松に見ゆなり

白梅の花の香を送り来る

科戸の風の清しき朝なり

汀邊みぎはべに竝ならびて榮さかゆる楊柳しだれやぎの

梢しやうすがしく湖面こめんを撫なづるも

楊柳しだれやぎの根本ねもとを封ふうじて葭葦よしあしの

葉はは青々あをあをと風かぜにそよげる

天國てんごくの光景すがたなるかも梅薰うめかをり

湖面こめんを飛とび交かふ田鶴たづの姿すがたは

白鳥しらとりは波なみに翼つばねを浮うかべつつ

靜しづかに遊あそぶ朝あさの湖原つなばら

よべの嵐跡あらしあとなく晴はれて天國てんごくの

さまありありとうつらふ朝あさなり

瑞御靈みづみたまはるばるここにあれまして

國土くに造つくります功尊いさをたふとき

言靈ことたまの效驗しるしなきまで曇くもりたる

戀こひの思おもひの恐おそろしきかな

愛あいすてふちから力の強つよさ悟さとりけり

鬼おにも大蛇をろちも影かげをひそめぬ

遠とほの野のにぼんやり霞かすみし眞鶴まなづるの

山やまの尾上をのへは日ひにかがやけり

眞鶴まなづるの山やまに生あれましし生代比女いくよひめ

神かみの心こころの和なごみて現あれしよ

終日ひねもすを駒こまに鞭むちうちて進すすみ來こし

遠とほの眞鶴まなづる山やまは晴はれたる

生代比女いくよひめ神かみの心こころの曇くもりより

眞鶴まなづる山やまは霞かすみたりけむ
㊦

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

㊦
玉野湖たまのうみの浪静なみしづまりて天津日あまつひの

かがよふ湖は瑞御靈かも

深く廣く清けく澄める玉野湖は

瑞の御靈の心なるらむ

小夜嵐凧ぎて天津日昇ります

朝あけの空見れば嬉しも

生代比女嬉しかるらむ瑞御靈

清しかるらむ御子孕みませば

龍神と姿を變じわが岐美の

先頭つとめし比女神かしこし

わが駒は浪ふみわけてだうだうと

地を行くごとく進みたるかも

言靈の御稜威に深き湖面も

駒やすやすと渡らひにけり

言靈の水火に生れし駒なれば

浪の上渡るも安かりにけむ

吾も亦ウの言靈に生れたる

神にしあれば身は重からじ

瑞御靈ア聲に生れまし吾はウの

聲に生れし喜びの神

世の中の喜びごとを司どりて

萬代の末まで幸ひせむと思ふ

喜びの心しなくば何事も

うま怜に委曲に遂げ得ざるべし

夜半の嵐風ぎたる今朝の喜びを

吾永久に傳へむと思ふ

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

湖みづうみにみはしなけれどわが魂たまは

岐美きみを守りて安やすくわたりぬ

龍神りゅうじんの導みちびきたまふ浪なみの穂ほを

渡わたるも美波志みはしの神かみのいさをよ

神業かむわざを貫つらぬき通とほす功績いさをしに

美波志穂みはしほの神吾かみわれは仕つかへむ

如何いかならむ難なやみにあふも美波志穂みはしほの

神かみあるかぎり難なやむことなし

御尾前みをさきに仕つかへて吾われは瑞御靈みづみたま

貴うづの神業みわざを守りまつらむ

山やまに海うみに河かはに谷間たにまに吾われこそは

美波志みはしとなりて行手ゆくてを守らむ

美波志穂みはしほの言靈ことたまの水い火きなかりせば

如何いかで榮さかえむ稚國原わかくにばらは

(昭和八・一〇・二七 舊九・九 於水明閣 加藤明子謹録)

第一七章 眞言の力(二) (一八八五)

産玉の神は、凧ぎ渡る湖面に寫る天津日影を打ち仰ぎ、
四方の光景を讚美しながら、御歌うたはせ給ふ。

久方の天は晴れたり荒金の
地はよみがへる眞鶴の國よ
主の神の依さし給ひし天國の
態ありありとわが目に生くるも
凧まじく浪逆卷きし湖原も
凧ぎ渡りたる鏡の湖はも

月影は草にし
のべど天津日の

豊榮昇る稚き國原

鳳凰は高く翼を天に搏ち

鶴は清しく鳴き渡る國

湖の面を眞白に染めて白鳥の

遊べる姿はわが目にさやけし

湖の青空の蒼にも染まらずに

あはれ白鳥浪に游げる

白鳥の湖面に遊ぶ態見れば

蓮の華の咲けるがに思ふ

遠く近く浪に浮べる白鳥の

限りも知らぬ今朝の喜び

國土未だ稚くはあれど瑞御靈

出でます大野は榮えの色見ゆ

天地あめつちの中になかにこんもり浮うかびたる

玉野たまのの森もりの緑みどりさやけし

瑞御みづみたま靈いくよ生代ひめがみの比まごころ女神まごころと眞心まごころの

合あはせ鏡かがみに御子みこ孕はらみましぬ

目め出度でたさの限かぎりなりけり産玉うぶだまの

神かみの功いさをに御子みこを守まもらむ

安やす々と生うみます吉日よきひことほ壽とほぎて

産玉うぶだま神かみは御歌みうたまゐらす

永とこ久しへに生あれます御子みこよ幸さきくませ

まさきくまして世よを生いかしませよ

千早ちはや振ふる神かみの依よさしに生あれませる

御子みこはくはしく賢さかしくましませ

瑞御みづみたま靈かみ神かみに仕つかへて吾われは今いま

御子みこ孕はらみます吉日よきひにあひぬる

眞鶴まなづるの稚わかき國くに原はら固かためむと

經しぐみ綸の御み子こは宿やどりましけむ

久ひさ方かたの空そらの蒼あをみに溶とけ入いりて

今け日ふの樂たのしき幸さちにあふかな

久ひさ方かたの御み空そらは高たかし湖うみ深ふかし

瑞みづの御み靈たまの惠めぐみはあつし

廣ひろき厚あつき大おほ御み心こころを照てらしまして

生いく代よの比ひ女めを生いかし給たまへり

生いく代よ比ひ女めの神かみよ今け日ふより御み腹はらなる

御み子こに朝あさ夕ゆふ心こころを配くばらせ給たまへ

この御み子この生あれます上うへは眞まなづる鶴の

稚わかき國くに原はらいや榮さかゆべし

御おん供ともに仕つかへて遠とほく渡わたりこし

吾われは始はじめて生いき甲が斐ひを思おもふ

産玉うぶだまの神かみの司つかさと任まけられて

産うみの御靈みたまの御子みこを守まもらむ

神々かみがみの孕はらます御子みこを平たいひらかに

いと安やすらけく生うませ奉まつらむ

産玉うぶだまの神かみなる吾われは産うぶの神かみ

萬代よろづよまでも産子うぶこを守まもらむ

天地あめつちの中なかに生うまれし眞鶴まなづるの

稚わかき國原くにばらに生あれます御子みこはも

大空おほぞらに天津あまつ日輝ひかがやき地ちの上うへに

百草ももぐさ萌もゆる稚國原わかくにばらよ

はしけやし眞鶴まなづるの國くにの中なか空ぞらに

神代みよを祝いはひて鳳凰舞ほうわうまふなり

玉野たまの森もり常磐ときはの松まつの繁しげり枝えに

御子みこを育そだつる眞鶴まなづるの群むれ

八^や十^そ日^か日^ひはあれども今^け日^ふの生^い日^くこそ

た^ため^めし^しもあ^あら^らぬ喜^{よろこ}び^こに満^みつ^つる^るも

願^{ねが}は^は千^ち代^よ萬^{よろづ}代^よに榮^{さか}え^えませ

眞^ま鶴^{なづる}の^の名^なを^を負^おひ^ひし國^{くに}原^{はら}

魂^{たま}機^{きは}張^{はる}の^の神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

た^たま^まき^はる^る生^{いの}命^ちの^の限^{かぎ}り^り天^{あめ}地^{つち}の

眞^ま言^{こと}の^の道^{みち}に^に吾^{われ}は^は仕^{つか}へ^へむ

孕^{はら}ませ^せる^る御^み子^この^の生^{いの}命^ちを^を永^{とこ}久^{しへ}に

守^{まも}り^り生^いか^かさ^さむ魂^{たま}機^{きは}張^{はる}の^の神^{かみ}は

一^{ひと}片^{ひら}の^のあ^あだ^だ雲^{ぐも}も^もな^なく^く澄^すみ^みき^きら^らふ

御^み空^{そら}の^の下^{した}に^に満^みつ^つる^る喜^{よろこ}び^こ

洋^{やう}々^{やう}と^と風^なぎ^ぎ渡^{わた}り^りた^たる^る湖^{うみ}の^の面^もに

浮き浮き遊べる白鳥あはれ

天地も壽ぎますか中空に

眞鶴鳳凰舞ひつ遊びつ

九臯に清く響ける眞鶴の

聲に生るる千歳の喜び

勇ましき姿なりけり湖の面を

駒立て竝べ渡らす姿は

龍頭に豊に立ちて浪の穂を

進ませ給ひし女神の尊さ

瑞御靈あとに従ひ駿馬に

夜の湖原やすく渡りし

駿馬の嘶き今朝は殊更に

澄みきらひつつ朝日はかがよふ

若楊の風に髪をば梳る

姿すがたは生代いくよの比女ひめに似にたるも

青苔せいたいの浪なみを洗あらひて天津風あまつかぜ

おもむろに吹ふく玉野湖たまのうみはも

次々つぎつぎに汀みぎはは廣ひろくなりにつつ

湖うみの水量みづかさひきくなりゆく

瑞御靈みづみたま國土くに造つくりますしるしにや

つぎつぎかわく玉野湖たまのみづうみ

そよと吹ふく風かぜにも靡なびく葭葦よしあしの

纏もつれて生いくる天地あめつちの道みち

纏もつれ合あひ絡からみ合あひつつ葭よしと葦あしは

天地てんちの水い火きをささやきてをり

さらさらと葦あしの葉は渡わたる風かぜの音おとに

のりて匂におへる白梅しらうめの香かをり

白梅しらうめは所狭ところせきまで玉野森たまのもりの

彼方此方に笑へる目出度さ

白梅の花は清しも芳しも

生代の比女の粧ひに似て

白梅の花の唇吸ふ蝶の

心やさしき瑞御靈かも

打ち仰ぐ御空は清く澄みきらひ

地は青草の萌ゆる樂土よ

斯かる世の斯かる神業に仕ふるも

神のたまひし幸なりにけり

まだ國土は稚くあれども天渡る

月日の影はさやけかりけり

くはし御子今や御腹に宿りまして

國土の柱と立ちます尊さ

たまきはる御子の生命を永久に

守りて吾は仕へ奉らむ
山に野に満ち足らひたる主の神の
恵の露に榮ゆる神等

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の天津高宮晴れ渡り

スの言靈は鳴り響くなり

言靈の清しき水火を結び合せ

生れます眞鶴の國のさやけさ

愛善の天界なれば夜嵐も

生言靈に吹き止みにける

戀雲の深く包みし比女神の

心は晴れぬ生言靈に

天津眞言籠らずあれば言靈の

水火も曇りて露だも光らず

一時のなだめ言葉は久方の

天津眞言の水火にかなはず

瑞御靈なだめの言葉を打ち消して

天津眞言に比女を生かせり

毛筋ほども偽りのなき天界に

その場のがれの言葉は應はず

目前吾は眞言の言靈の

力を見たり光を拜めり

久方の天津眞言と國津眞言

結び合せて榮ゆる道なり

天津日の豊榮昇る神國に

如何で許さむなだめ言葉を

善よし惡あしの差け別ちめをただし天地あめつちの

神かみを導みちびく世よなれば安やすし

水い火きと水い火き結むすび合あせの神かみとなり

國く土に生うみ神かみ生みの神かみ業わざ守まもらむ

美う味ま素もとの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

スこゑの聲こゑの言こと靈たまうまま怜らに宣のり上あげて

この稚わか國くに土を拓ひらき固かためむ

美う味ま素もとの神かみと現あられ吾われは今いま

眞ま鶴なづる國くにの眞ま秀ほ良ら場ばに立たつ

眞ま鶴なづるの國くにの眞ま秀ほ良ら場ば玉たま野もり森に

國く土に生うみますすと待またたせる女め神がみよ

玉たま野もり森とき常は磐はの松まつの白しろきまで

巢ぐへる鶴の聲澄みきらふ

眞鶴の只一聲のひびかひに

静まりかへる百千鳥かも

夜の湖駒の背に乗り渡り來て

主の大神の恵を思ふ

主の神の生ませ給ひし國原に

邪曲の猛びの如何であるべき

村肝の心曇りて邪曲を生み

禍を生む神代なりにけり

神々の迷ひの水火の集りて

天地の水火汚すは恐し

眞言嚴の神は御歌詠ませ給ふ。

嚴いしくも雄を々をしくもあるか瑞御靈みづみたま

雄心をこころ照てりて御子みこ孕はらみませり

生代いくよひ比ひ女神めかみの眞言まことの現あらはれて

瑞みづの御靈みたまの露つゆを宿やどせり

萬代よろづよの末すゑの末すゑまで光ひかるらむ

これの目め出度でたき神嘉言かむよごとかも

草くさも木きも生言靈いくことたまに靡なびきつつ

花はな咲さき満みちて晴はれ渡わたる國くに土に

そよと吹ふく科戸しなとの風かぜの芳かんばしさ

經綸しぐみの花はなの咲さき満みてる國くに土に

白梅しらうめの花はなの粧よそほひ岐き美みに見みる

今日けふの湖こ畔はんの清すがしき眺ながめよ

目めの限かぎり大野おほのの原はらは晴はれ渡わたり

眞鶴山まなづるやまは空そらに聳そびえつ

國中比古の神の功に眞鶴の

山の常磐樹繁らへるかも

一行の神々は歡びに満ち、天地の光景を讚美しながら、再び駒の背に跨り、程
遠からぬ玉野の森の聖所をさして進ませ給ふぞ勇ましき。

(昭和八・一〇・二七 舊九・九 於水明閣 森良仁謹録)

第一八章 玉野の森(一八八六)

顯津男の神は、一行の神々に送られ、玉野の森の聖所に駒を進ませ給ふ。
東西十里、南北二十里に渉る玉野森は、老松天を封じて立ち並び、白砂を以て
地上を覆はれ、あなたこなたの窪所には、清泉の水を湛へ、自ら清しき神森なり。
玉野比女の神の館は、この森の中央の小高き丘の上に、宮柱太敷立て、高天原に

千木多加知りて、主の大神の神靈を嚴かに祀り給ひて、玉野比女の神自ら齋主となりて、朝な夕なを真心の限りを盡し、仕へ給ふぞ畏けれ。
顯津男の神は、玉野森に駒の蹄を一足二足踏み入れ乍ら、駒を止め御歌詠ませ給ふ。

見渡せば目路の限は常磐樹の

松の緑の榮ゆる聖所よ

國土稚きこの天界に珍しも

千歳を経にし松繁るとは

わがい行く道の先々常磐樹の

松は繁りて美し國原よ

國土生みの神業仕ふと吾は今

この神森を清しみ來にけり

幾千萬の田鶴の巢ぐへるこの森の

緑に千代の色をそめたり

老松は野路吹く風を抱へつつ

神代とこしへを歌ふ聖所よ

かくの如清しき廣き神森の

此處にあるとは知らざりにけり

松清し地又清し水清し

眞鶴國の眞秀良場にして

玉野比女いづれに在すか御姿

さへも見えなく今日の淋しさ

生代比女御子孕ますと聞しより

玉野の比女はかくろひ坐ししか

遠見男の神は御歌うたひ給ふ。

吾は今駒を止めて縁濃き

この神森を清しみ見るも

常磐樹の松の樹蔭に白々と

匂へる花を主の神と見つ

主の神の御霊ゆ生れし白梅の

花と思へば尊かりけり

時じくに白梅匂ふこの森は

主の大神の宮居とこそ知る

いざさらば吾前に立ちて御供せむ

馬上ゆたかに御歌うたひつ

斯く歌ひ給ひ、遠見男の神は一行の前に立ち、
白砂青松の清しき森蔭を、駒の
蹄の音勇しく、西へ西へと進ませ給ふ。

圓屋比古の神は、馬上より御歌詠ませ給ふ。

眞鶴山玉野湖のり越えて

今日の吉日に聖所に着けり

眞砂踏む駒の蹄のさくさくと

音の清しも松の下蔭

わが面を吹くそよ風も香るなり

木の間を飾る白梅の花に

玉野比女います館はいづらなる

岐美の出でまし迎へまさずや

行けど行けど果しも知らぬ森蔭を

果なき思ひもどかしみける

眞鶴の國を堅むる國津柱と

生れ出でにけむこれの神森は

多々々久美の神は御歌詠ませ給ふ。

瑞御靈進ます道に隈もなく

森かげ乍ら天津日は光る

常磐樹の松の梢を射し通し

ゆたかにかがよふ天津日の光

右左前も後も常磐樹の

松ヶ枝清しく風を孕めり

大空の蒼をうつしてこの森の

松の梢はますます青し

松の青御空の蒼と重なれる

空に飛び交ふ白き眞鶴

白妙の眞砂を敷ける森蔭を

吾は清しく白馬に跨る

梅匂ふこの神森のほがらかさ

森のあちこち百千鳥啼く

琴の音かはた笛の音が白鳥の

鳴く音清しき玉野森蔭

行けど行けど松のみ繁るこの森の

深きを神の心ともがな

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の天晴れ地は清まりて

常磐の松のしげる聖所よ

まだ稚き眞鶴の國かくの如

老いたる松の繁る目出度さ

神生みの神業終へましし瑞御靈

また國土生ます尊さを思ふ

行けど行けどまだ現れまさぬ玉野比女の

貴うづの館やかたはいづらなるらむ

この森もりは主スの大神おほかみの造つくらしし

眞まなづる鶴るく國くにの要かなめなるらむ

吾われは今いま瑞みづの御靈みたまに従したがひて

はるばるこれの聖所すがどに來きつるも

玉たま野の比ひ女め御心みこころあらばいち早はやく

出いで迎むかへませ岐美きみのお成なりを

美波志みはし比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

あちこちに清きよき眞ま清水しみづ湛たへたる

この神森かみもりは瑞みづの御靈みたまか

水底みなそこの眞砂まさこも清きよく見みえにけり

澄すみきらひたる水みづの光ひかりに

濁^{にご}りなきこの眞^ま清水^{しみづ}を伏^ふし拜^{をが}み

主^スの大神^{おほかみ}の御心^{みこころ}悟^{さと}りぬ

光^{ひかり}闇^{やみ}行き交^かふ世^よにもかくの如^{ごと}

清^{すが}しきもの地に描^{ゑが}かれぬ

主^スの神^{かみ}の繪筆^{ゑふで}になりし玉^{たま}野^の森^{もり}

緑^{みどり}のながめこよなく清^{すが}し

産^{うぶ}玉^{だま}の神^{かみ}は御歌^{みうた}詠^よませ給^{たま}ふ。

白^{しら}砂^{すな}に松^{まつ}の梢^{しすゑ}の樹漏^{こもれ}陽^びは

水^{みづ}玉^{たま}の如^{ごと}うつろひかがよふ

白^{しら}砂^{すな}は年^{とし}ふるままにあからみて

樹漏^{こもれ}陽^び白^{しろ}く庭^{には}を描^{ゑが}けり

白^{しろ}駒^{こま}の脚^{あし}に踏^ふみゆく樹漏^{こもれ}陽^びを

吾^{われ}はおそれみ進^{すす}み行^ゆくなり

天津^{あまつ}日の惠^{めぐみ}は松^{まつ}の樹蔭^{こかげ}にも

輝^{かがや}き給^{たま}ふと思^{おも}へば畏^{かしこ}し

國^{くに}土^に生^うみの神業^{みわざ}仕^{つか}ふと出^いでましし

岐^き美^み乗^のらす駒^{こま}の脚^{あし}早^{はや}きかも

瑞^{みづ}御^み靈^{たま}乗^のらせる駒^{こま}の脚^{あし}早^{はや}み

は^みや御^み姿^{すがた}はか^かくれましぬる

國^{くに}土^に生^うみの神業^{みわざ}助^{たす}けむ吾^{われ}にして

か^かく後^{おく}れしは御^み神^{かみ}の心^{こころ}か

速^{はや}くしてよ^よき事^{こと}もあり遅^{おそ}くして

よ^よき事^{こと}もあり神^{かみ}のまにまに

玉^{たま}野^の森^{もり}の眞^{まさ}砂^ごを踏^ふみて進^{すす}み行^ゆく

駒^{こま}の脚^{あし}音^{おと}清^{すが}しき園^{その}なり

眞^{まな}鶴^{づる}の國^{くに}とこしへに拓^{ひら}かむと

出いでます岐き美みの後うしろ姿で雄を々をし
雄を々をしかる岐き美みに仕つかへて吾われは今いま
これの聖すがど所ををたどり進すすむも
□

魂たま機きは張はるの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

主すの神かみの生いく言こと靈たまや幸さいはひて

この神かみ森もりは生あれましにけむ

玉たま野の比ひ女めの永と久はに守まもらす神かみ苑そのと

思おもへば何なにかつつましくなりぬ

天あま津つ空そらに跼せりつつつ駒こまの脚あし

静しづかかに進すすまむこれの聖すがど所を

駿はや馬こまもこれの聖すがど所をを畏かしこみて

踏ぬぎしあししつつ進すすむ畏かしこさ

清きよららけけきき眞ま砂さににののここるる蹄あし跡あとは

瑞みづのの御み靈たまのの通かよひひ路ぢなりなりけり

吾われはは今いま駒こまのの蹄ひづめをを辿たどりりつつ

瑞みづのの御み靈たまのの御み跡あと追おははむむか

ささししここももるる梢こすえのの繁しげみみととこころろどどこころ

鶴つるのの巢すごも籠かごるる神み苑その清すがししき

穹きゆう天てんにに高たかくく聞きゆるる眞ま鶴なづるのの

聲こゑにに國くに原はら明あけけ渡わたるるららむむ ㊦

結むす比び合あのの神かみはは御み歌うたううたたひひ給たまふふ。

㊦ 天あめのの水い火きとと地つちのの水い火きととをを結むすびあ合あせ

生あれれままししににけけむむここれれのの神み國くにはは

天あめ地つちのの中なか空ぞらににああるる心こ地ちしして

鶴つるの巢籠すしもる松蔭まつかげを行ゆくも

生代比女神いくよひめかみの神言みことも白駒しろこまの

背せに跨またがりて従したがひませり

生代比女神いくよひめかみ生なまみの業仕わざつかへますと

これこゝろの聖所すがどに來きたらす雄々ををしさ
□

生代比女いくよひめの神かみは馬ば上じやうより歌うたひ給たまふ。

□ 天あめと地つちを結むすび合あはせの神かみとます

汝なれは吾胸わがむね悟さとりまさずや

御子みこ生なまみし吾われは一ひと入しほ玉野比女たまのひめ

したはしきままここに來きつるよ

玉野比女たまのひめの神かみにし逢あひてわが胸むねを

明あかし奉まつらむ眞心まごころの水い火きに

常磐樹ときはぎの繁しげれるこれの神森かみもりに
吾比女神われひめがみと永久とほに住すまむか
玉野比女たまのひめの神業みわざ助たすけて永久とこほに
この神森かみもりを守まもらむと思おもふ
眞鶴まなづるの國土くに稚わかければ國土くに造つくる
神かみと議はかりて世よを開ひらくべし
水火いと水い火き結むすび合あせて生うまれたる
御子みこはまさしく國くにの御柱みはしらよ

斯かく言こと擧あげし乍ながら、生代比女いくよひめの神かみは駒こまに鞭打むちうち、一いつ行かうの前さきに立たちて、雲くもを霞かすみと
驅かけ出いで給たまへば、瞬またたくうちにその後姿うしろでさへも見みえずなりける。結比合むすびあはせの神かみは、生いく
代比女よひめの神かみの後姿うしろでを見送みおくり乍ながら、御歌詠みうたよませ給たまふ。

細女くはしめよああ賢女さかしめよ生代比女いくよひめの

神かみの姿すがたのすぐれたるかも

生代比女いくよひめは伊向いむかふ神かみよ面勝おもかつ神かみよ

まつ先さきかけて驅かけ出し給たまふ

吾われよりも前さきに立たつべき神かみ乍なら

今いままで後うしろにつづかせ給たまへり

上かみ下の序ついでを正ただし今いまよりは

國くに土生にうみの業わざに仕つかへ奉まつらむ

生代比女いくよひめ神かみは貴うづの子孕こはらませり

わが仕つかふべき神かみにましける

前さき立ちて進すすませ給たまふ後姿うしろでを

はつかに見みれば光ひかりなりけり

松まつの閒まを輝かがやかせつついち早はやく

岐美きみの御後みあとを追おひ給たまひけむ

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

行けど行けど果しも知らぬこの森の

眞砂に駒の蹄は惱めり

さくさくと駒の蹄の音冴えて

行き悩みたる眞砂の森蔭

玉野湖の湖水に潛み龍となりし

生代の比女は面勝神なり

生代比女面勝神の功績に

なごみ給ひし瑞御靈はも

世の中に女神の強さ悟りけり

進むのみなる神のいさをし

いざさらば駒に鞭うち眞砂原

急ぎ進まむ岐美をたづねつ

斯く歌ひ終り、一鞭あて蹄の音も勇ましく、
ふ。いや果に、眞言嚴の神は御歌うたひ給ふ。

松蔭の眞砂路を一目散に打たせ給

神々の貴の言靈まつぶさに

吾は聞けるも澄める心に

右左清水たたへし清池の

光れる中を嬉しみ行くも

天なるやスの言靈の鳴り鳴りて

かかる聖所は現れにけむ

わが生める荒金の地も主の神の

御靈と思へば畏くぞある

ざくざくと駒の蹄のひびかひも

神の御聲と思へば畏し

今暫し駒に鞭うち進むべし

玉野の比女の御舎近めば

瑞御靈玉野の比女に見合ひまし

言問ひ給はむこの潮どきに

急ぐもよし急がずもよし惟神

神のまにまに進むべきのみ

斯く各も各も馬上ゆたかに、御歌詠ませ乍ら、玉野森の中央なる小高き丘の上
に、廣く建てられし玉野比女の神の門前さして進み給ひぬ。

（昭和八・一〇・二七 舊九・九 於水明閣 谷前清子謹録）

第十九章 玉野の神丘（一八八七）

白梅の薫る玉野の森の白砂を、馬の蹄に踏みながら、老松の蔭を潜りて、

漸く玉野比女の神の鎮まり給ふ聖所に着き給ふ。

この丘は、玉野丘と稱し、南北一里、東西二里にわたる平坦の高地にして、白

銀の砂は、天津日に照りかがよひ、神苑を包める常磐樹は蜿蜒として枝を交へ、

紫微天界の粹を集めたるばかり思はるる聖所なりける。

顯津男の神は、山の麓に駒乗り降り給ひ、丘の上をふりさけ見給ふに、紅、白、

紫、黄、青の五色の幔幕を張り廻され、何事か尊き神の御降臨ありし様子なり。

茲に顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。

國土生むと駒に跨り來て見れば

箒目正しく清められあり

何神の天降りますかは知らねども

いと尊くぞ思はれにける

玉野比女わがいで立ちをよそにして

出迎へまさぬは譯あるらしも

ともかくも謹つしみいやまひこの丘をかを
心こころ清きよめて登のぼり見みむかなら

斯かく歌うたひ給たまふ折をりしも、駒こまを早はやめて入いり来きたりし生い代くよ比ひ女めの神かみは、ひらりと駒こまを飛と
び降おり、御歌みうた詠よませ給たまふ。

☪ 瑞御靈みづみたま早はやくも此處ここに來きませるよ

吾われは急いそぎて後あと追おひまつりぬ

この聖所すがど主すの大神おほかみの天降あもりますか

いと嚴おごそかに思おもはるるなり

神生かみうみの神業みわざに仕つかへし吾われにして

岐美きみに後おくれむ事ことをはぢけり

主すの神かみの天降あもりますにや吹ふく風かぜも

かをり妙たへなり白梅しらうめの丘をかに

いざさらば前に立ちませわれこそは

御後に従ひ御山に登らむ

斯く歌ひ給ふ折しも、遠見男の神一行其他の神々は、漸く駆けつけ給ひ、一齊に駒を飛び降り、老松の枝に手綱を結びつけ、息を休ませながら、遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。

道遠み白駒かけて漸くに

岐美の在所をさぐり來にけり

何神の天降りますにやこの聖所

空吹く風も妙にかをれり

眞鶴の國の眞秀良場この聖所は

國土生み給ふにふさはしきかも

此處にして國の御柱たて給ひ

眞鶴國を治め給ふか

この丘に繁れる常磐の松竝木

すぐれて太く榮えけるかも

松毎に千歳の鶴の巢ぐひたる

この清丘は神の御舎

主の神の天降りましたる心地して

登りなづみぬこの清丘を

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

如何ならむ尊き神の天降りますか

わが足さへも縮まりにけり

稜威高き神の鎮まる神の丘を

わけは知らねど吾は畏みぬ

吹く風も穩かにしてわが面を

清しく照らす木洩陽のかけ

ひ、御歌詠ませ給ふ。
斯く歌ひ給ふ折しも、玉野比女の神は大麻を手にしなから、悠然として現れ給

岐美待ちて氣永くなりし玉野比女

常磐の松と共に老いぬる

神生みの神業に仕ふと永年を

岐美待ちかねて老いにけらしな

幾萬里の荒野をわたり訪ひ來ます

岐美の眞心嬉しかりける

幾度か指折り數へよき月日

待つ甲斐ありて岐美に逢ふかも

主スの神かみはいと嚴おごそかに天あ降りまし
奥おく殿でん深く臨のぞませ給たまへり
いざさらば顯あきつ津男をの神かみ登のぼりませ
われは御みまへ前にたちて仕つかへむ〆

顯あきつ津男をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ〆。

卍
千せん萬まん里りの大おほ野のをわたり公きみ許がりに

今け日は漸やっやく訪たづね來きつるも

苔こけむして神かみさびたてる老らう松しようの

かかげをし見みれば公きみの俣しのばゆ

姫ひめ小こ松まつはや老らう松しようと榮さかゆまで

待またせる公きみをいとおもし思おもふ

かかくならば神かみ生なみ爲なさむ詮すべもなし

心を合せて國土を生まむか
生代比女吾を迎へて貴の御子
孕ませ給へり公に代りて

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

音に聞く玉野の比女の御姿の

尊さ清しさ畏みまつる

眞鶴の山の精より生れ出で
吾御子生みの業に仕へし

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

愛らしき生代の比女の心かな

心安かれ吾も祝はむ
こころやす われ いは

神業を果し給ひし生代比女
かむわざ はた たま いくよひめ

神の神言を尊しと思ふ
かみ みこと たふと おも

今よりは御腹の御子を育みて
いま みはら みこ はこく

ともに神國を造らむと思ふ
みくに つく おも

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。
いくよひめ かみ みうたよ たま

有難し玉野の比女の御言葉
ありがた たまの ひめ おんことば

いくよの末まで忘れざるべし
すゑ わす

國魂の神を孕みし吾にして
くにたま かみ はら われ

公の言葉を有難く思ふ
きみ ことば ありがた おも

顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。
あきつを かみ みうたよ たま

☐ けなげなる玉野の比女の言葉かな

我はいふべき言の葉も無し

ともかくも玉野の比女に従ひて

この清丘に進み登らむ

玉野比女の神の御供に仕へまつり、此處に現れ給ふ本津眞言の神は、御歌詠ま

せ給ふ。

☐ 吾こそはウ聲に生れし本津眞言の神よ

今日嬉しくも岐美を迎へし

比女神の待ちに待たせる瑞御靈

迎ふる今日ぞ嬉しかりけり

はるばると荒野をわたり海を越え

來ませる岐美を尊く思ふ

主スの神かみの天あも降りましける聖すがど所に

着つかせる岐き美みは雄を々をしき神かみはも

眞まなづる鶴くの國くにのひらけし始はじめより

かかると目め出で度たき例ためしはあらし

主スの神かみは天あも降りまし瑞みづみたま御み靈たま

此ここ處こに現あれます今けふ日ふぞ目め出で度たき

玉たま野の比ひ女めは岐き美み迎むかへむとおぼせども

大おほ神かみのみそば離はなれかねつつ

はろばると岐き美みの出いでまし出で迎むかへの

後おくれし罪つみを許ゆるさせ給たまへ

玉たま野の比ひ女め神かみに代かはりて今いま此ここ處こに

ことわけのぶる本もと津つ眞ま言ことの神かみよ
□

待まち合あ比は古せひこの神かみは御みうた歌たよ詠よませ給たまふ。
。

☞ 朝^{あさ}まけて主^すの大神^{おほかみ}は降りまし

瑞^{みづ}の御靈^{みたま}は今^{いま}現^あれましぬ

愛^{あい}善^{ぜん}の紫^し微^び天^{てん}界^{かい}の眞^ま秀^ほ良^ら場^ばに

今^け日は嬉^{うれ}しも神^{かみ}々^{がみ}迎^{むか}へて

いざさらば玉^{たま}野^のの比^ひ女^めの導^{みちび}きに

登^{のぼ}らせ給^{たま}へこの清^{すが}丘^{をか}へ

顯^{あきつ}津^つ男^をの神^{かみ}は、

☞ 有^{あり}難^{がた}し三^み柱^{はしら}神^{がみ}の出^いで迎^{むか}へ

厚^{あつ}き心^{こころ}を我^{われ}は嬉^{うれ}しむ

と歌^{うた}ひ給^{たま}ひつつ、しづしづと緩^{くわん}勾^{こう}配^{ばい}の丘^{をか}道^{みち}を登^{のぼ}らせ給^{たま}へば、遠^{とほ}見^み男^をの神^{かみ}以^い下^かの神^{かみ}々^{がみ}
は、主^すの神^{かみ}の御^ご降^{かう}臨^{りん}と聞^ききて畏^{かしこ}み、山^{やま}の登^{のぼ}り口^{くち}に兩^{りやう}掌^てを合^{あは}せ神^{かみ}言^{こと}を奏^{そう}上^{じやう}しながら、

時ときのいた到るを待またせ給たまひける。
遠見とほみ男の神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

思おもひきや瑞みづの御靈みたまに仕つかへ來きて

主スの大神おほかみの天降あもりにあふとは
主スの神かみの天降あもり給たまひしこの國くには

いやますますに榮さかえますらむ
鬱うつさう蒼さうと天てんを封ふうじてそそり立たつ

常磐樹ときはぎの森もりによき事ことを聞きくも
かくならば吾等われらは謹つつしみ畏かしこみて

主スの大神おほかみに清きよく祈いのらむ〓

圓屋比古まるやひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

老松らうしやうの四方よもをかしこみしこの森もりに

かかる目め出度でたさ思おもはざりけり

主スの神かみの天あ降り給たまひしこの丘をかに

紫むらさきの雲くも棚たなび引きにけり

五色いついろの幕まくを清すがしく張はり廻まはし

主スの大神おほかみを齋いつきたるらし

この幕まくを越こゆる術すべなきわが御魂みたま

まだ晴はれやらぬ心こころの曇くもりに

智慧ちゑ證しょう覺かく未いまだ足たらねば主スの神かみに

まみえむ術すべの無なきが悲かなしき

久方ひさかたの天あめより降くだりし主スの神かみの

功いさをを拜をがむ丘をかの麓ふもとに

多々たたく久美くみの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☞ 智慧ちゑし證しょう覺かくよし劣おとるとも眞心まごころの

光ひかりしあらばのぼり得うべけむ

よしやよしわが眞心まごころは足たらずとも

神國みくにを思おもふ心こころは尊たふとし

さりながら瑞みづの御靈みたまの大神おほかみの

御許みゆるしなくばのぼる道みちなし

玉野たまの比ひ女め瑞みづの御靈みたまと生代いくよ比ひ女めに

生言靈いくことたまをのべて歸かへらせり

神々かみがみに一言ひとことだにもかけまさず

歸かへり給たまひし事ことのうたてさ

眞心まごころの光ひかりは未いまだこの丘をかに

のぼらむ力ちから無なきぞうたてき

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

うれしくもこの清丘すがをかの麓ふもとまで

御供みともに仕つかへしわが幸さちを思おもふ

言靈ことたまの澄すみきりあへぬ吾われにして

これこのの聖所すがどに來きたりしを喜よろこぶ

老松らうじゆうのかげに心こころを清きよめつつ

この眞清水ましみづにうつしてや見みむ

あちこちに魂たまを洗あらへと眞清水ましみづは

湧わき出いでにける神かみの功いさをに

幾何いくばくの御手洗池みたらしいけのある中なかを

ただによぎりし事ことのくやしき

わが來きたる右みぎりと左ひだりに湧わき出いでし

清水しみづは魂たまを洗あらふ眞清水ましみづ」

美波志比古みはしひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 宇禮志穗の神の言靈に照らされて

われ恥づかしくなりにけらしな

身を浄め魂を洗ひて進むべき

眞清水の池通り來しかも

黙々と神は教を垂れ給ひ

魂も洗へと清水湧かせり

瑞御靈御供に仕へてしらずしらず

わが魂線は傲ぶりにけむ

産玉の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 幾百と限りもしらぬ玉野池の

かたへをただに通ししを悔ゆ

この森のあらむ限りの眞清水の

池いけを求もとめて魂たま洗あらはばや

取返とりかへしならぬ過あやまち爲なしにけり

この御手みたらし洗しを軽かるく見みなしつ

自おのづから森もりの樹蔭こかげに湧わきし水みづと

軽かるく思おもひしことを今いま悔くゆ

魂たま機張きはるの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

たまきはる生命いのちの清水しみづを見みながらに

掬すくはむ道みちを忘わすれぬたりき

行ゆくく先さきをただ急いそぎつつ目めの下したの

清水しみづをよそにわが來きつるかも

主スの神かみの天降あもりましたるこの森もりは

清きよき御魂みたまの進すすむべきのみ

玉野森馬蹄にけがせしわが罪を
許させ給へ主の大御神

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

いざさらば元來し道に引返し

駒を止めて徒歩歩きせむ

主の神の今日のよき日に天降りますを
知らず進みし迂闊さを悔ゆ

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

常磐樹の松に清しく鳴く鶴は

吾をいましむ神聲なりけり

愚おろかしき吾われと思おもへば恥はづかしく

瑞みづの御み靈たまにまみえむ術すべなし

瑞みづ御み靈たま生いく代の比ひ女めは吾われを後あとに

かけ出いでましし御み心こころ悟さとりぬ

今いまとなり瑞みづの御み靈たまの御み心こころを

思おもひはかりて恥はづかしくなりぬ

何い時つの間まにかわが魂たま線しひは傲たかぶりて

楔みそぎの業わざを忘わすれぬたるよ

主スの神かみの天あ降もりましたるこの森もりを

馬うまの蹄ひづめにけがせし悲かなしさ
㊦

眞ま言こと嚴いづの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

㊦
今いまとなりて吾われ恥はづかしくなりにけり

眞言いづみの楔忘れて

いざさらば神々たちよ駒竝めて

元來し道に引返し見む

この森の外に抜け出で數多き

泉に御魂洗ひて進まむ

斯く神々は、馬の蹄に知らず知らず聖所を汚せし事を悔い、一目散に元來し道に引返し、駒を玉野の森の入口遠く繋ぎ置き、各も各も眞清水に身を清め心を淨め、天津祝詞を奏上し、再び主の神の天降ります丘を指して、眞砂に足を踏みなづみつつ、其翌る日の黄昏る頃、辛うじて丘の麓に着き給ひける。

（昭和八・一〇・二七 舊九・九 於水明閣 林彌生謹録）

第二〇章

松下の述懐（一八八八）

遠見男の神一行は、玉野の丘の麓より聖所を汚せしことを悔い、一目散に駒の
蹄の音いそがしく、玉野の森を駆け出だし、道の邊の竝木に駒を繋ぎ置き、素跣
足となりて恐る恐る再び玉野の森に潜り入り、道の兩側に木洩陽を寫して輝く清
泉の前に立ち、各も各も生言靈を宣り、天津祝詞を奏上し、歌を詠みつつ進ませ
給ふ。

遠見男の神の御歌。

主の神の天降りますなる玉野森の

この美味水よ月の鏡か

月も日もうつらす清き眞清水を

蹄に汚せしことを今悔ゆ

この清水わが魂線を洗へかし

身體の汚れは言ふも更なり

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 常磐樹のかけをうつして永久に

月日かがよふ清水眞清水

この水の清きが如くわが魂を

洗ひすまして神に仕へむ

多々久美の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 知らず知らずわが魂線は傲ぶりて

この眞清水をよそに見しはや

大神の御前に詣づる道の邊の

清水眞清水尊くもあるか

月も日も星もうつらふ水鏡

うつせば吾の魂のきたなき^わ」

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。^{う れ し ほ の か み み う た よ た ま}

眞清水にわが魂線を洗ひ澄ます^{ま し み づ た ま し ひ あ ら す}

神業うれしく仕へまつらな^{か み よ み わ ざ つ か}

神代より主の大神の生ませます^{か み よ ス お ほ か み う}

この神森の尊さ清さよ^{か み も り た ふ と き よ}」

結比合の神は御歌うたひ給ふ。^{む す び あ は せ か み み う た た ま}

千早振る神の御霊と湧き出でし^{ち は や ふ か み み た ま わ い}

この眞清水の清くもあるかな^{ま し み づ き よ}

目のあたり清き鏡を見ながらも^{ま き よ か が み み}

楔みそぎのわざを怠おこたりしはや
眞ま清し水みづに靈たまを洗あらひて主スの神かみの
みもとに詣まつづる思おもへば嬉うれしも
』

美み波は志し比ひ古この神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐
晴はれ渡わたる空そらの蒼あをみを寫うつしつつ
底そこまで青あをく澄すめる泉いづみよ
わが姿すがたうつして見みれば恥はづかしも
神かみにまみえむ術すべなかりける
』

産玉うぶだまの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐
産玉うぶだまの神かみと現あらはれ産水うぶみづの

清きよきを知らしず通とほり過すぎける
玉たま野の比ひ女め生あれます時ときゆ湧わき出いでし
この眞ま清しみ水みづはうぶだらひかも
□

魂たま機きは張はるの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。
□

□ たまきはる生命いのちの清しみ水みづ湧わき出いづる

この神かみ森もりは常とこ世よにもがも

朝あさ夕ゆふに月つき日ひの浮うかぶ眞ま清しみ水みづを

かかがみとなして御み魂たま洗あらはむ
□

結むす比ひ合あの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。
□

□ 火ひと水みづを結むすび合あせて湧わき出いづる

玉たまの泉いづみの澄すみきらひたるも
吾われは今いま玉たまの清しみづ水づに影かげうつし
きたなき心こころをはぢらひにけり
』

美味うまし素もとの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

和やはき水みづ甘あまき清しみづ水づよ美味うまし素もとの
神かみの心こころのうつる眞ま清しみづ水づ
この水みづは主すの大神おほかみの乳房ちぶさより
滴したたる水みづかうまし玉たま水みづ
』

眞ま言こと嚴いづの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

滾こん々と湧わきてつきせぬ眞ま清しみづ水づの

あま 甘きは神の心なるかも

しらこま 白駒に跨り咽喉を渴かせつ

この眞清水を知らざりしはや

いつかう 一行の神々は、彼方此方に點々せる玉泉の眞清水に、
いちいち 一々言靈歌を詠み御魂を

あら 洗ひつつ、慎ましやかに進ませ給ふ。

さき 前に立たせる眞言嚴の神は、悠々と御歌詠ませ給ふ。

あ ああ有難し有難し

あめ 天と地との中空に

すが 清しく立てる常磐樹の

たまの 玉野の森の聖所

みづ 瑞の御靈に従ひて

こま 駒に跨り進み行く

禮あやなきわざも知らずして
玉野たまのの比女ひめの永久とことはに
鎮しづまりいます山麓さんろくに
意氣揚々いきやうやうと着つきみれば
玉野たまのの比女ひめは瑞御靈みづみたま
生代いくよの比女ひめのみ導みちびきて
黙もくしています不思議ふしぎさに
よくよく思おもひめぐらせば
智慧證覺ちゑしやうかくのまだ足たらぬ
吾々われわれ一行いつかう神々かみがみは
瑞みづの御靈みたまと諸共もろともに
この聖所すがどこを悠々いういうと
駒こまの蹄ひづめに汚けがしつ
玉たまの清水しみづに魂線たましひを

洗あらひて褌みそぎの神業かむわざを

いそしむ事ことを忘れ居をり

主スの大神おほかみの御神慮ごしんりよに

叛そむきまつらむひがごとと

始はじめて悟さとりし恥はづかしさ

面おもほてりつつ引ひき返かへし

前ぜん非びを悔くいて玉野森たまのもり

もと來きし道みちにぬけいだし

駒こまを竝なみき木きに繋つなぎおき

素足すあしのままに白砂しらすなを

さくさく踏ふみて進すすみ來くる

道みちの行手ゆくてに輝かがやける

右みぎり左ひだりの玉清水たましみづ

清きよくすがしく湧わき出いで

つきひ 月日のかけを宿すなる
と 永久の泉に魂線を
おの 各も各もが洗ひつつ
しらうめ 白梅かをる神森を
たど 辿りて行けば松上の
つる 鶴の鳴き聲勇ましく
たましひ わが魂線を引きたつる
かむながら ああ 惟神々々
かみよ 神の依さしの神業に
つが 仕ふる吾等は朝夕に
あまつのりと 天津祝詞を奏上し
たま 玉の清水に楔して
すす 進み行くべき慎みを
しば 暫し心のゆるみより

忘れ居わすたるぞうたてけれ
小鳥ことりは歌うたひ蝶てふは舞まふ
常世とこよの春はるの神かみの森もり
吹ふき來くる風かぜも芳かんばしく
四方よもに薰くんずる梅うめが香かの
清きよきは神かみの心こころかも
尊たふとき神かみの御心みこころに
包つつまれながら愚おろかなる
吾等われらは少すこしも悟さとり得えず
轡くつわを竝ならべて堂だうだう々と
主スの大神おほかみの天あ降もります
聖所すがとに進すすみし愚おろかさよ
吾等われらは心こころを改あらためて
罪過つみあやまちを悔くいながら

再びふたたび禊みそぎの神業かむわざに

仕つかへまつりてとぼとぼと

松まつま間の木漏陽こもれびあびながら

彼方かなた此方こなたに湧わき出いづる

清水しみづにことごとみそぎと禊みそぎして

やうやう此處ここに着つきぬれど

まだ行ゆく先さきは道遠みちとほみ

心こころの駒こまははやれども

二ふたつの足あしの如何いかにして

聖所すがどに達たつし得うべけむや

この神森かみもりの黄昏たそがれを

星ほしは御空みそらにきらめきつ

夕ゆふへの風かぜは冷ひややかに

吾等われらが肌はだを浸ひたすなり

ああ惟神々々かむながらかむながら

今宵は松の太幹のこよひまつふとみき

樹下に一同休らひてこしたいちどうやす

朝日の昇るを待ちあかしあさひのぼるま

再び清水に楔してふたたしみづみそぎ

進み行かばや惟神すすゆかむながら

御靈幸倍ましましてよみたまさちはへ

斯く歌ひながら進ませ給ふ。かうたすすたま

さしもに廣き神森の白砂に脛を没し、
容易に進むべくもあらねば、
神々は天津かみがみあまつ

祝詞を奏上し松下に一夜を明し給ひぬ。
遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。のりとそつじやうししようかいちやあかたま

黄昏の闇は迫れど月讀のたそがれやみせまつきよみ

神は御空に輝き給ひぬ

眞清水に清しくうつらふ月光を

吾拜みて面恥づかしも

風はらむ梢のそよぎ止まりて

田鶴の聲のみ高く聞ゆる

白梅の露にかがよふ月光は

わが魂線をよみがへらすも

百鳥は埒定むるこの宵を

罪にしづみて眠らえぬかな

瑞御靈さぞや歎かせ給ふらむ

吾等が魂の曇れるを見て

これといふ神柱なきをわが岐美は

朝な夕なに歎かせ給はむ

神業に朝な夕なを仕へしと

思おもひしことは夢ゆめになりける

わが智慧ちゑも亦また證しょう覺かくも充みたざるを

知しらずに仕つかへし恥はづかしさを思おもふ
』

圓まる屋や比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

天あま傳つたふ月つきの鏡かがみも圓まる屋や比ひ古この

神かみの御み魂たまを照てらして笑ゑませる

小さ夜よ更ふけの泉いづみの波なみに浮うかびます

月つきの面おもてを見みればはづかし

夜よるの鶴つる子を育はくみて寢ねもやらず

守まもりゐるかも愛あいの強つよさに

白しら梅うめの露つゆに御み空そらの月つき照てりて

かをり清すがしき玉たま野の森もりの夜よ半は

神業かむわざに遅おくれし御魂みたま集あつりて

今いま新あらたしく楔みそぎするかも

天界てんがいは氣きゆるしならぬ神國かみくにと

知しりつつもなほ怠おこたりにける

智慧ちゑ證しょう覺かく足たらざる爲ために要かなめなる

楔みそぎのわざを忘わすれ居ゐしはや

瑞御靈みづみたまと同じおなにわが魂たま清きよまりしと

思おもひし事ことの愚おろかさを恥はづる

一言ひとことも宣のらさぬ岐美きみの御心みこころを

汚けがしまつりし事ことの悔くやしも

生代比女いくよひめ心こころ清すがしくましますか

玉野たまのの丘をかに導みちびかれ給たまひて

多々たたく久美くみの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

小夜更さよふけて常磐ときはの松まつの下したかげに

わが過あやまちを歎なげかひにけり

常磐樹ときはぎの苔こけむす松まつの下したかげに

吾われは悔悟くわいごの涙なみだに暮くれ居をり

愚おろかしきわが御魂みたまかも要かなめなる

神業みわざ忘れてひた進すすみけるよ

眞清水ましみづの池いけにうつらふ月つき見みれば

わが愚おろかさを微笑ほほえみますかも

吾われながらあきれはてたり魂線たましひの

くもりし事ことを氣きづかずあに居ゐし

多々た久美くみの神かみの司名つかさなをも持もちながら

かかる神業みわざを忘わすれし愚おろかさ

梢吹こすゑく風かぜの響ひびきも愚おろかなる

吾われを笑わらへる如ごとく聞きえ來く

眞鶴まなづるは松まつの梢しげにとどまりて

ただ一聲ひとこゑに吾われをいましむ

かくならば鶴つるにも劣おとる御魂みたまかと

今更いまさら悔くやし多た々た久く美みの神かみは

今いまよりは心こころの駒こまを立たて直なほし

誠まことを一つひとに道みちに仕つかへむ

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

小夜更さよふけの松まつの樹蔭こかげにうづくまり

恥はぢらひにつつ月つきを仰あふぐも

にこにこと笑えませる月つきの面おも見みれば

わが魂たましひ線しんを抉えぐらるる如ごとし

國く土に生うみと神かみ生うみの神かみの御供みともして

岐美をなやませし事を恥ぢらふ

瑞御靈わが魂線のくもれるを

見透し給ひて歎きましけむ

御供に仕へまつると雄々しくも

進みしことの恥づかしきかな

さりながらわが魂線の穢をば

早く悟りし事の嬉しさ

よき事に曲事いつき曲事に

よき事いつく神代なりにけり

よしあしの差別も知らに進みてし

宇禮志穂吾の淺間しさを思ふ

時じくに白梅かをる神の森を

蹄に汚せしことの畏き

玉泉右と左に湧きてあるを

楔みそぎもなさで進すすみし愚おろかさ
□

産玉うぶだまの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

□
大空おほぞらの青海あをみが原はらを渡わたりゆく

月讀つきよみの舟ふねはいとも美うつくし

冴さえ渡わたる御空みそらの月つきに照てらされて

吾恥われはづかしく打うちふるふなり

眞清ましみづ水の永とこ久とはに湧わく神かみの森もりを

楔みそぎ忘れわすれて進すすみし愚おろかさ

何事なにごとも神かみの心こころに宣のり直なほし

見直みなほしませよ吾等われらの過あやまちを

神直かむなほ日大直おほなほ日の神かみ聞き直なほし

見直みなほしまして許ゆるさせ給たまへ

主スの神かみは玉たまの宮居みやゐにましまして

わが愚おろかなる業覽わざみそなはすらむ

瑞御靈みづみたま生代いくよの比女ひめの二柱ふたはしら

淋さびしみまさむ吾等われらがくもりに

玉野比女たまのひめの御顔おんかほ見みるも恥はづかしく

なりにけらしな凡神ただがみ吾われは

主スの神かみのウ聲こゑの言靈ことたま鳴り鳴りて

生うまれ出いでたる神吾かみわれ恥はづかし

眞鶴まなづるの山やまに言靈ことたま奏上そうじやうし

しるしなかりしも宜うべよと思おもふ

魂機張たまきはるの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☞ 瑞御靈みづみたま生言靈いくことたまの功績いさをしを

塞ふさぎまつりし吾われ恥はづかしも

生いく代よ比ひ女神めかみの曇くもれる魂たま線しひを

瑞みづの御み靈たまは生いかし給たまへり

證しょう覺かくの未いまだ足たらはぬ吾われにして

生いく言こと靈たまのしるしあるべき

いや廣ひろき玉たま野の森もりに小さ夜よ更ふけて

月つきのしたびに悔くい心こころわく

常と磐きは樹ぎの梢こず御み空そらをかくさずば

ただに月つき見みる顔かほなかるらむ

美み波は志し比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

恥はづかしき吾われにもあるか大おほ道みちに

仕つかへて袂みそぎのわざ忘わするとは

楔みそぎせよと右みぎと左ひだりに眞ま清しみ水づの

照てれる泉いづみを知らず過すぎけり

魂たましひ線のいづみいたく曇くもりて道みちの邊への

楔みそぎの泉いづみも見みえざりしはや

楔みそぎより尊たふときものは世よにあらじと

吾われは常つねづね々かた語かたらひ居あしを

わが駒こまは榛はんの竝なみき木きに繋つながれて

主あるじを戀こひつつ淋さびしみ嘶なくらむ

駿はやこま馬まの蹄ひづめそろへて眞ま砂さ地ぢを

やうやう進すすみし愚おろかなる吾われよ

知しらぬ神かみに崇たたりなしとは誰たれかいふ

汚けがれし御み魂たまに神かみはまみえず

小さ夜よ更ふけて淋さびしくなりぬわが心こころ

あまり曇くもりの深ふかくありせば

眞清水ましみづにひた浸しあら洗へどなかなかに
魂たまのけが汚れのきよ清まらぬかな
天津祝詞あまつのりととき時ときじくの宣れど如何いかんせむ
わが愚おろかなる魂たまはあら洗へず〆

結比合むすびあはせの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

瑞御靈みづみたま御供みともにはるばる仕つかへ來きて

吾恥われはづかしき宵よひにあふかな

わが心こころいゆきつまりて玉野丘たまのをかの

麓ふもとになげ歎かひひ引き返かへしける

朝夕あさゆふにいくことたま生言靈なまことたまをの宣りつつも

楔みそぎの神業みわざ忘れ居あしはや

國土くにを生うみ神かみを生うませる御供みともなれば

魂たまを清きよめて仕つかふべき吾われ

神業かむわざの妨さまたげなせしを今更いまさらに

悔くいつつ泉いづみに魂洗たまあらふかな

しんしんと夜よは更ふけ渡わたり眞鶴まなづるは

漸ちゆぢく聲こゑをひそめ眠ねむれり

やがて今東いまあづまの空そらはしののめて

この神森かみもりも明あかるくなるべし

東雲しののめの空そらほのぼのとあからみつ

わが魂線たましひもよみがへりけり

東ひむがしの空そらにわきたつ紫むらさきの

雲美くもせつるほしみ神言かみこと宣のらむ

眞言まこといづ嚴かみの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

東雲しののめの空そらおひおひに明あからみぬ

やがて天津日昇あまつひのぼり給たまはむ

月つきにさへ恥はづかしきものを天津日あまつひの

昇ゆぼり給たまはばわれ如何いかにせむ

村肝むらぎもの心こころ清きよめて魂たま洗あらひ

新あたらしき日ひを拜をがみまつらむ

斯かく神々かみがみは述懐じゆつくわい歌を述のべ、悔悟くわいごの涙なみだを浮うかべながら、東雲しののめの空そらに向むかつて禮拜れいはい久ひさし
うし、再ふたび眞砂地まさごぢを素足すあしにきざみながら、玉野丘たまのをかを指さして畏おそる畏おそる進すすませ給たまひぬ。

(昭和八・一〇・二七 舊九・九 於水明閣 白石恵子謹録)

第三篇

玉藻靈山たまもれいざん

第二章 玉野清庭（一八八九）

天人てんにんの五衰ごすゐありとは佛典ぶつてんの示しめす所ところである。宜うべなり、神々かみがみの永久とこしへに住すみ給たまふ天界てんがいにも、亦また榮枯盛衰えいこせいすゐあり、若境じゃくきやうあり老境らうきやうあり。故ゆゑに天界てんがいの神々かみがみは若わかがへり若わかがへり甦よみがへりつつ、永遠えいゑんに其若そのわかさを保たもちて、各おのも各おのの職掌しよくしやうに生いき榮さかえ給たまふなり。茲ここに玉野たまの比女ひめの神かみは神生かみうみの神業かみわざを勤つとむべく、主すの神かみの御宣示ごせんじをうけて、長ながき年とし月つきを待またせ給たまひけるが、可あたら其適齡そのてきれいを過すごし給たまひたれば、神生かみうみの神事しんじに相ふ應さはず、再ふたび主すの神かみの御宣示ごせんじにより、層そう一層いつそう大だいなる國土くに生うみの神業かみわざを任まけられ給たまひたれば、玉野たまの山やまの清丘すがをかに永久とこしへの住所すまかを定さだめ、時ときを待またせつつありける。

顯津男あきつをの神かみは漸やうやくにして、玉野森たまのもりに着つかせ給たまひければ、永ながの年とし月つき待まち佇わび給たまひし玉野比女たまのひめの神かみは、折をりから降臨かうりんし給たまひし主すの大神おほかみに謹つつしみ待はりつつ、御許みゆるしを得えて寸間すんかんを窺うかがひ、丘をかの麓ふもとまで本津真言もとつまことの神かみ、待合まちあ比古せひこの神かみの二神にしんと共ともに出迎でむかへ、待まち侘わびたる瑞みづの御靈みたまとの初對面しよたいめんを悦よろこび給たまひつつ、聖所すがどこに導みちびき給たまひける。

玉野比女の神たまのひめのかみ 岐美待ちきみまちて氣永けながくなりぬ吾われは今いま

神生かみうみの業わざに仕つかへむすべなし

さりながら主すの大神おほかみの神言みこともて

岐美きみと生うまなむこの國原くにばらを

眞鶴まなづるの國土くにはまだ稚わかし玉野森たまのもりの

聖所すがとに立たちて造つくり固かためむか

顯津男あきつをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

高地秀たかちほの山やまを立たち出いではるばると

我われは國土くに生うむと此處こゝに來きつるも

御依みよさしの神生かみうみの業わざ仕つかへつる

今日けふより公きみと國土くに生うまむかも

果はてしなき稚國原わかくにばらに立たちのぼる

狭霧深しもほの暗きかも

主の神の天降りますと聞きて我は今

神業をへぬを恐れみ思ふ

ためらひの心に我は年を経て

神生みの神業に後れけるかも

主の神の御心うけて凡神の

言葉に心をかけしを悔ゆるも

本と末上と下との差別をば

守りて國土生み神生みは成るを

主の神の神言畏み凡神の

囁き外にいざや盡さな

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

何^{なに}も彼^かも主^すの大神^{おほかみ}の御^み水^い火^きより

現^あれし御^み魂^{たま}ぞ謹^{つつ}しみ仕^{つか}へむ

瑞^{みづ}御^み靈^{たま}おくれ給^{たま}ひし神^{かむ}業^{わざ}の

悔^{くや}しけれども今^{いま}は是非^{ぜひ}なし

吾^{われ}は今年^{いまとし}老^おいにけりさりながら

國^く土^に生^うみの業^{わざ}を難^{かた}しと思^{おも}はず

岐^き美^み在^まさばまだ地^{つち}稚^{わか}き眞^ま鶴^{なづる}の

國^く土^にももうま^うま^らに^らよみ^らが^らへる^{べし}』

本^{もと}津^つ眞^ま言^{こと}の神^{かみ}は御^み歌^{うた}詠^よませ給^{たま}ふ。

玉^{たま}野^の比^ひ女^めに吾^{われ}は仕^{つか}へて氣^け永^{なが}くも

岐^き美^み待^まち佗^わびし本^{もと}津^つ眞^ま言^{こと}の神^{かみ}よ

い^いで^でま^ませ^せし岐^き美^みの姿^{すがた}を拜^{をら}みて

尊たふとさあまり涙なみだにくれける

嬉うれしさの涙なみだは瀧たきと迸ほとばしり

惠めぐみの露つゆと輝かがやきにけり

百もも日はあれども今日けふの生いく日ひこそ

神みくに國ををうます目め出で度たき日ひなるよ

朝あさ夕ゆふに主スの大神おほかみを祈いのりてし

功いさをは今日けふの喜よろこびにあひぬ

久ひさ方かたの冴さえたる月つきを仰あふぎつつ

岐き美みの出いでまし幾年いくとせ待ちしよ

この丘をかは主スの大神おほかみの御み手てづから

水い火きを固かためて生うませる聖すが所どよ

未まだ稚わかき國くに土になりながらこの森もりに

千ち歳とせの松まつは繁しげりあひたり

想さう念ねんの天てん界かいなれば千せん年ねんの

常磐ときはの松まつも生あれ出いでにける』

待まち合あ比は古せの神ひこは御かみ歌み詠うたまよせ給たまふ。

年とし月つきを忍しのび忍しのびて岐き美み待まちし

吾われいつの閒まにか老おいにけらしな

玉たま野の比ひ女めの神かみの心こころを押おしはかり

月つきを仰あふぎて涙なみだせしはや

盈みち虧かくる月つき讀よみのかけ夜よな夜よなに

仰あふぎて吾われは心痛こころいためし

盈みつる日ひは岐き美みの幸さち思おもひ虧かくる日ひは

岐き美みの御おん身みを思おもひなやみし

待まち待まちて今け日ふのよき日ひをこの丘をかに

迎むかへし岐き美みぞ夢ゆめかとぞ思おもふ

主スの神かみの生うませ給たまへるこの丘をかに

鎮しづまりまして國くに土につく造つくりませ

玉たま野の比ひ女め如い何かに雄を々をしくいますとも

一ひと柱はしら神がみにてせむすべなからむ

女め男をの水い火き合あせ給たまひて眞ま鶴なづるの

稚わかき國くに原はら生いかしましませ

顯あ津きつ男をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

主スの神かみの生うませ給たまへる玉たま野の丘をかに

のぼりて我われは心こころ榮さかえぬ

村むら肝きもの心こころ榮さかえつ生いき生いきつ

畏かしこみ思おもふ主スの神かみの降あ臨もりを

智ち慧ゑ證しょう覺かく未いまだ足たらねど願ねがは

主スの大神おほかみを仰あふぎ度たく思おもふ
□

玉野たまのひめ比女かみの神かみは御歌みうたよ詠よませ給たまふ。

□ 瑞御靈みづみたま此處ここに來きますと主スの神かみは

先さきに天降あもらす今日けふのかしこさ

いざさらばこの丘をかの上への清泉せいせんに

御魂みたま清きよめて拜をろがみまつらむ
□

比女ひめがみ神かみはいとも淑しとやかに、玉野たまのをか丘をかの廣庭ひろにはの白砂しろすなを刻ききみながら、老松らうしようの影かげに導みちびき給たま
へば、鏡かがみの如ごとき清泉きよいつみは樹漏陽こもれびの影かげをうつして、廣ひろく深ふかく青あをく輝かがやけるあり。玉野たまのひ比ひ
女めの神かみは、清泉きよいつみの汀みぎはに立たちて、

□ 主スの神かみの御靈みたまとあれし玉泉たまいつみの

水面の光尊からずや

朝夕にこの眞清水に魂線を

洗ひて吾は年を経にけり

主の神に見えまつらむ吾にして

この玉泉のぞまぬ日はなし

顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。

畏しや玉野の比女の御言葉

我諾ひて楔つかへむ

折から吹き来る涼風に、玉泉の青き水面は魚鱗の波を湛へ、樹漏陽にあひて金
銀色に映えながら、涼味深々として身に迫り来る。顯津男の神は、生けるが如き
水面の波のそよぎを見やりつつ、威儀を正して御歌詠ませ給ふ。

□ 清々しこの眞清水は玉野比女の

清き心と拜みまつるも

青々と底ひも見えず湛へたる

深き眞水は公の心よ

澄みきりて底ひもわかず深き水は

公の雄々しき眞心なりけり

主の神の恵の露かこの水は

一目見るさへ心よみがへる

常磐樹の松の繁みに鎖されし

玉の清水の青くもあるかな

この水の精より出でし比女神なれば

その御姿の清しきも宜よ

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

この泉玉野の池と稱へられ

朝夕吾は鏡と拜みぬ

眞鶴の國土をつくと朝夕に

玉の泉にみそぎせしはや

本津眞言の神は御歌詠ませ給ふ。

玉野丘玉の泉に月も日も

浮びて清しき朝夕なりけり

百度の楔をなして主の神の

宮に朝夕御饌奉る吾

瑞の御靈岐美は七度楔して

主の大神を拜ませ給へ

顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。

有難し本津眞言の神言を
我諾ひて楔につかへむ

待合比古の神は御歌詠ませ給ふ。

七度の岐美の楔を待ち合せ
御供に仕へむ大宮居まで

茲に顯津男の神は七度の楔を修し給ひ、玉野比女の神に御手を曳かれながら、
本津眞言の神を先頭に、待合比古の神を殿に、白砂の庭を踏しながら、除るに玉
の宮の聖殿をさして進ませ給ふぞ畏けれ。

（昭和八・一〇・二九 舊九・一一 於水明閣 加藤明子謹録）

第二章 天地は曇る（一八九〇）

茲こゝに生いく代よ比ひ女めの神かみは、顯あ津きつ男をの神かみと共ともに導みちびかれ給たまひけるが、玉たま野ま比ひ女めの神かみの御おん顔んばせどことなく美うしからぬ心こ地ちしければ、松まつの樹こ蔭かげに身みを潜ひそめて、その身みの愚おろさを悔くい、さめざめと泣なき給たまひつつ、ひそかに主スの大おほ神かみに詫わ言ごとを宣のり給たまひつつ歌うたはせ給たまふ。その御み歌うた。

あさましき吾われにもあるか聖すが所どこに

登のぼりて魂たまは戦をき慄ふるふも

主スの神かみの大おほ御み心こころに叶かなはぬか

わが魂たま線しひはうち慄ふるふなり

玉たま野ま比ひ女め神かみの心こころの悲かなしさを

吾われは思おもひて堪たへやらぬかも

瑞みづ御み靈たま神かみの心こころを惱なやませし

吾^{われ}は怪^{あや}しき女^め神^{がみ}なりしよ

戀^{こひ}すてふ怪^{あや}しき雲^{くも}に包^{つつ}まれて

吾^{われ}は神^み業^{わざ}を妨^{さまた}げにけむ

斯^かくなれば天地^{あめつち}にわが身^みの置^お場^{きば}なし

ゆるさせ給^{たま}へ主^すの大^{おほ}御^み神^{かみ}

眞^{まな}鶴^{づる}の神^み山^{やま}戀^{こひ}しくなりにけり

煙^{けむり}となりて消^きえたき思^{おも}ひに

玉^{たま}野^の比^ひ女^め神^{かみ}の神^み言^{こと}の神^{かむ}業^{わざ}を

犯^{をか}せし吾^{われ}は邪^{まが}神^{かみ}なりしか

如^いかにしてこの罪^{つみ}穢^{けが}拂^ははむと

思^{おも}へど詮^{せん}なし御^み子^こは孕^{はら}みぬ

瑞^{みづ}御^み靈^{たま}一^{ひと}目^めもかけず吾^{われ}を後^{あと}に

御^み前^{まへ}に進^{すす}ませ給^{たま}ふ畏^{かしこ}さ

村^{むら}肝^{きも}の心^{こころ}の神^{かみ}に責^せめられて

吾恥づかしく死なまく思ふも

聖所を汚さむことの恐しさ

吾行く道は閉されにけり

萬代の末の末まで戀せじと

吾は悟りぬ聖所に來て

胸の火の燃え立つままに天地の

道ふみ外し罪の身となりぬ

おほらかに生むべき御子にあらずやと

思へば悲し重きこの身は

御手にさへ觸れず孕みしこのからだ

わが魂線の怪しさを思ふ

一度の手枕も無く情なや

想像妊娠の今日の苦しき

わが歎き凝固りて雲となり

御空みそらの月つき日ひ覆おほひ隠かくさむ

主スの神かみの御前みまへに白まをす言こと靈たまの

なき吾われこそは悲かなしかりける

天あま渡わたる陽ひ光ひかげも月つきの顔かんばせも

吾われ恐おそしく拜をがむよしなし

つらつらに思おもへば罪つみの恐おそしさ

わが玉たまの緒をは切きれむとするも

玉たまの緒をの生命いのちはよしやまかるとも

岐き美み思おもふ心こころの如いか何かで失うすべき

果はてしなきわが思おもひかも天地あめつちに

只ただ一ひと柱はしらの岐き美みを戀こひつつ

わが戀こふる岐き美みはすげなく玉野比女たまのひめに

御手みてを曳ひかれて奥おくに入いらせる

善よし惡あしの亂みだれ混まじ交こる天界てんがいに

わが纏れ髪解くよしもなし

玉野丘の聖所に吾は導かれ

斯かる歎きに逢ふぞ悲しき

瑞御靈玉野の比女と出でませる

後姿を吾は見送りて泣く

神の影側になければ吾一人

憚ることなく泣き飽かむかも

常磐樹の松は繁れど白梅は

匂へど吾は悲しく淋し

いと清き白砂の丘に只一人

世をはかなみて吾は泣くなり

如何にして今日の艱みを拂はむと

思へばなほも悲しくなりぬ

主の神の依さしに反き瑞御靈の

心こころ汚けせし吾われを悔くゆるも

あだ花はなとなりしわが身みの戀心こひこころ

斯かかる歎なげきの御子みこを孕はらみて

思おもひきやこの聖所すがとこに導みちびかれ

松まつの樹蔭こかげに潛ひそみ泣なかむとは

斯かく歌うたひ給たまふ折をりしもあれ、大幣おほぬさを左右さいうさに打振うちふりながら、ザクリザクリと庭にはの
白砂しらすなを踏ふみくだきつつ近寄ちかより給たまふ神人しんじんあり。生代比女いくよひめの神かみの忍しのばせる松まつの樹蔭こかげに
悠々いいうち近寄ちかより給たまひ、大幣おほぬさを左右さいうさに又またもや打振うちふりながら、

□ 常磐樹ときはぎの松まつの樹蔭こかげにしのびます

生代比女いくよひめが神かみ勇いさみ給たまはれ

吾われこそは力ちから充みち男をの神かみなれば

公きみ迎むかへむと急いそぎ來きつるも

何事なにごとも神かみの心こころと思召おぼしめせ

歎なげき止とどめて勇いさませ給たまへよ

如何いかならむ艱なやみおはすか知しらねども

この聖すが所とこは喜よろこびの國くに土によ

悲かなしみも艱なやみも知しらぬこの丘をかに

勇いさませ給たまへ生代比女いくよひめの神かみ」

生代比女いくよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

有あり難がたし貴たふとき公きみの言ことの葉はに

吾われは悲かなしさ彌いやまさりける

主スの神かみの天降あもらすこれの清丘すがをかに

汚けがれある身みの恐おそろしさに泣なく」

ちからみちを
力充男の神は御歌詠ませ給ふ。

何事なにごとのおはしますかは知らねども

力ちからを添そへむ充男みちをの神かみ吾われは

天渡あまわたる月つきも流轉るてんの影かげぞかし

歎なげき給たまひそ惟神かむながらなれば

罪穢つみけがれある身みは如何いかに急あせるとも

この聖所すがどこにのぼり得うべきや

聖所すがどこにのぼらす力ちからおはす公きみは

罪穢つみけがれなぞ塵ちりほどもなし

いざさらば心こころの駒こまを立て直なほし

玉たまの泉いづみに楔みそぎ給たまはれ

主スの神かみの御心みこころによりて吾われは今いま

公きみ迎むかへむと急いそぎ來こしはや

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

有難し力充男の神の宣

わが魂線はよみがへりたり

死なましとひたに思ひしわが心

公の神言によみがへりぬる

愛善の天津神國に生れ合ひて

歎きに沈みし愚さを思ふ

わが心ひがみたりけむ玉野比女の

御顔を畏れちぢみつ

力充男の神はまた詠ませ給ふ。

安らかに心廣けく勇ましく

雄々しく優しくおはしませ比女よ

愛善の天界なれば戀すてふ

心をどらむ惟神にて

天界のこの眞秀良場に出でまして

何を歎かむ月冴ゆる庭に

いざさらば玉の泉に案内せむ

進ませ給へ生代比女の神よ

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

𠮟 蕘らむと思ひし事も眞言ある

公の心によみがへりける

いざさらば公の眞言に従ひて

玉の泉に楔せむかも

眞鶴は御空に舞へり白梅は

樹の間に匂へり何を歎かむ

見の限りすべてのものは勇むなるを

何に迷ひて吾歎きけむ

主の神の天降りませる聖所を

吾涙もて汚せし悔しさ

村肝の心一つの持ちやうに

明るくもなり曇らふ神代かな

情ある公の言葉にわが魂の

力は充ちて雄々しくなりぬ

力充男の神は前に立たせながら、御歌詠ませ給ふ。

樹下闇時雨に晴れて天津日の

光は清しく輝きにけり
村時雨晴れたる後の月光は
一人明るく冴え渡るなり
高ゆくや月も流轉の影ぞかし
何を歎かむこの天界に
果しなき思ひの雲霧晴れ渡り
瑞の御靈の月かけを見む

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

一夜の契りも知らぬ生代比女の
神の歎きのあさましきかな
眞鶴の國原遙けく閉したる
雲霧晴れて清しき吾はも

主スの神かみの愛善あいぜんの御水みい火きに包つまれて

ひがみ歎なげきしことを悔くゆるも

斯かくならば雲霧くもぎりもなしわが魂たまは

月日つきひの如ごとく冴さえ渡わたりつつ

大幣おほぬさにわが魂線たましひを清きよめられ

よみがへりたる嬉うれしさに居をり
□

力ちから充みちを神かみは、大幣おほぬさを打うち振ふり打うち振ふり老松らうしやうの蔭かげに展てん開かいせる、玉泉たまいづみの汀みぎはに導みちびき

給たまひつつ、御歌詠みうたよませ給たまふ。

主スの神かみの清きよき心こころのしたたりに

あらはれ出いでし玉たまの清しみづ水よ

玉野たまの比ひ女め朝あ夕したに楔みそぎませる

この玉泉たまいづみの底そこひ知しれずも

瑞御靈七度の禊終へ給ひ

大宮深く進ませ給ひぬ

吾も亦朝夕をこの水に

洗ひ清めて魂を生かせり

眞清水は澄みに澄みつつ掬ぶ手に

梅の香ただよふ香ゆかしき

いざさらば天津祝詞を奏上し

禊がせ給へこれの泉に

生代比女の神は喜びに堪へず、御歌詠ませ給ふ。

高天原に生れませる

清けき清水眞清水に

朝な夕なを浮びます

月の鏡の彌清く

彌さやさやに照りはえて

紫微天界の神國に

惠の露を降らせまし

百の草木をはごくみて

永久に生かせる眞清水清水

斯かる聖所に導かれ

わが魂線を洗へよと

宣らせ給ひし有難さ

この眞清水や主の神の

潔き清しき御心の鏡かも

この眞寸鏡眞寸鏡

玉の眞清水うまし水

清しき水よ玉の緒の

生命いのち保たもたす生いき水みづよ
生いける御み神かみの靈たま線しひの
惠めぐみの露つゆのしたたりか
この玉たま泉いづみ拜をらめば
わがからたまも露つゆひて
若わか々わかしくもなりにける
生命いのちの清しみづ水ま眞しみづ水みづよ
」

と御み歌うたうたひ終をりて、天あま津つ祝のり詞とを聲こゑ朗ほかに奏そ上じやうし給たまひし折をりもあれ、急いそぎ此こ處こに現あらは
れ給たまひしは、さきに瑞みづの御み靈たまに仕つかへたる、待まち合あ比は古せひこの神かみにおはしける。
待まち合あ比は古せひこの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

□ 生い代くよ比ひ女め神かみの姿すがたのおはさぬに
吾われ心こころづき迎むかへ來きつるも

(昭和八・一〇・二九 舊九・一一 於水明閣 森良仁謹録)

第二三章 意想の外(一八九一)

現^{げん}までの時^{とき}を待^またせつつ、御^み歌詠^{うた}ませ給^{たま}ふ。
玉^{たま}野^の比^ひ女^めの神^{かみ}に導^{みちび}かれて、顯^あ津^{きつ}男^をの神^{かみ}は本^{もと}津^つ眞^ま言^{こと}の神^{かみ}と共^{とも}に、主^すの大神^{おほかみ}の御^ご出^{しゅつ}

玉^{たま}野^の比^ひ女^めの神^{かみ}、主^すの神^{かみ}の貴^{うづ}の神^{みのり}教^をを畏^{かしこ}みて

これ^の聖^{すが}所^どに宮^{みや}造^{つく}りましぬ

この宮^{みや}は主^すの大神^{おほかみ}のたまの水火^いに

生^なり出^いでし松^{まつ}の柱^{はしら}なりけり

國^{くに}の柱^{はしら}太^{ふと}しく立^たてて玉^{たま}野^の丘^かに

仕^{つか}へし宮^{みや}居^ゐを玉^{たま}の宮^{みや}といふ

只一人時を待ちつつ主の神の

神靈祀りて仕へ來しはや

終日を松の梢に鶴鳴きて

岐美を待つ間の久しき吾なりし

白梅はこれの聖所に咲きみちて

主の大神の靈をうつせり

敷きつめし眞砂の月の露置きて

眞玉とかがよふ清しき宮なり

白梅の梢に來つる鶯の

鳴く音は永久の春を歌へる

春夏の風は吹けども秋の風

冬の嵐のなき清庭よ

瑞御靈天降ります日を待ち侘びて

この清庭に年ふりにけり

年としさびし吾われにありせば御み子こ生うまむ

すべなみ岐き美みと國くに土に生うみなさむか

常と磐きは樹ぎの松まつの老おい樹きに苔こけむして

ふりゆく年としを吾われに見みるかな

年としさびし岐き美みにしあれど若わか々わかし

さすがは瑞みづの御み靈たまなるかも

主スの神かみの依よさし給たまひし神かむ業わざに

後おくれし吾われは惟かむ神ながらならし

千ち萬よろづの思おもひはあれど岐き美みに會あひて

語かたらふ術すべも消きえうせにけり

ほほゑます岐き美みの面おもての清すがしさに

わが魂たま線しひはよみがへるなり

萬よろづ代よの末すゑの末すゑまで岐き美み思おもふ

わが魂たま線しひはくもらざるべし

玉野丘たまのをかのこれの聖所すがどにつきにけり

御水み火い合あせて國くに土に生うまむかも

待まち侘わびし吉日よきひは來きつれど如何いかにせむ

わがからたまの年としさびぬれば〚

顯津男あきつをの神かみはこれに答こたへて、御歌詠みうたよませ給たまふ。

主スの神かみの依よさし給たまひし神業かむわざを

怠おこたりし我われをくやむ今日けふかな

國くに土わか稚たまき玉野たまのの森もりに進すすみ來きつ

公きみが心こころを悲かなしみにけり

雄を々をしくも待またせ給たまひし公許きみがりに

感謝かんしゃの言葉ことばも口くちごもるなり

彌廣いやひろき紫微しびてん天界てんかいの中なかにして

この眞秀良場や公の御舎

この國土にかかる聖所のおはすとは

我は夢にも知らざりにけり

こんもりとふくれ上りしこの丘に

清しく建てる宮は高しも

この宮に公とい向ひ永久の

國土拓かばや水火を合せて

主の神の出でましある迄神苑に

ひかへ奉りて語りあはむか

遠見男の神はいづくぞ百神の

姿は見えずこの清丘に

何となくわが魂線はふるふなり

おごそかにます玉の宮居よ

本津眞言の神は御歌詠ませ給ふ。

㊦ 幾億の星の靈線つなぎ合せ

本まつことに國土をささへつ

月も日もこの天界も言靈の

まことにつなぐ星のかずかず

月も日も言靈の水火につながれて

おなじ所を行き通ふなり

幾萬の星はあれどもほしいままに

動き給はぬぞ畏かりける

月も日も星も軌道を定めつつ

紫微天界を守りますかも

我こそは主の大神の神言もて

この天界を支へゐるかも

言靈の本つまことの水火をもて

堅磐常磐に神代を守らむ

村肝の心ゆるめしたまゆらに

この天地は亡びこそすれ

わが心張りきりつめきり澄みきりて

そのたまゆらもゆるぶことなし

この宮に主の大神の天降りまして

宣らせ給はむ國土生みの要を

我は今御供の神と身を變じ

玉野の比女を守りゐたりき

玉野比女神の神言の眞心を

うべなひ給へ顯津男の神よ

顯津男の神は、驚きて下座に下り合掌しながら、御歌詠ませ給ふ。

思おもひきやかかるたふと尊たふとき大神おほかみの

これすの聖すが所にあ天降あもりますとは

本津もとつ眞言まことの神かみの御名みをしな聞ききしより

わがたましひ靈線たましひはひきしまりける

主スの神かみの生言いくこと靈たまにな生いり出いでし

本津もとつ眞言まことの神かみのたふとき

玉野たまの比女ひめの御魂みたまをあさゆふ朝夕まも守りつつ

永と久はにおほいませしあ大神あ天晴あれ

玉野たまの比女ひめの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

はしたなきあさ浅あさき心こころの吾われなれば

かかたふとる尊たふとき神かみとは知しらざりき

この上うへはわが魂たましひ線しんを磨みがき清きよめ

本津眞言の神に仕へむ

主の神の御手代となりて現れませし

神とは知らにあやまてりけり

恥づかしやもつたいなやと今更に

悔ゆるもせむなしつたなき吾は

本津眞言の神は儼然として、御歌詠ませ給ふ。

久方の天津高宮ゆ降り來て

主の大神の御手代と仕へし

玉野比女國土生みの業守らむと

我は久しく止まりしはや

主の神の御尾前に仕へてこの森を

我は直ちに歸らむと思ふ

瑞御靈ここに現れます今日よりは

我止まらむすべもなきかな

待ちわびし瑞の御靈の出でましに

わがまけられし神業は終へたり

この御歌によりて、顯津男の神、玉野比女の神は、主の大神の御内命によりて、
國土生みの神業を助くべくこの玉野丘に降り給ひたる大神なるを悟り、恐懼措く
處を知らず、眞砂の清庭に下り平伏嗚咽涕泣し乍ら、身を慄はせ給へるぞ畏けれ。
かかる所へ生代比女の神を導き乍ら、待合比古の神、力充男の神は静々と現れ
來り、女男二柱の神の庭上に平伏し給ふ御姿を見て、驚きの餘り、待合比古の神
は御歌詠ませ給ふ。

いぶかしもこの清庭に二柱

ぬかづき慄ひ泣かせ給へる

主スの神かみの貴うづの御み稜いづ威づにうたれつつ
かしこみますか二柱神ふたはしらがみは

生代比女いくよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

二柱神ふたはしらがみの眞言まことに助たすけられ

この清庭すがにはに詣まうで來きにけり

瑞御靈玉野みづみたまのの比女ひめの御姿みすがたを

をろがみ奉まつりて悲かなしくなりぬ

罪穢つみけがれはら拂はらひ清きよめてわが來きつる

この聖所すがたおごそかに思おもふ

力充男ちからみちをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

主スの神かみの御手代みてしろとます本津眞言もとつまことの

神かみの功いさをに驚おどろきましけむ

主スの神かみの御手代みてしろとして生あれませる

尊たふとき神かみを百神ももがみ知らざりき

吾われは只尊ただたふとき神かみと朝夕あさゆふに

敬むやまひ奉まつり仕つかへ居ゐしはや

茲こゝに本津眞言もとつまことの神かみは、一同いちどうの神々かみがみに向むかひて、御歌みうたもて教をしへ給たまふ。

顯津男あきつをの神かみよ玉野たまのの比女神ひめがみよ

心安こころやすかれ惟かむながら神かみなるよ

この國土くにの主あるじとなりし岐美きみなれば

心安こころやすかれ我われにかまはず

生代比女いくよひめ御子みこは孕はらめど玉野比女たまのひめの

まことの御子と育み奉らへ

待合の神は正しく清しくも

玉野の比女に朝夕仕へし

待合神の誠は主の神も

よみし給へりいやつとめよや

我靈の眞言を永久にさとりたる

力充男の神ぞたふとし

この國に力充男の神あれば

いや永久に安く榮えむ

いざさらば主の大神の御前に

我は詣でむしばし待たせよ

斯く歌もて宣示しながら、本津眞言の神は悠々として鐵門を押し開き、奥殿深く進ませ給ひ、主の大神の御神慮を請はせ給ひぬ。

(昭和八・一〇・二九 舊九・一一 於水明閣 谷前清子謹録)

第二四章 誠まことの化身けしん (一八九二)

本津もとつ眞言まことの神かみは、時とき到いたれりと先頭せんとうに立たち大幣おほぬさを打うちふり、庭にはの面もを清きよめながら、宮みやの階段かいだんをしづしづ登のぼり給たまへば、顯津男あきつをの神かみも御後みしりへに従したがひ、階段かいだんの最上段さいじやうだんに蹲うつくまりて神言かみことを宣のらせ給たまふ。

☐ 掛かけ卷まくも綾あやに畏かしこき、主すの大おほ神かみの天降あもらせ給たまふ玉藻たまもヶ丘がをかの聖所すがどに、大宮柱おほみやしら太知ふとしり立たて、高天原たかあまはらに千木ちぎ高知たかしれる此これの聖宮すがみやに、今日けふの吉よき日ひの吉よき時ときを、天降あもり給たまひし、大御神おほみかみの神言みこと請こひのみまつりて、まだ國土くに稚わかき眞鶴まなづるの荒野あらの原はらを拓ひらき固かためむとす。仰あふぎ願ねがはくは主すの大御神おほみかみの生言いくこと靈たまの御稜威みいづさ幸ちはひ給たまひて、太元おほもと顯津男あきつをの神かみに依よさし給たまへる神業みわざを、うまうま怜らに委曲つばらに守まもり助たすけ、紫微しびてん天界かいの南みなみの國くにの國津柱くにつはしらを生うま

しめ給へ。畏くも紫微の宮居を立ち出でて、四方の荒野原に國土生み神生みの業仕へまつるとすれど、我はもとより言靈の力全からねば思ふに任せず、御依さしの業もはかどりまつらず、恐れ謹み朝な夕なに我身を省みつつ仕へまつる事のよしを、平けく安らけく聞し召して、わが願言を諾ひ給へ、國土造る神業につきても、わが足はぬ處を確に教へ導き給ひて、夜の守り日の守りに守り幸へ給へ、大御神の大神言を宣り聞かし給へと、謹み敬ひ畏み畏みも申す

顯津男の神は大御前に平れ伏して、祝詞畏み申上げ給へども、主の大神の御心如何にましますか、何の神宣も下し給はず、寂然として松吹くそよ風の音もなく、静まりかへれるぞ不思議なれ。茲に顯津男の神は恐れみ謹み、御歌詠ませ給ふ。

かけまくも畏きこれの大神の

神言たまはれ國土造るため

御依さしの國土生み神生み朝夕に

仕へてなほもおそれ恥ぢらふ

わがなさむ業悉く主の神の

御旨のままに仕へまつるも

眞鶴の國土稚ければ主の神の

御水火の助けに固めむと思ふ

願くは嚴の言靈垂れたまひ

わがゆく道を示したまはれ

玉野比女の神の神言は神生みの

業後れましわが罪にして

ためらへる間に年月うつりつつ

神業怠りし我を悔いまつる

大神の御心曇らせ奉る

わが怠りをゆるさせたまへ

力なき我にしあれば大神の

任まけの半なかばもならぬを畏おそる

一言ひとことの生言靈いくことたまをたまへかし

膝折ひざをり伏ふせて請こひのみまつるも

鹿兒かごじ自物もの膝折ひざをりふせて宇自物うじもの我われ

頸根うなね突貫つきぬき請こひのみまつる

小雄さをし鹿かの耳振みみふり立たてて聞きし召めせ

わが國くに土生にうみの太祝詞ふとのりことをを

斯かく眞心まごころをこめて顯津男あきつをの神かみは種々さまざま願言ねぎことを申まをし給たまへども、主スの大神おほかみの御心みこころいかに面白おもしろからず思おほし召めしけむ、只一言ただひとことの神宣みのりさへも賜たまはらねば、神々かみがみは御神慮ごしんりよの程ほどをはかりかね階段かいだんに平ひれ伏ふして、畏かしこみ戦のき給たまふのみ。茲ここに玉野比女たまのひめの神かみは頭かしらを擡もたげ、拍手はくしゆの音おとも爽さはやかに願言ねぎこと申まをし給たまはく、

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやゆ遙はろけくも

天降りし神の功畏し

年月を玉野の宮に仕へ来て

今日の天降りに遇ふぞ嬉しき

神生みの神業に反きし過を

ゆるさせ給へ主の大御神

そよと吹く風さへもなき今日の日の

しづけさ神心はかりかねつも

眞鶴の翼の音も止まりて

松の梢に陽の光鈍し

主の神の神心如何になごめむと

吾は心を千々に碎きつ

顯津男の神をゆるさせたまへかし

神生みの神業止むなく後れしを

ためらひの心は遂に神生みの

神業みわざに外はづれ罪つみとなりぬる

皇神すめかみの依よさし言葉ことばをためらひて

世よに習ならひたる罪許つみゆるしませ

朝夕あさゆふに謹つつしみ御前みまへにつかへつつ

なほ神業かむわざの後おくるを恐おそれつ

一言ひとことの主スの大神おほかみの神宣言みのりごと

聞きかま欲ほしやと泣なきつつ祈いのるも

りかへるのみ。生代比女いくよひめの神かみは御前みまへに、畏かしこみ祈いのりの御歌詠みうたよませ給たまふ。
斯かく玉野比女たまのひめの神かみの生言靈いくことたまの祈いのりにも何なんの御言葉みことばもなく、四邊あたりはますます静しづま

真鶴まなづるの山やまの御魂みたまと現あらはれし

吾われは生代比女いくよひめ神かみあはれみたまへ

生代比女いくよひめ畏おそれ多くも瑞御靈みづみたまの

神生みの業に仕へまつりし

罪ならばきためたまひてわが魂を

みがかせたまへ主の大御神

主の神の御水火のこもるわが腹に

宿らせたまふ貴の御子かも

おそるおそるこれの聖所に詣でけり

戀に溺れしことを悔いつつ

真心の凝り固まりて貴の神子は

わが体内にやどりましぬる

眞鶴の國土稚ければ貴御子を

育くみそだてて仕へまつらむ

玉野比女の年さびませるをあななひて

吾仕へたる神生みの神業よ

大神の依さしなけれど貴の御子

孕める吾をゆるませたまへ

天地はそよ風の音もなきままに

静まりかへる今日の不思議さ

言霊の水火なかりせばもるもの

神も草木もしなび果つべし

願くは主の大神の御水火より

生り成りませよ國土生かすべく

主の神の御水火止まらば天地も

神も草木も盡き果つるべし

眞心を凝らして祈れど主の神の

御水火かからぬ今日の淋しさ

村肝の心あせれど如何にせむ

主の大神の言葉なければ

玉野森の常磐の松も眞鶴も

萎れそめたりこのたまゆらを

眞鶴の聲も聞えずなりにけり

主の大神の御水火とまりて

常磐樹の松さへ緑の色あせて

四邊淋しくなりにけらしな

斯く御歌詠ませ祈り給へども、恰も岩石に向つて語るが如く、何の反響もなかりける。茲に待合比古の神は御歌詠ませ給ふ。

月と日を重ねて待ちし今日の日の

淋しさ思へば吾は悲しも

年月を玉野の比女に仕へ來て

今日の淋しき清庭にあふかな

主の神の黙したまへるたまゆらに

わが魂線は菱れむとすも
國土を生み神を生ますと瑞御靈
現れます今日ぞ守らせたまへ

力充男の神は御歌詠ませ給ふ。

言靈のス聲の水火はとまりたれど

われはウ聲の言靈活かさむ

ウーウーウーウーアアアアアア

久方のス聲にかへれわが言靈よ

ウーウーウーアアアアアア

力充男神はス聲によみがへりてむ

スースースー靜に宮の御扉を

開ひらきて出いでませ元もとつ親おや神がみ

サソスセシ神がみの伊い吹ぶきの言こと靈たまに

よみがへれかし玉たま野の森もりよ

生いき生いきて生いきの果はてなき天てん界かいぞ

如何いかに聲こゑのとどまるべきやは

かくまでにわが言こと靈たまを宣のりつれど

御み扉びらあかぬは不思議ふしぎなるかも

主スの神がみは吾われ等の身み魂たまをみがかむと

本津もとつ眞言まことの神がみとあれますか

愚おろなるわが魂たま線しひよ主スの神がみは

本津もとつ眞言まことの神がみなりしはや」

この御み歌うたに驚おどろきて、太おほ元もと顯あ津きつ男をの神がみ、玉たま野の比ひ女めの神がみ、生い代く比よ女ひの神がみ、待まち合あ比せ古ひの神がみはまづ力ちから充み男をの神がみへ敬けい拜はいし、本津もとつ眞言まことの神がみの御み前まへに拜はい跪きして不ぶ禮れいを謝しゃし、言こと

靈歌たまうたを宣のらせ給たまふ。

顯津男あきつをの神かみの御歌みうた。

愚おろかなる我靈線わがたましひよ主スの神かみの

みそば近くちかにありて知らざりき

かくのごと曇くもりし靈たまの如何いかにして

國土くに生うみ神生かみうみの神業みわざなるべき

主スの神かみと我悟われさとりたるたまゆらに

本津眞言もつまことの神かみを畏おそれし

本津眞言もつまことの神かみとわが前まへに現あれますを

知らぬわが身みの愚おろかさを悔くゆ

天地あめつちの眞言まことはとほきに非あらずして

わが目めの前まへに光ひからせにけり

本津眞言もつまことの神かみを知らずにうつるなる

宮に祈りし我恥づかしも

本津眞言の神とあれます主の神よ

許させたまへ禮なき我を

今日よりは靈を洗ひて言靈を

清め澄ませつ國土生みに仕へむ

一言の依さし言葉を聞かずして

我はますます心許なき

思議なる。玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。
本津眞言の神は儼然としてますます御面輝かせ給ひ、一言も宣らせ給はぬぞ不

☐ 朝夕に親しく御姿拜みつつ

主の大神と悟らざりしよ

今迄の禮なき罪をゆるせかし

本津眞言は主の神なりしよ

ウアの水火神と現れまし今ここに

本津眞言の神を生せり

玉の宮きづきまつると朝夕に

本津眞言の神はつとめし

主の神の深き經綸を知らずして

宮司とのみ思ひけるかな

神生みの業をつぶさに果し得ざるも

わが魂線のくもればなりける

今となり神生みの業仕へずて

年さびにけるよしを悟りぬ

若くても智慧證覺の足らずして

國津柱の御子生るべき

生代比女神の神言はすがすがし

御子孕ませるを宜よと思ふ

主の神の依さしの神生み業さへも

魂の曇れば仕ふるすべなし

主の神はわが言靈のくもれるを

悟らせ生代にかへたまひしか

愚なるわが魂線よ濁りたる

わが言靈よ悲し恥づかし

瑞御靈後れしわけもわが魂の

年経りしよしも悟り得し今日よ

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 瑞御靈わがあこがれたまゆらの

眞言に御子は孕みたまひし

戀雲こひぐもに包つつまれし吾われも主スの神かみの

天津眞言あまつまことによみがへりたり

主スの神かみの水い火きの眞言まことによみがへる

そのたまゆらを御子みこ孕はらませり

今日けふよりは御子みこ育はこむと村肝むらきもの

心こころくばりて戀こひを忘わすれむ

主スの神かみの經綸しぐみの絲いとにしばられて

われは暫しばしを狂くるひたるかも

今いまとなりて心こころ開ひらきぬわが魂たまは

とこよの春はるによみがへりけむ

眞鶴まなづるの國くにの國魂くにたまがみ神かみなれば

朝夕あさゆふ御子みこをつつしみ守まもらむ

いやしかるわが體内たいないに主スの神かみの

御靈みたまやどらす畏かしこさ尊たふとさ

本津眞言の神の御側に近く仕へ

わが魂線は勇みたちたり

この丘に吾登りてゆ主の神は

本津眞言の神と悟りぬ

兔も角も瑞の御靈に従ひて

吾はつつしみ黙し居たりぬ

本津眞言の神の御身は光なりき

わが眼にうつるは月光のみにて

眞寸鏡かかりし如き心地して

吾恥づかしく照らされて居し

今日よりは玉野湖水あせむ

わが曇りたる心晴るれば

一片の雲霧もなしわが魂は

すみきらひたり月日の如くに

ちからみちを
力充男の神は御歌詠ませ給ふ。

この丘の玉の泉に朝夕を

みそぎて眞の神知らざりき

本津眞言神はまさしく主の神の

化身なりしか吾恥づかしも

主の神の御靈になりし玉野丘に

仕へて眞の神知らざりしよ

瑞御靈清しく雄々しくましまして

玉野湖畔に御子孕ませり

今日よりは吾つつしみて瑞御靈の

神業助けて國土造りせむ

遠見男の神の一行は山麓に

楔したまへば迎へ來らむ

茲にはじめて本津眞言の神は、言靈朗かに御歌詠ませ給ふ。

☐ 畏しや力充男の神の言葉

我うべなひて國土生み助けむ

いざさらば天津高宮にかへるべし

百神等よ健かにあれ

斯く歌ひ給ひて、主の神の化身なる本津眞言の神は、忽ち天上より降り來る紫紺の雲に包まれて、久方の空高く歸らせ給ひしぞ尊けれ。

（昭和八・一〇・三〇 舊九・一二 於水明閣 加藤明子謹録）

第二十五章

感歎幽明（一八九三）

主の大神は天津高宮より、玉野森に天降りましつれど、神々の智慧證覺未だ全からざれば、止むを得ず和光同塵の神策を立て給ひて、本津眞言の神となり、國土造りの神業を助け給ひつつありけるが、玉野比女の神を初め其他の神々も其化身たるを知らず、うかうかとして同僚の神の如くに扱ひたりけるが、力充男の神の賢き目に名乗り明されて、本津眞言の神は直に諾ひ給ひ、二首の御歌を詠ませ給ひて、久方の御空高く紫紺の雲に乗りて、天津高宮に歸らせ給ひしこそ畏けれ。又玉野比女の神は、八十比女神の石柱に選まれ給ひ、玉野森に年永く時の到るを待たせ給へども、未だ國魂神としての貴き御子を生まさむ資格備はず、智慧證覺全からざりせば、惟神的に神生みの神業を止められ、茲に國土生みの神業に仕ふべく餘儀なくされ給ひしなり。

次に太元顯津男の神は、百神等の種々の囁きに深く心を配り、主の大神の御言葉をためらひつつ、永き年月を経給ひければ、神生みの神業の自ら後れさせ給ひしこそ是非なけれ。顯津男の神は瑞の御靈なれば仁慈の心深く、且つ神々の和親を旨として勇猛心を缺き給ひしかば、終に神業の期を逸し給ひしこそ、返す返す

も惜むべき事にこそあれ。

眞鶴山の御魂と生れます生代比女の神は、八十柱の比女神の選に漏れ給ひし神なれども、智慧證覺に勝れたる細女賢女にいませば、國津柱と世に立てられ、御子生ますべきに叶ひたれば、主の大神は黙許し給ひ、茲に大神業は遂げられたるなり。生代比女の神の積極的行動は、國土生み神生みの神策に叶ひ奉れば、大功を採りて小瑾を顧みざる神策を採り給ひしも、時代相應の處置とこそ窺はるるなり。

嗚呼顯津男の神、玉野比女の神は、何れも至善至美至仁至愛にして賢しき心を缺き給ひ、且つ勇猛心薄かりしかば、主の神の、眼前に化身として現れ給ふ本津眞言の神の眞相を知り給はざりしに反し、生代比女の神は賢くも其化身なる事を臆氣に覺り居給ひし程の細女なりければ、貴の御子を孕ませ給ひしも宜なりと諾かるるなり。嗚呼惟神靈幸倍坐世。

茲に顯津男の神等は、本津眞言の神の御本體を現して、天津高宮に歸らせ給ひしを遠く拜ませ給ひて、御歌詠ませ給ふ。

主スの神かみは嚴いづの言こと靈たま宣のり終をへて

雲くもに乗のらせつ天あまかへりますも

久ひさ方かたの空そらを紫し紺こんに染そめながら

主スの大神おほかみは歸かへりますかも

おろかなるわが靈たま線しひを今いま更さらに

悔くゆるも詮せんなし神み業わざ遅おくれて

ためらひし心こころの罪つみを許ゆるしませ

天あめに歸かへらす主スの大おほ御み神かみよ

進すすみ進すすみ拓ひらき拓ひらきて仕つかへ行ゆく

神かみの大道おほぢをおろそかにせるも

百もも神がみに心こころ配くばりて主スの神かみの

生いく言こと靈たまにそむきしを悔くゆる

主スの神かみにそむく心こころは持もたねども

ためらひ心こころに神み業わざ遅おくれし

今いまとなりて弱よわき心こころを悔くいにけり

いざや勇いさみの駒こま立たて直なほさむ

玉野たまのひめ比女ひめ心こころを思おもへば我われは今いま

消きえたくなりぬ悲かなしくなりぬ
□

玉野たまのひめ比女ひめの神かみの御歌みうた。

主スの神かみの化身けしんと知しらず朝あさ夕ゆふを

吾われ從とも神がみと思おもひけるかも

斯かくの如ごとわが愚おろかしき心こころもて

如何いかで御み子こ生うみ仕つかへ得うべきや

智ち慧えい證しょう覺かく未いまだ足たらねば主スの神かみは

生いく代よ比女ひめが神かみに依よさし給たまひしか

眞ま鶴なづるの國くに津つ柱はしらを孕はらみます

生代比女神貴くありける

この丘に岐美を待ちつつ年經りし

わが魂線は曇りてしかも

主の神の宮に朝夕仕へつつ

眞言の神を知らざりにけり

そよと吹く風にも神聲あるものを

側に坐す神知らざる恥づかしさよ

今日よりは生代比女神を神柱と

仰ぎ奉りて國土生みなさばや

生代比女の神の御歌。

八十柱比女神とおはす公なれば

わが腹の御子奉るべし

今日けふよりは玉野たまのの比女ひめにまつるひて

御子みこを育はこみ日足ひたしまつらむ

玉野たまの比女ひめ神かみの下女しためと吾われなりて

御子みこを育はこみ朝夕あさゆふ仕つかへむ

吾われは只瑞ただみづの御靈みたまにこがれたる

そのたまゆらに孕はらみたるのみ

主スの神かみの直ただの依よさしにあらざれば

吾われははしたため御子みこ育そだつるのみよ

瑞御靈神みづみたまかみと諸共もろともに玉野比女たまのひめ

神かみは眞鶴まなづる國くに拓ひらきませよ

ちり程ほどのねたみうらみを持たぬ吾われを

安やすく思おぼされ國土くに造つくりませ

わが腹はらの御子みこ生おひ立たたすそれまでは

心清こころめて近ちかく仕つかへむ

顯津男の神の御歌。

健氣なる生代比女神の言靈よ

我は感謝の涙に咽ぶも

比女神の清き心に諾ひて

御子は宿らせ給ひけむかも

今更に比女の心の清きをば

深くさととりて涙に暮るるも

その清き正しき明るき魂線を

主の大神は愛でましにけむ

公と我水火を合せし御子ながら

主の大神の御魂なりける

玉野比女の神の御歌。

生代比女神の心の清しさに

吾恥づかしくなりにつらしな

曇りたるわが魂線の如何にして

貴き御子を孕み得べきや

主の神の深き経綸を今更に

覺りて吾は慄きにけり

何事も神の依さしの神業と

思へば怨みの雲霧もなし

生代比女吾にさきだち御子孕むと

聞きてねたみし心の恥づかし

常磐樹の松永久に色變へぬ

翠の心に吾仕へばや

そよと吹く松の梢の風にさへ

日に幾度の訪れあるを

八十年を待ちあぐみたる魂線の

彌ますますに曇りてしかな

清き赤き眞言の戀にあらずして

眞言の御子を如何で孕み得べきや

瑞御靈氣永く待ちし甲斐もなく

神業に遅れしわがおるかさよ

今よりは心を改めひたすらに

岐美に従ひ國土生み助けむ

待合比古の神の御歌。

ㄣ
幾年を待合せたる玉野比女の

今日の心を計りて泣くも

氣永くも瑞の御靈を待たせつつ

あはれ御子生みの神業ならずも

主スの神かみの深ふかき神心みこころ今更いまさらに

畏かしこみ畏かしこみ心をこころのこのく

天界てんがいは愛あいと善ぜんとの神國みくになれば

毛筋けすぢの汚けがれもゆるさざりけむ

よしあしの行交ゆきかふ世よにも國土くに造つくる

神業みわざに塵ちりの止とどまるべきやは

地つち稚わかき眞鶴まなづるの國土くにの國柱くにばしら

清きよき眞言まことに孕はらみ給たまひぬ

生代いくよ比ひ女神めかみの貴たふとき功績いさをしを

主スの大神おほかみも褒ほめ給たまひけむ

さまさまの神代みよの出來事できごと朝夕あさゆふに

見みつつつ吾われはも迷まよひけるかな

主スの神かみの化身けしんと知しらず本津もとつ眞言まことの

神かみを従とも神かみよと扱あつかひしはや

愚おろかかなるわが魂たましひ線ひよ主スの神かみの

化身けしんを軽かるく扱あつかひにけり

久方ひさかたの御空みそらを高たかく歸かへりましし

眞言まことの神かみを仰あふぎて泣なきぬ

本津もとつまこと眞言まことの神かみの功いさをを今いまぞ知しる

天津あまつたかみや高宮たかみやに歸かへらす光ひかりに

日ひをおひて光ひかりいや増ませし神柱みはしらを

化身けしんと知しらずに居ゐたる愚おろかさ

兔とも角かくも眞鶴まなづるの國くには目め出で度たけれ

主スの大神おほかみの御子みこ宿やどりませば

スの水い火きを合あはせてここに瑞御靈みづみたま

生代いくよ比ひ女め神がみ御子みこ孕はらみましぬ

大空おほぞらは廣ひろく高たかしも眞鶴まなづるの

稚^{わか}き國^{くに}原^{ばら}を照^{てら}す御^み子^こはも^も

力^{ちから}充^み男^をの神^{かみ}の御^み歌^{うた}。

ㄣ
靈^ちと體^{から}の力^{ちから}充^みちぬる天^{てん}界^{かい}は

スの言^{こと}靈^{たま}ゆ生^あれましにける

吾^{われ}は今^{いま}主^すの大神^{おほかみ}の靈^ちと體^{から}を

給^{むす}びて生^{うま}れし力^{ちから}充^み男^をの神^{かみ}なり

吾^{われ}も亦^{また}本^{もと}津^つ眞^ま言^{こと}の神^{かみ}と共^{とも}に

こ^こに降^{くだ}りし化^け身^{しん}なるぞや

吾^{われ}こそは紫^し微^び天^{てん}界^{かい}に鎮^{しづ}まれる

高^{たか}鋒^{ほこ}の神^{かみ}よいざ歸^{かへ}らむとすも

三^み柱^{はしら}の神^{かみ}現^あれませし今^け日^ふよりは

吾^{われ}に用^{よう}なしいざ歸^{かへ}りなむ

百神ももがみよまめやかにまして眞鶴まなづるの
國くに土に生うみ御子みこを生うましませ」

斯かく御歌詠みうたよませ給たまひつつ、再ふたび光ひかりとなり四邊あたりを照てらしながら、力充男ちからみちをの神かみは紫むらさき
の雲くもを呼よび起おこし、悠々いういうとして天津高宮あまつたかみやに向むかひ歸かへらせ給たまふぞ尊たふとけれ。

（昭和八・一〇・三一 舊九・一三 於水明閣 森良仁謹録）

第二六章 總神登丘そうしんときう（一八九四）

顯津男あきつをの神かみ、玉野比女たまのひめの神等かみたちは、本津眞言もとつまことの神かみの化身けしんに驚おどろき給たまひしが、又またもや
力充男ちからみちをの神かみの天あまの高鋒たかほこの神かみの天降あもりませる化身けしんに驚おどろきを新あたらしくし給たまひ、わが靈線たましひ
のいたく曇くもりたるを恥はぢらひながら、玉たまの宮居みやみの聖所すがとにうづくまりつつ、御歌詠みうたよ
ませ給たまふ。

顯津男の神の御歌。

☐ 天晴れ天晴れ眞鶴國を固めむと

二柱神天降りましぬる

わが靈は曇らひにけるか二柱の

化身をしらですましゐたりき

毛筋程の隙間もあらぬ天界の

神の神業ぞ畏かりける

地稚きこの國原を固めむと

主の大神の天降りませしよ

有難し辱なしと申すより

わが言の葉は出でざりにける

月も日も清く照らへる玉野丘に

われ面はゆくなりけりか

かくの如曇れる靈を持ち乍ら

國土生みの業をおぼつかなみ思ふ

主の神の功によりて眞鶴の

國土固めばや靈を清めて

かくまでも尊き神の經綸とは

悟らざりけり愚なる我は

今よりはわが靈線を練り直し

勇み進まむ國土生み神生みに

果てしなきこの國原を詳細に

固めむ業の難きをおもふ

畏しや本津眞言の大神は

主の大神にましましにける

高鋒の神は聖所に天降りまして

わが靈線を照らさせ給ひぬ

久方ひさかたの御空みそらは清きよく輝かがやけり

仰あふげばわが靈たま恥はづかしきかも

遠見とほみ男をの神かみを見捨みすてて玉野丘たまのをかに

登のぼりし我われの靈たまは曇くもれり

神々かみがみを丘をかの麓ふもとに残のこし置おきし

わが過あやまちをいま悔くゆるかも

今いまよりは心こころを清きよめ身みを清きよめ

麓ふもとの神かみを導みちびき來きたらむ

玉野比女たまのひめの神かみの御歌みうた。

本津眞言もとつまことの神かみの言葉ことばを諾うべなひて

吾われは百神ももがみを殘のこし置おきしはや

瑞御靈神みづみたまかみの罪つみにはあらざらめ

もとつまこと 神の御心

ふたはしらあまつたかぞら
二柱天津高空ゆ降りまして

この聖所を照らさせ給ひぬ

ときはぎ 常磐樹の松にかかれる月光も

ひる 晝なりながら清しかりけり

あまわた 天渡る日光も清く月光も

さ 冴えにさえたり今日のいく日は

ふたはしらかみ 二柱神の神言を畏みて

ももがみ われ百神と國土造らばや

からびんが 迦陵頻伽ときじくうたひ聖所の

つる 鶴は神代を壽ぐ今日かも

しらうめ 白梅の薰り床しくそよ風に

おく 送られ清し玉の宮居は

しらうめ 白梅は玉の宮居を封じつつ

松まつの樹こかげ蔭かげに神み代よを薰かをれり

草くさの蔭かげに蟲むしの聲こゑ々こゑさええて

常とこよ世よの春はるを迎むかはしむるも

この丘をかに瑞みづの御み靈たまの生あれまして

輝かがやき給たまふ國くに土に生うみ嬉うれしも
□

生いく代よ比ひ女めの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。
□

生いく代よ比ひ女めいくよの末すゑも常とこよ磐は樹ぎの
□

松まつに誓ちかひて世よを守まもるべし

底そこ深ふかき玉たま野の湖こ水すゐの心こころをば

岐き美みに捧ささげて御み子こを守まもらむ

眞まな鶴つるの山やまは雲くも間まに聳そびゆれど

岐き美みの功いさをに及およばざるらむ

瑞御靈生言靈に生り出でし

眞鶴山まなづるやまに生れし吾われはも

吾われこそは瑞みづの御靈みたまの言靈ことたまの

水い火きに生れし比女ひめがみ神かみなるぞや

國魂くにたまの御子みこを詳細まつぶさに生うみ了をへて

又また眞鶴まなづるの神かみとなるべし

白砂しらすなを踏ふみさくみつつ白駒しらこまに

跨またがりて來こし玉野森たまのもりすが清すがし

玉野丘黄金たまのをかこがねの眞砂まさご踏ふみしめて

尊たふとき神かみの御聲みこゑ聞ききたり

主スの神かみの深ふかき惠めぐみにうるほひて

吾われ貴うづつの御子みこ孕はらみたるかも

目路めぢの限かぎり白雲霞しらくもかすむ眞鶴まなづるの

國くにをひろらに拓ひらきませ岐美きみよ

わが魂は眞鶴山に鎮りて

この神國を永遠に守らむ

吾は今氣體なれども御子生まば

又靈體となりて仕へむ

御子生むと吾は氣體の身と變じ

岐美を戀ひつつ仕へ來しはや

吾戀は幾萬年の後までも

天地とともに亡びざるべし

愛善の紫微天界に生くる身も

戀故心の曇りこそすれ

戀故に心は光り戀故に

心曇るぞ淺まし世や

待合比古の神は御歌詠ませ給ふ。

神々の生言靈を清らかに

聞く今日の日は樂しかりける

久方の天津御空の神の聲を

居ながらに聞きし幸をおもふも

智慧證覺足らはぬ吾も天津神の

神言ほのかに聞きし嬉しさ

三柱の女男の神等に從ひて

われ永久に守り仕へむ

かく御歌うたひ給ふ折しも、御空を封じて、幾千萬とも限りなく、眞鶴は玉野

丘の空高く、左より右りに幾度となくめぐりめぐり、清しき聲を張り上げて、神

代の創立を壽ぎ乍ら、庭も狭きまで聖所の上に下り來つ、各も各も頭をもたげて、

天津高宮を拜する如く見えにける。

玉野丘の麓には、遠見男の神を初め、圓屋比古の神等九柱は、己が魂線の曇り

たるを悔い給ひて、玉の泉に身を清め、言靈の水火を磨き澄ませつつ、瑞の御靈の招き給ふ時を待ち給ひ、各も各もに御歌詠ませ給ひぬ。
遠見男の神の御歌。

☪ 梅薫る玉野の丘に登りましし

岐美の音信聞かまほしけれ

わが魂は曇りにくもり言靈は

濁りて神丘に登るよしなし

恥づかしきことの限りよ玉野丘の

麓に吾は捨てられにけむ

遠の旅御供に仕へて今となり

吾恥づかしき憂目に逢ひぬる

繋ぎ置きし駒にも心恥づかしく

なりにけらしな言靈濁りて

玉泉たまいづみに御魂みたまひたして洗あらへども

智慧ちゑの光ひかりの暗くらきをおそるる

眞鶴まなづるは常磐ときはの松まつの梢うれたか高く

長閑のどかにうたふ玉野森たまのもりはや

眞鶴まなづるの翼つばさありせば吾われも亦また

この玉野丘たまのをかに登のぼらむものを

南方なんぼうの國くにを治しらせとわが岐美きみの

よさしの言葉ことば如何いかに仕つかへむ

生代比女いくよひめ神かみを魔神まがみと思おもひしに

これこのの神丘みをかに登のぼりましたける

いぶかしも生代比女神いくよひめがみのすたすたと

振り向ふりむきもせず登のぼらせにける

生代比女いくよひめの曇くもれる魂たまに比くらぶれば

なほわが魂たまの濁にごり深ふかきか

いや廣ひろき紫微しびてん天界かいの中なかにして

吾われ恥はづかしく心こころをののく

世よをおもふ清きよけき胸むねの高たか鳴なりに

もだへて夜よ半はを泣なきつ戦をのきつ

國く土に生うみの御み供ともに仕つかふる道みちなくば

野の邊べ吹ふく風かぜとなりて亡ほろびむか

歎なげくとも詮せん術すべもなきわが身みかな

瑞みづの御み靈たまに遠とほざかりつつ

圓まる屋や比ひ古この神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

遠とほ見み男をとこの神かみよなげかせ給たまふまじ

神かみの試ため練しとわれは喜よろこぶ

いと清きよく正ただしく廣ひろく眞まな鶴づるの

國くにの司つかさとならむ汝なが身みぞ

汝なれこそは瑞みづの御靈みたまのよさしたる

この國原くにばらの司つかさなるぞや

眞鶴まなづるの國くにをうままに生うみ了をへて

汝なは永遠とことはに鎮しづまるべき身みよ

主スの神かみの天降あもりましたる丘をかなれば

今いましばらくを待まつべかりける

主スの神かみの御許みゆるしあれば吾われは直ただに

この神丘かみをかに登のぼらむと思おもふ

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐
とにもあれかくもあれかし玉野森たまのもりに

わが來こしことを嬉うれしみおもふ

徳とく未いまだ全まからぬを主すの神かみを

拜をがまむ事ことの恐おそしとおもふ

月つきも日ひも御空みそらに清きよく輝かがける

この神かみ森もりにいねし嬉うれしさ

歡よろこびの光ひかりに充みつる玉野森たまのもりを

吾われ嬉うれしみて魂たまをどるかも

嬉うれしさの極きはみなるかも玉野森たまのもりの

これこの聖所すがどに來きたりし幸さちよ
』

美波志比古みはしひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 瑞御靈神みづみたまかみに別わかれて一ひと夜よを

月つきに照てらされ心こころときめきぬ

やがて今主いますの大神おほかみの言靈ことたまに

みはしかからむ玉野の丘に

みはしなき山に登らむ術もなし

今しばらくを待たせよ百神

國土造る神の神業よ安々と

この神丘に登り得べきや

産玉の神は御歌詠ませ給ふ。

やがて御子生れます日まで産玉の

神吾ここにひかへまつらな

眞鶴の聲高々と聞ゆなり

主の大神の歸りますにや

迦陵頻伽白梅の梢になきたつる

聲は神代を壽ぐなるらむ

白梅しらうめの薰かをり床ゆかしきこの森もりは

主スの大神おほかみの天降あもらす聖所すがとか

月つきも日ひも松まつの繁しげみに閉とざされて

砂すなに描えがける樹洩陽こもればのかけ

わが力ちから未いまだ足たらねば森もりかげに

ひそみて待まてとの神慮みこころなるらめ
』

魂機張たまきはるの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐
たまきはる生命いのちの神かみと現あらはれて

われは守まもらむ御子みこの生命いのちを

ここに來きて心清こころすがしくなりにけり

この神丘かみをかに登のぼり得えねども

この森もりは紫微しびてん天界んかいの寫うつしかも

見ることごとは輝きにけり

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

二夜の襖終りて吾は今

結び合せの神業に仕へむ

天と地と神と神とを睦じく

結び合せて神代を守らむ

いや廣く常磐樹繁る玉野森に

梅の香清し神います苑は

玉野比女神の鎮まるこの丘の

輝き強しわが目まばゆく

この上は主の大神の御心に

任せまつりて時を待つべし

何事も神の心のままなれば

われ一言も言擧げはせじ

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

美味素の高天原より下ります

主の大神の功尊き

主の神の靈の光に包まれて

夜も明るき玉野森はや

月光は御空に高く冴えにつつ

松を透して吾等を照らせり

白梅の花のよそほひ見るにつけ

玉野の比女の俣ばれにける

眞言嚴の神は御歌詠ませ給ふ。

はろばろと岐美に仕へて吾は今

玉野の森の月に照らさる

眞鶴の國土を造ると言靈の

水火清めたり玉の泉に

主の神の天降り給ふと聞く丘に

眞鶴の聲高く聞ゆる

主の神の生言靈を畏みて

此處に来つるも國土造るとて

常磐樹の松苔むして天津空

閉せる森に歡びあれかし

かく神々は述懷を歌ひ給ひ、
時を待たせる折もあれ、
太元顯津男の神は、
玉野

比ひ女めの神かみ、生い代く比よ女ひの神め、待まち合あ比は古せの神ひ、其そ他た數あ多またの神か々がをしたがへて、悠い々うと丘をかを
下くだり、諸しよ神しんに敬けい意いをへう表へし給たまひ、再ふび丘をかのうへに一ひと柱はしらも殘のこらず導みちき給たまひ、いいよいよこ
ここに國く土に生うみの神か業わざに、諸しよ神しん力ちからをあはせて、從じ事うじし給たまふ事こととはなりぬ。ああ惟か神む靈ながらをたま
幸ち倍は坐ま世せ。

（昭和八・一〇・三一 舊九・一三 於水明閣 林彌生謹録）

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第七四卷 天祥地瑞 丑の巻

終り